令和6年度福島県地域創生総合支援事業（サポート事業）

第１回

会津塾

報　告　書

一般社団法人
会津地域文化藝術フォーラム

2025年３月

＜後援＞福島県立博物館　福島民報社　福島民友新聞社　福島テレビ　福島中央テレビ
福島放送　テレビユー福島　ラジオ福島

「会津塾」プログラム

1　開　　会　(10:00)　主催者挨拶等

2　第１部　基調講演（10:15～11:45）　＜会場：講堂＞

＜福島県立博物館企画展「ふくしまの酒造り」＆同テーマ展「酒をとりまく美術」とのコラボ企画＞

《 鼎　談 》 鈴木賢二氏・林ゆり氏（鶴乃江酒造）・大里正樹主任学芸員

『会津の酒と文化と暮らし』

～酒の神様、女性杜氏、博物館学芸員が語る会津の酒と文化と人々の暮らし～

コーディネーター：福島大学客員教授（会津文藝代表理事）髙野武彦

3　昼食休憩（11：45～13：10）

特別企画

以下の企画は 16 時 30 分まで開催しています。

利き酒体験（末廣酒造・鶴乃江酒造・大和川酒造・會津酒造）　＜会場：つきない＞

※「利き酒体験」は、お酒がなくなり次第終了です。

会津の福島県公式イメージポスター「来て。」集結＜会場：なんだべや＞

会津17市町村の観光パンフ勢ぞろい　＜会場：なんだべや＞

4　第２部　分科会（各分科会は同時間内の２つの分科会を自由に行き来できます（事前登録願います））

	第１分科会	第２分科会
ｺﾝｾﾌﾟﾄ	ふくしまの酒造り 酒をとりまく文化芸術と地域	創造的地域づくり ｺﾝﾃﾝﾂﾂｰﾘｽﾞﾑ等地域づくりと文化芸術
１時限 13:10 ～14:40	県立博物館学芸員と巡る 企 画 展『ふくしまの酒造り』 テーマ展『酒をとりまく美術』 県博学芸員が企画展とテーマ展を解説しながら案内する、参加希望者と共に、「見て・触れて・感じて・そして考える」企画 ※ 学芸員の案内はありませんが、2時限以降も、企画展・テーマ展はご覧になれます。 ※ 会津塾参加者は、2割引きの800円で参加できます。	映画と会津地域活性化 (1) 講　演（50 分） 映画「霧幻鉄道只見線を 300 日撮る男」の 安孫子亘監督がみた会津の未来 (2) 鼎　談（40 分） 「映画を活用した会津の地域振興」 安孫子亘監督 澁川惠男会津若松商工会議所会頭 髙野福大客員教授・会津文藝代表理事 ＜会場：講堂＞
休 憩 14:40 ～15:00	4つの蔵元（末廣・鶴乃江・大和川・會津の各酒造）の「利き酒体験」や、会津に関する「福島県公式イメージポスター『来て。』、会津17市町村の観光パンフレット勢ぞろい など、ご自由に楽しんでください。	
２時限 15:00 ～16:30	蔵元トーク　＜会場：講堂＞ 『酒と会津と男と女』 ＜パネラー＞ 大和川酒造　：佐藤彌右衛門氏 会津酒蔵　：渡部文一氏 福島県立博物館：大里正樹主任学芸員 ＜コーディネーター＞ 小林めぐみ（福島県立博物館専門学芸員）	＜みんなで座談会＞　＜会場：なんだべや＞ 「人口減少と会津の地域づくり」 ～髙野福大客員教授（会津文藝代表理事）から人口減少下での会津の未来構想についての話を聞きながら、会津地域の住民の皆さんと企業の皆さん、行政がどのように連携協力して、どう会津の地域づくりを進めていくのが良いのだろうかなど、会場の皆さんと自由に、楽しく未来語りをしていきます。

※　その他、福島県立博物館内の常設展や「さわれるけんぱく」で酒樽を包む菰（こも）を編む道具などに触れて体験してお楽しみください。

5　夜　学（１８：００～20:00）会場：ホテルニューパレス

鈴木賢二氏ほか講師の皆さんを囲んでの語らい

目　　次

＜挨　拶＞　　頁
主　催　者（一般社団法人会津地域文化藝術フォーラム　代表理事　髙野 武彦）-- 1
後援者代表（福島県立博物館館長　川名 義則＞ ---------- 3

＜第１部＞　基調講演
《鼎談》『会津の酒と文化と暮らし』 ---------- 4
～酒の神様、女性杜氏、博物館学芸員が語る会津の酒と文化と人々の暮らし～

＜第２部＞　分科会

◆第１分科会
１時限目：福島県立博物館の学芸員とめぐる企画展・テーマ展 ---- 27

２時限目：蔵元トーク「酒と会津と男と女」 ---------- 28

◆第２分科会
１時限目：講演　映画「霧幻鉄道只見線を 300 日撮る男」の
安孫子亘監督がみた会津の未来 ---- 53
鼎談　映画を活用した会津の地域振興 ---------- 64

２時限目：みんなで座談会「人口減少と会津の地域づくり」 ------- 77

＜特別企画＞
利き酒体験（末廣・鶴乃江・大和川・会津の４酒造） ---------- 107
会津の県公式イメージポスター「来て。」集結 ---------- 108
会津１７市町村の観光パンフ勢ぞろい ---------- 108

＜マスコミ報道＞
新聞記事等 ---------- 109

当日の会津塾来場者数　205名

第１回 会津塾

主催：一般社団法人会津地域文化藝術フォーラム
日時：令和６年１１月１６日（土）10:00～16:30
会場：福島県立博物館　講堂・なんだべや・展示室

◆　主催者挨拶

一般社団法人会津地域文化藝術フォーラム 代表理事
（国立大学法人 福島大学 行政政策学類 客員教授）　髙 野 武 彦

皆さん、おはようございます。
会津地域文化藝術フォーラム代表理事の高野です。
本日は、土曜日でお休みの方もいらっしゃると思います。お仕事の方もおられると思いますし、会津の各地で、多くの秋の行事が行われております。そうした中、この「会津塾」にお越しいただき、心から感謝申し上げます。
皆さん、スクリーンをご覧ください。
「会津はひとつ」この思いをしっかりともちながら、本日の「会津塾」を進めていきたいと思います。
御承知の方もおられると思いますが、私は１年７か月前まで、会津地方振興局長でした。２年間の在任期間ではありましたが、この「会津はひとつ」というスローガンを掲げて地域振興をしてまいりました。
「会津はひとつ」というＴシャツをつくり、本日も会場にお越しいただいておりますが、会津１７市町村長の皆さんと一緒にＴシャツ着て、この会津を会津というブランドに育てて、急激に進む人口減少の中で生き延びていこうと活動しておりました。
１年７か月前に、県を退職しました。４か月過ぎた夏に、会津地域の経済界の皆さんからお声がかかって、この「会津地域文化藝術フォーラム」を立ち上げました。今年２月から本格的活動を開始しています。
「会津塾」。塾ですから皆さんとともに考える場所です。
会津地域の地域課題は何か、地域の宝は何か、そしてどんな風に磨き上げていくか。今日は、そうしたお話をしたいと思います。
先程、急激な人口減少と言いました。今年４月に、人口戦略会議では、会津地域１７市町村のなかで、１３の市町村が消滅可能自治体となると予測されるという、衝撃的な情報が飛び交いました。これについては、第２分科会の２時限目で詳しくお話ししたいと思いますが、ここで問題提起をしたいと思います。
これまで行政、経済界の皆さんなど人口減少対策をかなりやってきました。少子化対策、雇用対策、移住政策、中山間地域の再生など、いろんな政策をやってまいりました。しかし、なかなか実効性が伴わない。
人口減少がもたらした大きな問題は何でしょう。若者の流出、特に女性の流出。そこに

原因がある。福島県でも本格的に対策に乗り出してきている。

私は、もっと根本的なところに問題があると思っています。そのことを会津地方振興局長として会津に着任してから訴えてきました。それは「誇り」です。英語でいえば「プライド」ですね。しかし、英語でなく、日本語の「誇り」が大事です。「プライドを捨てよ。」とはいいますが「誇りを捨てよ」とは言いません。「あいつプライド高いよね」と悪く言いますが、「誇り高き」と「誇り」は、良い意味で使います。だから「誇り」が大事なのです。

ここで、今、危機感をもちます。会津人の誇りを失いかけてはいないか。「会津には何にもなくて」って、つい言ってしまいませんか。私は、「誇りの空洞化」が起きているのではないかと危機感をもっています。少し詳しくお話ししましょう。

皆さん、ここで少し若返って、自分が今18歳の高校３年生になったと思ってください。今、就職を考える時にきました。さて、どこで就職しようか。これから、この会津でずっと働いて過ごしていく自分の人生を描こうとした時に、なぜか描けない。そういう高校３年生の皆さんが多いのです。

一方、大学に進学した。大学３年生になった。就職活動を始めた。両親は会津に帰ってこいという。しかし、ふるさと会津に帰って会津で一生を過ごす自分の人生の絵が描ない。

この会津で生まれた。高校生まで過ごした。さて、これから先、この会津で働き、暮らし続ける意味は何だろう。東京の大学を出た。故郷会津に戻ろうか。はて、その答えが見いだせない。こうしたことを「誇りの空洞化」といいます。

縄文時代から会津の歴史は育まれ、豊かな自然によって、様々な美味しい農作物がとれ、それが特産物になり、様々な生活の知恵、工夫から伝統工芸が生まれ、それが流通して、これまで会津は全国にその名を広めてきた。

私たちには誇れる自然、歴史、文化、風土、産業、地域の宝、そして会津の人々がいる。もう一度その誇りを取り戻そうではないか。

誇りをもつと、その誇りを守ろうとする。さらにその誇りを磨こうとする。そこに挑戦が生まれるのです。誇りをもつことは未来への挑戦となる。

人口減少対策には、これまでの少子化対策や雇用対策、移住対策と併せて、この「心の空洞化」対策を車の両輪としてやっていかないと本当の人口減少対策になっていかないと私は思います。そうしたことを皆さんと一緒に考えながら一緒に汗をかいていきたいというのが「会津地域文化藝術フォーラム」です。

会津の誇り、その一つに「お酒」があります。

記念すべき第１回の「会津塾」。この「会津の酒」を基本テーマとしました。

ちょうどこの福島県立博物館で「酒」をテーマとした企画展・テーマ展が行われることを聴き、川名館長にご相談申し上げたところご快諾いただけました。そして、福島民報、福島民友、福島テレビ、福島中央テレビ、福島放送、テレビユー福島、ラジオ福島のマスコミの皆さんからも後援をいただけ、本日の開催となりました。皆様方に心から御礼申し上げたいと思います。

私の挨拶はこのくらいにいたしまして、本日、ご協力いただきます、福島県立博物館の川名館長から御挨拶を賜りたいと思います。

川名館長、よろしくお願いいたします。

◆　福島県立博物館館長挨拶

館長　川 名 義 則　氏

皆様おはようございます。

第１回目となる「会津塾」が当館で開催されますこと、大変、喜ばしく思います。皆さま御承知のとおり、会津地域文化藝術フォーラムさんにおかれましては、文化芸術で会津地域の創造的な地域づくりを目指すという活動をされていらっしゃいます。

ここで、博物館を取り巻く状況をみますと、昨年４月の博物館法の一部改正によりまして、博物館には従来の資料の収集・保存・調査研究・展示といった基本的な活動に加え、関係機関と連携しながら文化振興、文化観光、地域活性化そして地域課題の解決をしていくということが期待されるということになりました。

そういたしますと、会津地域文化藝術フォーラムと県立博物館の目指すべき方向というものは一致しているということになります。

今年度は、県立博物館を拠点とする文化観光の取組である「三の丸からプロジェクト」の一環である「雪国ものづくりマルシェ」を会津地域文化藝術フォーラムと当館が連携して春と秋に開催いたしました。

当館といたしましては、会津地域文化藝術フォーラムをはじめ関係の皆さんとしっかりと連携しながら、引き続き文化振興、文化観光、地域の活性化などに取り組んでまいりたいと考えております。

福島県立博物館として、博物館が一体何ができるか、県民の皆さんが何を期待されているのかという部分をしっかりと認識しながら取り組んでまいりたいと思います。

結びに、本日の会津塾の主要なテーマの一つが「お酒」ということでございます。

只今、髙野代表理事から御挨拶がありましたが、プログラムをみますと、基調講演を始め、当館学芸員による企画展・テーマ展の解説、利き酒体験などもございます。実際に日本酒のことを「見て・聞いて・学んで」そして実際に「味わって」ということで、お酒の魅力を深く堪能していただければと思います。

本日一日、どうぞよろしくお願いいたします。

＜第1部＞　基調講演（10:15～11:45）　　＜会場：講堂＞

《 鼎 談 》『会津の酒と文化と暮らし』

～酒の神様、女性杜氏、博物館学芸員が語る会津の酒と文化と人々の暮らし～

＜登壇者＞

福島県酒造組合　特別顧問　鈴木 賢二 様

鶴乃江酒造株式会社　専務取締役　林　ゆり 様

福島県立博物館　主任学芸員　大里 正樹 様

＜コーディネーター＞

福島大学客員教授（会津文藝代表理事）髙野武彦

＜高野客員教授＞

ちょうど時間となりました。

本日の基調講演「会津の酒と文化と暮らし」を開催したいと思います。

改めまして、私、会津地域文化藝術フォーラムで代表理事をしております高野と申します。本日の司会進行を務めてまいりたいと思いますが、もう一つ福島大学の客員教授という立場もございます。本日は、福島大学の立場で、皆さんとの議論を進めていきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

（基調講演趣旨）

この基調講演の趣旨は、私と川名館長の挨拶で申し上げました。繰り返しは申し上げませんが、福島県の日本酒、皆さんもご承知の通り、全国新酒鑑評会で 9年連続「金賞」、全国第１位を９年間続けたという大偉業を成し遂げました。そして、この偉業は、やはりここにいる「酒の神様」こと鈴木賢二先生の賜物と思っております。

９連勝の後、１０連勝にはならなかったのですが、今年はわずか１つの差で第２位でした。これを入賞した数でみますと３１で、この入賞数で見ますと全国1位です。また、今年、金賞を取った１８銘柄中、実に１４銘柄は会津の酒でございます。本当に日本酒は「会津の誇り」です。

このお酒。冠婚葬祭はもとより、地域の「祭り」、事業の開始の時やお祝い事など、私たちの暮らしに欠かせないものでございます。また、多くの杜氏の皆さんや従業員の皆さんとともに、様々なしきたりであったり、地域とのつながりであったり、地域の文化の育

成・保全など、蔵元さんたちが果たしてきた役割というのは、大変大きいものがあると思っております。会津のお酒は、これからの会津の未来に、大きな役割を果たし続けるものと期待できると思います。

こうした考え方から、これから「会津の酒と文化と暮らし」をテーマにして「鼎談」という形で進めていきたいと思います。

今日は、鈴木賢二さん、林ゆりさん、大里正樹主任学芸員の三人の皆さんからお話をいただきしながら会場の皆さんと共に考えていきたいと思います。

それでは、まずは皆さんよくご存知だと思いますが、鈴木賢二さん、林ゆりさんの順で自己紹介をお願いしたいと思います。

それでは、鈴木賢二さんよろしくお願いいたします。

１　自己紹介（パネラーの皆さんとお酒）

＜鈴木賢二氏＞

皆さんこんにちは。

福島県酒造組合特別顧問、福島県日本酒アドバイザーの鈴木賢二と申します。

私の名前、鈴木賢二でございますけれども、生年月日が１９６１年９月２６日生まれで、現在６３歳です。出身は田村郡三春町です。現在は磐梯町に住んでおります。

私は、昭和６０年に、岩手大学を卒業し、卒業と同時に、たまたま福島県職員に合格しまして、最初の赴任地が会津若松市にある福島県会津若松工業試験場でした。今の高田橋のたもとに生協がありますが、その隣に会津若松工業試験場はありました。

所属は、食品部食品化学科というところでした。１０年間、味噌、醤油などの担当でした。面白かったですね。その当時、「一村一品運動」というのがありまして、只見町から危険だと言われていた「飯寿司」を安全につくりたいという話があり、研究しました。

さらに、こんにゃくの加工、ブームとなった喜多方ラーメンのおみやげ品の開発や、そのラーメンスープの開発などをしていました。

そこで10年ぐらい働いておりましたら、福島県工業試験場から福島県ハイテクプラザに組織が変更になりました。

私は、それまで食品化学科というところにいたのですが、隣にお酒を担当している醸造科というところがあり、組織改編でこの２つが統合することになり、醸造食品科となったわけです。そのとき、お酒の担当の方が一人退職されたんですね。その当時は、県職員の募集では、どんな人がやってくるかわからない状況でした。一番困るのが、お酒の担当にお酒が飲めないという方が来てしまうことなんです。このお酒の飲めない方は、だいたい日本人には１０人に1人ぐらいはいるようですね。お酒を分解する酵素というのは人間には４つあるらしいです。そのうちの一つが欠けていると飲めないとなるらしいです。そういう方が入られると困るなということになりまして、「おまえは、お酒がぶがぶ飲むから

やってみっか」ということになって、お酒の担当にさせられてしまったんですね。それが平成５年です。それからずっとお酒の方に関わっているもんですから、私はもう３０年ぐらいこのお酒の方に関わらせていただいております。それでハイテクプラザの中でお酒の方をいろいろ担当させていただきました。そして、無事に令和4年に退職となりました。

いや～、髙野さんを前にして言うのもなんですが、公務員ってやってるもんではないですね。（会場笑）いや～ホントに、辞めて良かったと思っています。本当は、県に再雇用という手もあったんですが、僕はもういやだなあと思いまして、フリーになりたいということでおりましたら、酒造組合さんからお声がかかって、顧問契約という形になりまして、こうして特別顧問を務めております。

何が公務員を辞めて良いのかといいますと、講演依頼がたくさん来るんですね。県職員時代も講演依頼はありましたが、１／３くらい上司から「断れ」と言われてしますんです。「営利関係にあるとダメです」となってしまうんです。会場に東邦銀行の北村元頭取がいらっしゃいますが、銀行からも良く講演依頼がくるんです。銀行の何に呼ばれるかというと、正月の「お客様会」なんですね。そこでの講演をお願いされるんです。講演の内容はお酒なんですが、その後、懇親会があります。

この講演依頼は、大抵は酒蔵を通じてあります。銀行さんを怒らせてしまいますと酒蔵さんがお金を借りられなくなると困りますから、これは引き受けなくてはならないと受けてきました。（会場笑）

しかし、上司によっては、「これは銀行さんの営利目的だ」と始まってしまうんですね。それで「ダメだ」となってしまったり。現在はそういうことはなくなりました。気持ちよく、日程が合っていればこうして出かけてきています。大変楽しくやっております。

昨日も酒蔵に行ってきました。なんで行っているのかといいますと、杜氏さんが高齢化して来られなくなったというところが多いですね、そういうところに行ったりしています。福島県のお酒が美味しくなったその「カギ」については、後ほどお話したいと思います。今日はよろしくお願いいたします。

＜髙野客員教授＞

鈴木賢二先生、どうもありがとうございます。私も県を退職してからの方が楽しいなと思っております。（会場笑）

続きまして、林ゆりさん、お願いいたします。

＜林ゆりさん＞

皆さんこんにちは。

七日町にあります鶴乃江酒造からまいりました、林ゆりと申します。

私はこうした講演会、大変苦手でございまして、先生たちのように上手くしゃべれないので、とても緊張しておりますが、先生方のお力を借りて、今日は皆様の前でお話をさせていただきたいと思います。

私ども鶴乃江酒造は、ちょうど２３０年ほど前から七日町

で商売を始めている酒蔵です。私の父で7代目になります。本来ですと弟が継ぐ予定だった酒蔵ではあるんですが、私自身も　お酒造りに大変興味があったことと、弟もちょっといろんな諸事情があって会津に帰らない道を選んでしまいましたので、私たち夫婦で今の鶴乃江酒造の酒造りを引き継いでおります。

鶴乃江酒造のお酒は「会津中将」という会津のお殿様の冠位を表すものが代表銘柄となっております。この「会津中将」は私どものベテランの杜氏を製造責任者として造っている商品です。鶴乃江酒造は、私と母も杜氏の資格を取りまして、一緒になって酒造りをしている小さい規模の酒蔵でございます。そういった中で、「会津中将」と私の名前をつけた「ゆり」という商品の２つを二大銘柄として、本来の「鶴乃江」という銘柄も含めて酒造りを行っております。

本当に小さい酒蔵でございますので、昔ながらの設備のまま、会津の寒さを利用した会津のお米、会津の良質なお水を使った昔ながらの手作りの作業で酒造りを行っております。

実は、今日はもう１本目の大吟醸の仕込みがあるので、ちょっとドキドキしながら来ているところでもあります。例年の温暖化だったり、夏の気温の暑さであったり、春と秋が短くなったことなど、色々な状況が変わってきておりますが、やはり、会津のお酒というものは「会津の文化」だと思っておりますので、そういったところを継承しながら酒造りの方を頑張っている状況でございます。

今日は最後までどうぞよろしくお願いいたします。

＜高野客員教授＞

林ゆりさん、どうもありがとうございます。

続きまして、大里正樹主任学芸員にお願いしたいと思います。

ところで、大里さん。先ほど福島県立博物館の企画展・テーマ展の担当であるというご紹介もしたところでありますので、自己紹介と合わせて、今回の企画展・テーマ展の趣旨とか経緯、見どころなどのお話もいただきたいと思います。

それと、会場の皆さん。実は、大里さんは、先日、佳子様が会津にいらっしゃったときに、福島県立博物館の中で佳子様をご案内したのが、大里さんでございます。佳子様に説明されるくらい素晴らしい学芸員ということでございますので、どうぞよろしくお願いします。

＜大里正樹主任学芸員＞

大変過分なご紹介をいただきまして恐縮でございます。福島県立博物館の学芸員、民族の担当をしております大里正樹と申します。鈴木先生の真似をいたしますと私は「発酵の日」８月５日の生まれです。

現在、「福島の酒造り」というテーマ展を開催しております。昭和６１年の開館以来、初めてお酒に関する企画展の企画をさせていただき

ました。１２月１日までの開催です。皆様のお話を伺いましてもお酒というのは大変に間口の広いテーマでございます。今回の展示も、私は民俗学ですけれども、歴史分野、美術分野も関わっての展示でございます。そして今回、このように会津文藝さんのお力も借りまして、鈴木賢二先生のお話を聞いた後にお酒も飲めるという、本当に夢のような企画が実現したこと、本当にありがたいことだと思っております。

企画するにあたりまして、福島県立博物館でやるという点で申しますと、分野合同でお酒の文化を発信できることはいいだろうということがございました。こちらについては「なじょな」という博物館のパンフに顛末が書いてあるんですけれども、学芸員として、酒をテーマとした展示会は以前からやりたいねというお話はみんなでしておりました。そして、いろんなことがあったんですけれども、ある新聞に蚕養国神社での「どぶろくづくり」の記事が載りました。そこでお問い合わせもありまして、よくよく調べてみましたら、どうも福島県に知られざる日本一があったんですね。

皆さん、「どぶろく祭」というとどの県が思い浮かびますでしょうか。ちょっと浮かべていただきますと、スーパーなんかでも売ってますね。「飛騨のどぶ」といいまして、飛騨の白川郷のどぶろくですね。岐阜県白川村です。村という規模もあるのですが、５つの神社が酒造免許を取っています。酒を造ることができる神社です。３つの神社が２日ずつ「どぶろく祭」を開催しますので、１週間滞在していると本当に飲んだくれることができるというようなお祭りです。打ち出し方がうまい。あとは人口密度的な部分で「どぶろく祭」が非常に多いというところで飛騨に持っていかれてる感じがするんですけども。実は酒造免許を持ってないと神社といえどもお酒を醸すことはできません。

そうした中で日本全国、明治時代の終わりに酒税法の改正に伴って、それ以後に４７の神社が酒造免許を取得しています。なんとその中で１３の神社が福島県にあるということがわかっております。南相馬の３神社は止めてしまいましたが、残る１０の神社は、現在も酒造免許を持っていてお酒を醸しておられます。会津若松市の蚕養国神社。南会津の田出宇賀神社、猪苗代町の小平潟天満宮、いわき市ですと国魂神社、その他にも福島市内とか喜多方市内にもたくさんございます。そうしたこともあり今回、企画展の開催となったところです。そのほか、閉館されて長くなりましたが材木町の会津酒造博物館さんから会津若松市指定文化財の資料などのご協力をいただき展示をさせていただいております。

そうした展覧会の中に展示している資料を、会場の皆様の方にもお配りをしておりまして、この辺りについて、林さんにもお話を伺いたいです。

あと、こちらは歴史分野の学芸員である栗原学芸員が調査した記録もお配りをしております。

全国新酒鑑評会金賞受賞数９回連続日本一という福島県ですが、過去はどうであったのかということについて、２つの鑑評会品評会が一つになったと伺っております。明治時代から現代までの移り変わりも記載しております。鈴木先生の清酒アカデミーの設立が本当に功を奏しているのだなあという結果もみることができますので、そちらも鈴木先生にお話を伺いたいところです。

ありがとうございます。

２　酒蔵と神社仏閣と地域

＜高野客員教授＞

どうもありがとうございました。

皆さんの席の前のテーブルを前に倒すとライトがパッと光るので、細かい資料も見やすくなるかと思います。ちょっと見づらい方、そんなふうにして使っていただいてもよろしいかなと思います。

今、４７神社あるうちの１３が福島県の神社であったというお話をいただき、お酒と地域振興ということについて、大変興味深いものがあるなあと思います。

ここで、鶴乃江酒造さんからは、２３０年という長い歴史があるというお話もありました。祭りとか消防団の活動とか、お酒って欠かせないものでございます。やはり酒蔵さんとしても、神社仏閣とか祭りとの年中行事との関わりというのは大事なところだと思うんですけども、そうした様々なしきたりや歴史、地域との関わりとか何かありましたら、鶴乃江酒造さんからお伺いしたいんですけれどもいかがでしょう。

＜林ゆりさん＞

酒造りと神様とは、やはりつながっていて、とても重要だなと常日頃思っておりました。

私どもの酒蔵にも、松尾様というお酒の神様が祀られております。お酒造りが始まる前の醸造祈願といたしまして、例年、冬の季節で杜氏さんも含めて蔵人さんたち、今正社員も含めた酒造りになっておりますが従業員の全てが集まります。そうしますと、今年1年のお酒造りが無事に行われるようにと、お祓いをして、お酒造りに臨んでおります。常日頃、やはり商売に関しましても、作業上におきましても、事故なく怪我なく作業ができますようにと、毎朝、うちの父や母などは、松尾様とその他お稲荷様、もちろん　母屋の方の神棚にも朝のご飯と御神酒を毎朝毎あげて拝んでおります。小さい頃からそのような姿は見て育ってきました。やはり、目に見えない神様の力っていうのはお酒造りにとても影響があるんじゃないかなっていうふうに育ってまいりました。

そういった中で、やはり地域のお祭りだったりとか、いろんなお祝い事に関しましてもお酒って欠かせないものだと思います。御神酒だったり、祝い酒だったりそういうところに日本の文化としても欠かせないのが日本酒なのかなと感じております。

また、冠婚葬祭でもそうですし、鏡開きだったり、お祝いの席には欠かせないのもお酒でございます。

会津若松市内の各町内では、毎年７月１日から会津若松市内では「お日市」というのがあって、各地域の小さい神社仏閣でもお祭りなどが行われているような文化があるんですけれども、そういうところにもやっぱり振る舞い酒だったりとか、何かとお酒は関わっているのかなと感じております。

私どもの七日町通りのそばに北小路通りという通りがあるんですけれども、そこにある長福寺の「おんば様」が　7月1日の「お日市」のお祭りのちょうど始めになりまして、やはり子ども心にもお祭りって何となくワクワクするような、みんなが集まる楽しい場所、プラスちょっと神聖なものっていう記憶があります。こうしたことも、子どもの頃から親しんでいた神様とのつながり方かなとも思っております。

七日町の方でも、毎年８月には町内のお寺と神社が一緒になってお祭りなど行いますので、そういったところでお酒というものとのつながりというものを子どもの頃から 体感しているような文化があるのかなと感じながら育ってきておりました。皆様の地域ではどんな感じなんでしょうか。

＜高野客員教授＞

ありがとうございました。

キーワードは「つながり」だったと思います。子どもの頃からの時間軸でのこの「つながり」があって、そうしたことが「文化」だっておっしゃっていただきました。

先ほど、私の挨拶の中で「誇り」という話をしました。その「誇り」というのが小さい頃からの「地域とのつながり」とか、「文化」になってくるんじゃないかなと思います。今、大変良い話を聞かせていただいたと思います。

３　全国新酒鑑評会９年連続日本一の偉業を成し遂げた福島の酒の技術

＜高野客員教授＞

それでは、今日は、会場の皆さんも聞きたいことといっぱいあるので、次の話題に移っていきたいと思います。

やはり一番今日集まっている方々が知りたいところは、酒造りの技術のお話だと思います。

どうして９連覇ということがやれたのかというところが、鈴木賢二さんから聞きたいなって皆さん思っているところだと思います。

最近の報道では、日本酒とか 焼酎が「伝統的酒造り」として「無形文化遺産」に１２月には決まるんじゃないかという明るい話題もあります。伝統的酒造りと現代の技術とでどういう風に磨き上げてきたのかお話いただきたいと思います。実は、企画展とテーマ展では、現代の技術の話はしてないんです。そんなところもあって、今ここで現代の技術の話を聞けるのは会場の皆さん、本当にラッキーなことだと思います。

それでは、鈴木賢二さんがこれまで福島県の酒のレベルをどうやってあげてきたのか、多くの皆さんに親しまれるお酒というところにどのようにして持っていくことができたのか、１０分くらい、じっくりと話をしていただきたいと思います。よろしくお願いします。

＜鈴木賢二さん＞

わかりました。歴史をひもときながらお話をしたいと思います。

私、先ほど平成５年に味噌醤油の方からお酒の方の担当に変わりましたというお話をしました。酒造りについて、いろいろ勉強するんですけども、その当時、私の上司には3人いたんです。こういうときどうすれば良いのか、上司にそれぞれ聞きます。３人とも違う答えが返ってくるのが結構あるんですよ。なので、酒造りって本当にそれだけはっきりした答えがないっていうこともありますね。それで、なかなか酒造りが覚えられなかったんです。最初の２～３年は全然わからなくて、ちょっと困っていたところに、たまたまなん

ですけれども、平成４年から福島県では清酒アカデミーというのが始まっておりました。そしてもう一つ、「高品質清酒研究会」といいまして、通称「金取り会」って言いまして、金賞を取るための会が平成７年にできました。

ちょうどその時に、僕がうまく入りまして、皆さんと一緒に勉強させていただいた中でその高品質清酒研究会で、たまたまですが、新潟県の元醸造試験場の広井忠男場長さんに出会ったんです。広井場長さんは、会津坂下町出身で、新潟大学に進学されて、新潟県職員になってそちらの場長までやられたということです。非常に明るい良い方なんですけども、この方が素晴らしい講演をされまして、「こうすると金賞取れるよ」っていう話をちゃんとしたんですよ。これが素晴らしいと思いまして、折角、こういう風に教えてもらったんだから、そのとおりやればいいんじゃないかと思って、私もいろいろ試させてもらいました。そうすると非常に効果がある場所と、ここはたいしたことないなという場所と２パターンがあり、そこを上手く取捨選択しました。これにプラス、平成10年ぐらいからなんですけど、酵母が変わってきたんですよ。専門用語で申し訳ないですが、平成１０年ころ前までは、ＹＫ３５とか、ＹＫ４０っていう言葉がありまして、Ｙが山田錦、Ｋは協会９号です。３５とか４０って精米具合なんです。つまり、山田錦を３５％か４０％まで削って、協会９号酵母で醸せば金賞が一番取りやすくなるよっていうことです。この協会９号っていうのは、発酵力がとても強いんですね。ところが、なかなか香りが出ないんです。そこに新しい酵母が出てきまして、これはまるで真逆で、香りは気持ちよく出してくれるんですけど、発酵力がめちゃくちゃ弱いんですよ。ですから、ベテランの杜氏さんがうまく使いこなせなかったということがありました。

面白いことですけど、実は味噌の世界にも鑑評会があるんです。一番上が「秀」２番目が「優」というようにありまして、味噌の世界で「秀」をとるにもポイントっていうものがあるんです。それは何かといいますと、「国産大豆を使いましょう。皮を剥いた大豆を使った方が、色が白くなりますよ。大豆で作った麹を入れると赤みがきれいに出ますよ」と、ポイントがあるんですよ。だからそこをきちんとやればいいはずなんです。

だから私は、酒造りにも絶対に金賞を取るためのポイントあると思ったわけです。それが、広井先生によって全て解き明かされて、うまく酵母も変わったもんですから、今までの酒造りとガラッと変わった方がいいよということで、平成１４年に私がマニュアルというものを作らせていただきました。

マニュアルまで作らせていただいたんですが、酒造りの人って本当に素直じゃないんですよ。マニュアル渡して自分がやっていることと同じことが書いてあると、「うん、そのとおりだ。間違っていない」って言うんですが、違うことが書いてあると、「ここは違うな」って、結局変わらないんですよ。（会場笑）

ところが幸いなのは、福島県には岩手県から来ている南部杜氏、新潟県からの越後杜氏、地元の会津杜氏というのがあって、この会津杜氏会の会長が末廣酒造の佐藤さんで、この佐藤会長が私のマニュアルを「いいよ」と言ってくださったんです。そうしますと会津杜氏会にワッと広まりまして、そこから会津杜氏の成績がグッとあがりまして、皆さん真似するんですよ。（会場笑）

マニュアル作ってから４年かかりましたが、日本一には平成１８年になったんですよ。そうなったら皆さん自信を持っていただいて、それで今に至っているのかなと思います。

面白いのですが平成１８年に初めて日本一になりましたけど、実は私も日本一になると思ってなかったんです。なぜかって言うと新潟県って私ども福島県の出品数の１．５倍あるんです。福島県は４０くらいなんですが、新潟県は７０くらいなんです。だからなかなか新潟県を抜かせないと思っていたんですが、簡単に抜いてしまったんですね。その気になればできるのかなと思ったんです。

ただ、そのときも面白くて、全国の酒造業界では、絶対フロック（まぐれ）だと思われてしまいました。福島県が１位になるなんてあり得ない。間違いは誰にでもあるよと思われていたんです。私も信じられなくて、折角１位とったんだから、来年も１位をとろうということでがんばったんですよ。残念ながら２位だったんですが、１位とった時が、金賞２３だったんですが、２位のときは２１だったんです。２年連続で２０以上とるというのは、本物だっていうことになって、そこから全国に講演活動が始まったんですね。

平成２１年に、面白いことがありました。南部杜氏鑑評会というのがありまして、南部杜氏の方々が出品して競い合う鑑評会なんですが、何が面白いかといいますと、全国と違って順位発表するんです。上位１５人の杜氏さんが表彰されるんです。その１５人中、７人が福島県の杜氏さんだったんです。そのときの１位が、名倉山さん、２位が吉野川さん、３位が稲川さんと、一説にはハイテクプラザに近い順だとも言われました。（会場笑）

そこから、南部杜氏さんも私の言うことを聞くようになりました。慕われて幸いになりました。先生として容認していただけるようになりました。私からは以上でございます。

＜高野客員教授＞

楽しいお話ありがとうございました。

最初はお酒の専門家ではなかったんですねえ。専門家でなかったところで苦労されたことってありますか？

＜鈴木賢二さん＞

そうですねえ。折角ですからアドバイスはどんどんしていきましょう。そうしますと、余計なこともいっぱい言うもんですから、実は間違っていることを言うこともあるんですよ。成功ばかりじゃないんです。

（鶴乃江酒造の林ゆりさんをみながら）

ご迷惑をおかけしたこともあると思うんですけど。

（林さん、少し微笑む）

そのときは、真摯に謝ることとしています。そのとき、蔵の方から言われるのは、「自分たちも本当に困っているときに、アドバイスをお願いしたんであって、自分たちもどうしていいかわからないから、先生に判断してもらって、それが間違っていたって仕方がない」と言ってくれまして。

真摯に謝ることで、信頼はいただけたかなと思っています。

＜高野客員教授＞

素直さが大事ということですね。いろんなところに通じる話だと思います。

それでは、林ゆりさんにお聞きしたいと思います。先程、清酒アカデミーの話がでてき

ましたが、そこで学ばれたゆりさんとしてのお話をお聞きしたいと思います。（鈴木先生のお話で）先程笑いもあったところですが、清酒アカデミーでのエピソードなどもお聞かせいただきたいと思います。また、女性がつくる女性のためのお酒「ゆり」についてもお聞かせいただきたいと思います。

４　清酒アカデミーでの学びと女性がつくる女性のためのお酒

＜林ゆりさん＞

私としても鈴木先生には、清酒アカデミー時代に大変お世話になりました。鶴乃江酒造は、先々代の杜氏が清酒アカデミーの第１期生で、母が第２期生で、私と夫である社長が５期生でお世話になって、その後、社員が代々清酒アカデミーでお世話になっております。

私が、清酒アカデミーでお世話になっていたころは、まだ先生は「神様」と呼ばれていなかった頃でした。先生と一緒に清酒アカデミーの勉強会で酒を組み合わしていた思い出の方が多いです。楽しかったですね。

その後の先代の杜氏が鈴木チルドレンと呼ばれて、かつ先生からは鈴木チルドレンの優等生と呼ばれるくらい、鈴木先生には大変お世話になっている酒蔵でございます。

先程、先生もいろいろ各蔵からアドバイスをいただいたというお話をされておりましたが、私ども酒蔵の方も先生からその都度アドバイスをいただき、その日の絞るタイミングだとか、アルコールの添加量とか非常に細かいところまでお世話になっておりました。先生のお力を借りて、正月から蔵に来ていただいて、本当にもうお酒を絞るアドバイスをいただきながらそのまま作業を手伝ってもらって、粕むきまでやっていただいて、本当に蔵としても鈴木先生には大変お世話になっております。

本当に清酒アカデミーで勉強したころから、われわれ蔵の方でも、勉強しただけでなく、そこでの人間関係を築いたことが大きいと思います。福島県全体のチームワークがありますね。福島県すごくレベルアップしましたが、一つ一つの蔵の頑張りではなく、福島県の酒蔵さんは横のつながりを大切にする絆があり、よその蔵で何か困ったことがありますと手を差し伸べ合ったりとか、勉強したことや得た知識をそれぞれ情報交換したりと、清酒アカデミーで培った人間関係プラスというものがあるのかなと感じております。

各蔵で伝わっている技術にプラス、先生方から教わった根拠のあるしっかりとした技術の学びがあって日本酒の酒質がレベルアップしてきたのかなと思っております。

私自身も本来は弟が継ぐ予定の蔵で、もともと酒蔵は女人禁制のところがあって、先程も少し申しましたお酒の神様の松尾様が女性の神様なので、女性が入ると空気が乱れるとか、神様が焼き餅を焼いてしまうとか、というような話がありまして、私も小さい頃は、祖母達は蔵に近寄らなかったと聞いております。その分、住み込みで来てくださっている蔵人さん達の食事など、まかないとしての食事を提供することが酒蔵の女性の仕事だったと聞いております。

私ども鶴乃江酒造も、私が子どもの頃から高校生くらいの時までは、金山町から集団できてくれている杜氏さんが４～５人、冬の出稼ぎという形でうちの蔵に来ていただいて、春には帰られるということを続けておりました。

そうした中、来てくださっていた杜氏さんが作業の途中で亡くなって、その日の仕込みをどうするかということがあって、杜氏さんしか指揮を執れない状況にあって、その当時は父が農大の醸造学科を出ていましたので、教科書を片手にその日のしこみを乗り切ったということがありました。

こういう話を子供心に聞いておりましたので、漠然に農大に行ってお酒造りというものを学べば、いざというときにうちの蔵で役に立つのかなあと言う思いで、農大を考えたのが最初のきっかけでした。

そうした中、私が農大に進学している間、住み込みをしていた蔵人さんたちも、高齢化ということもあり、うちは住み込みをやめたのですが、蔵人さんたちは必要だったので、車で通える範囲の蔵人さんたちによる酒造りにシフトしていったのです。その際に一番困ったのが、麹づくりでの夜の作業でした。今までもお酒造りには温度管理が大事なのですが、その中でも麹づくりが丸二晩かけてゆっくり麹菌を繁殖させていく工程であります。これを住み込みでやっている頃には夜中に杜氏さんたちが何時間おきに行って手入れとか、作業をするということができたのですが、住み込みをやめてしまったときに、我々身内、蔵元の方でカバーしようとしたときに、まずうちの母が、麹造りを担当して蔵に入ることになりました。

その頃、「女性が・・・」というところはあったのですが、どうしても人手不足ということと必要に迫られてというところであります。

うちの母、酒粕でも酔っ払ってしまう下戸なんですけれども、本当に利き酒も真っ赤になりながら、利き酒が終わってからも舌に残る余韻で「あとお願いね～」と寝込んでしまう状況でして、先程、鈴木先生が言っていた分解する酵素のない人間でした。

最初はアカデミーが始まる前でしたので独学でした。まあ、通信講座はありましたので、それで勉強しながらだったのですが、そうやって酒造りを学び、結局今も思っているのですが、鶴乃江酒造に嫁いだ身でしたので、「嫁いだ以上は残さなくちゃ」というお思いが非常に強かったのだと思います。娘の私以上に「家を守らなくちゃ」という思いが強かったと思っておりました。

父や母が一緒に酒造りに取り組んでいく姿、背中を見て育ってきたなあと思うのですが、そこにプラス大学時代に学んだ酒造りのイロハがあります。やはり目に見えない微生物が、お米からこんなに香りの良い物体を生み出すという、本当に神秘の世界、目に見えない世界にとても魅力を感じまして、自分でも作ってみたいという思いで、いろいろ就職の手段はあったのですが、私としては、そのとき人手不足というものもありました自分の家に就職ということを選びました。東京の大学にいきましたが、会津に戻ってきました。

そこで一番最初にご縁があってお話をいただいたのが、東京の百貨店さんだったのです。鶴乃江酒造では、お酒造りが終わると物産展などで売りに出ておりました。当時学生だった私は、お金がなかったので、アルバイトがてら販売を手伝っていたんですね。売り場のバイヤーさんとか担当者さんと話していて、会津に戻って酒造りをしますなどと話しておりましたところ、ちょうどＮＨＫで『甘辛しゃん』という朝ドラがあって、西日本の震災の時の酒蔵のお話だったんですけれども、女性が酒蔵を継ぐというテーマの朝ドラでしたので、ちょうど時期的に話が重なるということで、「女性が造った女性にお勧めのお酒を造ってみませんか」という企画をいただいたのが一つのきっかけでした。

私もまだ大学で勉強しただけの身で、母やその当時の杜氏さんたちに教えていただきながら、まずはどのようなお酒をつくろうかなというところから始まりました。一番は福島県のものにこだわりたかったんです。そのとき作付面積が一番多かった五百万石というお米をつかいました。福島県もいろいろ酵母の開発も進んでおりましたので、そのとき開発されていた「うつくしま夢酵母」という福島県オリジナルの酵母を使って、女性にお勧めということで、純米酒や本醸造よりも華やかな香りがたつ純米大吟醸を造ってみようという計画をたてて、一年目のぺいぺいではあるんですけれども、母とその当時の杜氏さんと一緒に私の一年目の酒造りが始まりました。

温度管理もある酵母は、お酒造りでは重要ですので、一年目の私に酵母をコントロールすることはとてもとてもできず、私が作ったというよりは、そのときは微生物の力をかりてお酒にしてもらったという感覚だったんですけれども、お酒の味わいも想定よりもアルコールが進みすぎてしまった辛口のお酒になってしまいました。私は、その当時は女性がお勧めするお酒ということでしたので、少し甘口のお酒を想定していたのですけれども、できあがったお酒は日本酒度もプラス５ある純米大吟醸としては結構な辛口だなあという感じだったんですけれども、当時は一本勝負だったので「これがこの年の酒です」ということで、デパートに詰めたお酒を持ち込んで、試飲販売会をするという売り方をしました。お客様に試飲をしてもらって何でも良いから感想をもらおうというところから始まったのですが、非常にお客様、辛口のお酒に女性の方も非常に高評価をいただきまして、本当に私自身も「始めて造ったお酒なので何でもいいので感想をください」と言って一人一人に注いでお味の感想をいただいておりました。

そして２年目、３年目とお客様の声をお聞きして今のお酒に仕上げていったという流れがあります。おかげさまで、私どものお酒づくりは長いこと私も携わってきて蔵人さんたちも育ってきてくれて、現在は、母は引退しましたけれども蔵のみんなが見守ってくれているんです。「会津中将」もおかげさまで賞をとれる機会をいっぱいいただけるようになり、安定した酒質ができるようになってきておりますし、「ゆり」の方は「会津中将」と比べると辛口路線でさわやかな香りを残す、すっきり爽やかな辛口というコンセプトで、２つのお酒のコンセプトを分けて酒造りを続けさせていただいております。

私自身、本当は名前もゆりが造った「ゆり」にしようというのではなく、その当時の代表銘柄が「会津中将」という硬めの名前だったので、女性に手に取っていただけるようにとひらかなでのネーミングを考えていたところ、私の名前がひらがなで「ゆり」なので、当時一年目の私にとっては自分の名前をつけることはとても恥ずかしいことでしたのですが、お客様としては、覚えやすいという声をいただいて、今となっては「私が造った私の名前のお酒です」ということで、お客様の反応もまずは足を止めていただけるというメリットを何年も感じておりました。

こういったところで、「ゆり」と「会津中将」の酒質も分けて造ってきているわけですけれども、「ゆり」の方は、お客様に認知されて３年ぐらいで消えるかなと思っていたのですが、２０年以上続く長い鶴乃江酒造の商品に皆さまに育てていただいたなあと感じております。今日の利き酒体験の方にも純米吟醸の「ゆり」を出させていただいておりますので、皆さま是非機会があれば飲んでいただきたいと思います。

＜高野客員教授＞
　ありがとうございます。本当に楽しいお話でした。
　微生物にすごい愛を感じているんですね。微生物のかわいさってどんなところにあるんですか？

＜林ゆりさん＞
　発酵しているときもやはりお酒に語りかけちゃうんです。

＜高野客員教授＞
　どんな風に？

＜林ゆりさん＞
　日頃からうちの若い蔵人さんたちにも言っているんですけれども、お酒は生きものなので、「おいしくなあれ」とか「がんばろうね」っていうふうに声をかけています。微生物に耳はないかもしれないけれども、発酵しているタンクも私が行くと急にモコモコモコって元気になるんです。なんか偶然なんでしょうけれども、そういうところに生きているなあって感じるので、お酒に愛があれば蔵人さんの作業一つ一つも「きれいにしなくちゃ」「ここの温度管理はきちんとしなくちゃ」というように思ってくれるかなあと思っています。みんなには「お酒は生きているからね～」「声をかけてね～」って伝えております。

＜高野客員教授＞
　では、これから利き酒で「ゆり」を飲むときにも「どんなお声をかけてもらって育ってきたのかなあ」と思いながら飲むのも楽しみですね。

＜林ゆりさん＞
　飲む方は、皆さんのお好みに併せて飲んでいただければと思います。

５　会津の酒蔵のネットワーク

＜高野客員教授＞
　今、鈴木賢二さんと林ゆりさんのお話を聞いていて、やはり９年連続金賞受賞という記録を作ったというのも、人間関係が続いているというところと、酒蔵同士の横のつながりというのが文化のレベルまで引きあがっているのだなあと実感しました。
　日本一の技術をみんなで共有してやっていくという福島ならではの、会津ならではの素晴らしい日本一の文化なんだなと改めて感じました。
　その横のつながりについて、鈴木賢二さん何かご発言いただけませんか。

＜鈴木賢二さん＞
　そうですね。横のつながりということではないのですが、先程お話いたしました「高品

質清酒研究会」、いわゆる「金取り会」ですけれども、発足が平成７年で私もそこに入っていて、勉強させていただいておりました。

１０蔵くらい参加していて、その当時はＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄの４チームに分かれていたんですけれども、面白いことにそのチームごとにお酒をもってくるんです。しかし、開催当時は皆さんろくな酒を持ってこないんですよ。「これでは無理でしょ。こんなんじゃ金賞なんて無理でしょ」というような酒しか持ってこないですよ。

その中で１０蔵のうち１つか２つはお手本みたいな酒を造るんです。そういう蔵が必ずあるんです。なので、お手本の蔵がそこで先生になって、うちは酵母は何を使いましたよとか、最高温度は何度でしたよとか、何日に火入れしましたよとか、そうした技術を教えてくれて、そうして１年かかりますけど、次の年は皆さん反省しながら良くなってきたという経緯があります。現在でもそれが続いておりまして、お酒の世界ってすごくオープンなんだなって思いました。

６　会津の酒の歴史

＜高野客員教授＞

こうした会津の文化までに引きあがってきている会津のお酒です。大里さん、お二人からの話を聞いていて、そこにつながる会津の酒を育んできた歴史など、学芸員さんの立場からお話いただきたいと思います。

＜大里主任学芸員＞

私からは、お配りした資料ですが、お二人に関係する資料を持ってきました。

また、今日持ってきたお酒は「永寶屋」というこれも鶴乃江酒造さんから出しているお酒です。皆さんにお配りしたＡ４横の資料をご覧ください。企画展の展示室には実物がありますので、後ほどご覧いただきたいと思います。資料の上にある横長の写真のものは、近くのお蕎麦屋さんにも大きく引き延ばしたものがありますように、お目にかかる機会は多いのかなあと思います。

「会津土産」明治 33 年（1900）、当館蔵　より「永寶屋」

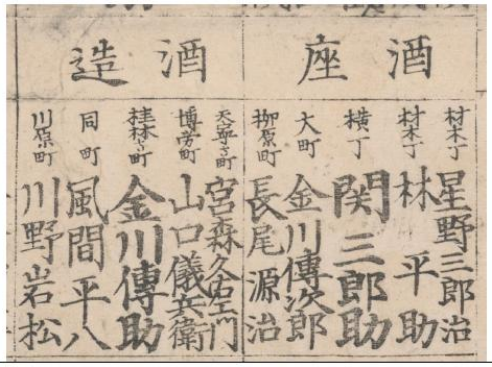
材木町は、江戸時代、会津藩の中ではたいへん醸造業が栄えた土地柄でした。これは明治３３年の「会津土産」という、会津の地図と会津若松の大きな商家、もちろん漆器屋とか薬局とか旅館などいろいろ載っているのですが、一番大きな枠で載っていたのがこちらなんです。味噌業・醤油業でそれぞれ永寶屋と名乗っていて、材木町は発酵醸造業がとても盛んな地域でした。今もイゲタ醤油の林合名会社さんが醸造業ですし、同じ林さんですとモックモックさんというパン屋さんがありますが、パンも酵母を使った発酵食品です。同じ永寶屋の屋

号を出しているのが、現在の鶴乃江酒造の林さんですね。

下の写真の「若松緑高名五幅對」方ですが、通称「五幅對」と言っていますが、会津の老舗の商家さんですとこれの大きなものを掲げているところが多いと思います。

そうした中で、味噌、酒屋さんというところで「酒座」、酒づくりをしているところで「酒造」とありますが、これも味噌で一番大きく書かれているのが、代表格のところです。

そうしますと材木町では永寶屋さんが大きなところとして出ている。味噌屋、醸造業の大きなところなんだというところは分かる。酒屋さんの「酒座」というところでも真ん中の右側、番付でいいますと東というべきでしょうか、材木町の林平助さん、これも鶴乃江さんのご先祖になるのだろうし、同じ材木町の星野三郎治さんは可月亭庭園美術館、一番左端の柳原町の長尾源治さんというのは、喜多方美術倶楽部などにも関わっておられた長尾家という非常に文化に関わっておられたところです。酒造の方は、天寧寺の宮森久右ヱ門さんは、「天宮さん」といわれた花春さん、馬喰町の山口儀兵衛さんは会州一さん、今も同じ名前でお酒を出しています。一番左端の川原町は三本川の川原町になっていますが、会津酒造博物館、同じ材木町にもございました川野家（河野家）、此花酒造というところですね。



「若松緑高名五幅對」嘉永５年（1852）、当館蔵　より「酒座」「酒造」「味噌」

この永寶屋さんのところは家印、林さんの方でも使い分けがあります。詳しくは林さんの方からお願いします。

＜林ゆりさん＞

大里さんからお話がありました、私ども鶴乃江酒造ですが、屋号が「永寶屋」と名乗っておりまして、ご紹介があった材木町の林合名会社さんとはご先祖様をたどっていくと７代前あたりになりますと同じ一族となります。

永寶屋というのも、会津藩の御用達頭取としてお舟を献上していたときがあり、そこで永寶丸という船を建造して川を下って物品を運んでいた商人の家系と聞いております。

ここで、同じ屋号でも、よくある荷印というものがありまして、昔だと焼き印で木の箱に印をつけて、どこのお店の品物か分かるようにしていたものなんですけれども、こちら大里さんの資料では、同じ永寶屋でも頭に井桁をつけた永寶屋さんで、それが林合名さんで、鶴乃江酒造は同じ永寶屋でも永の字を丸で囲った、〇永の永寶屋で、七日町の林家の荷印となっております。今でも私どもの蔵の中には昔の徳利があり、〇に永の永寶屋という徳利があったり、随所随所に〇に永の焼き印があったり、焼き印を押す古い道具があったりします。福島県立博物館にご提供するような状況ではないので、こちらにはお持ちしておりませんが、こうした形で代々会津藩にお仕えしていたと聞いております。

私ども鶴乃江酒造は、最初からお酒造りに携わっていたわけではなくて、最初は味噌・醤油でありまして、明治時代になってお酒造りに興味をもったそのときの当主が、蔵を建

て増ししてお酒造りの方を手がけたそうです。今、林の方で、酒造りをしているのは、七日町の私どもの方だけです。

味噌・醤油さんとしては資料にも残っているところですが、その外にも、紙を扱っていたりとか、お酒を絞るときに使う酒袋などの布製品を扱っていたりとか、いろいろ商人としては、会津藩にお仕えしていたと聞いております。

７　お酒と文化と暮らし

＜高野客員教授＞

ありがとうございます。

こうして歴史を踏まえながらお話を聞いておりますと、本当に面白いですね。今日は、午後１時１０分から、大里主任学芸員が皆さんに直接解説しながら、企画展会場でご案内してまいります。是非興味のある方はご参加いただきたいと思います。

私も、企画展とテーマ展を３回観ましたけれども、観ているたびにそれぞれに発見があって、面白い展示になっておりますので、午後、皆さん楽しんでいただけたらと思います。

それで、私たち会津地域文化藝術フォーラムは、「文化」という冠があって、先程来、林ゆりさんからは子どものころからの文化について、聞かせていただいて本当にありがとうございます。

今日のテーマも「会津の酒と文化と暮らし」とあります。お酒も、お猪口とかグラスとか、徳利、そのほか酒の肴とか、これから寒くなってくると熱燗におでんというのも最高にいいなあと思うんですけれども、そうした食文化とのつながりもあると思います。

そうした「お酒と文化と暮らし」というテーマから、あちらにも漆器とかありますが、お酒の道具と暮らしというのでも構いません、そうした観点から皆さんからお話をお聞きしたいと思います。

また、鈴木賢二さんからですみませんが、よろしくお願いいたします。

＜鈴木賢二さん＞

今度はソフトな話で申し訳ございませんが、良く私が講演でお話しておりますのは、お酒の「酒器」についてです。美味しく飲む酒器について、お話させていただいております。皆さん、どういった酒器で飲むのが一番美味しいと思いますでしょうか。

一番お酒に合うのは、いわゆる平猪口というもので、角がスパっと切れて、薄くて拡がっているもの、これがやはり美味しい。こちらの杯を見ていただきますと、実際にそういう形になっているんですね。端が切れていて広がっている形ですね。この方がお酒を飲んでは美味しい。

この口が薄いというのが重要で、日本酒文化とは違いますが、一番分かりやすいのがワインですね。一番安いワイングラスというのは、口にリムというのが入っていまして、太くなっているんです。これは安物ですね。某１００円ショップなどで売っているのがそれです。（会場笑）

高級なワイングラスとなりますとリムは絶対に入っていないんです。口が薄いままです

ね。ただ薄いと割れやすいので硬いガラスでないとダメということで、クリスタルなどと高くなっていくんですね。1,000円以上出すとリムはほとんど入っていませんから、お求めいただければいいと思います。また、ワイングラスは、上がしぼまっていますね。これは何が良いかといいますと、口がしぼまっていると香りが分かりやすいんです。日本酒の場合、酒を一定量口の中に含むというのがありまして、ワイングラスの形状ですとかなり傾けなくてはならなくてやりにくいんですね。それで、枡形になっています。それだけにワインは香りを重視しています。お酒というのは味と香りを味わうものと言えます。

余計なお話になりますが、東京農大の小泉武夫先生ですが、言われておりますのは、「酒道」お酒の道というのがありまして、今日はお猪口をもってきました。辰泉酒造さんからいただいたお猪口ですが、小さいですが口は薄くなっています。酒道とは何かといいますと「差しつ差されつ」と言いますように、お酒を飲んで、猪口を相手に渡して呑んでもらうというのを繰り返す、今はコロナですからこんなことはできませんと言われそうですが、それが「酒道」の決まりだそうで、中には下戸の方もいるから猪口が小さいんだというんですね。下戸の方には失礼にならないように小さい猪口なのだということです。

小泉武夫先生から言いますと、酒道は文化だ。それを復活させるべきだ。コミュニケーションのためにあった方がいいということですね。酒器としてはそんなところでしょうか。

＜高野客員教授＞

ありがとうございます。

「酒道」という文化ですね。差しつ差されつ、面倒くさいからコップ酒というよりは、こちらのほうが非常にいいんですね。（会場笑）

＜鈴木賢二さん＞

差しつ差されつがやっぱりいいんですね。ですから昔は酌婦さんという方もいましたね。呑みたい人は何杯でも呑みますからね。今は、なかなかついでいただけないので、大きくなったのかもしれませんね。本来はこのように小さい猪口なんだということです。

＜高野客員教授＞

それが大事なんですね。ここにお集まりの方々は、おわかりのところですね。もう私たちの若い頃はこれでしたよね。「差しつ差されつ」の文化って大事だと思います。

また、先程のワイングラスのお話。これってワイングラスでお店の格付けができちゃいますね。

＜鈴木賢二さん＞

実は私、講演のとき、よくホテルなどで講演させていただくときがあるんですけれども、だいたいどういうグラスを出してくるかでホテルの格まで分かりますと言いますと、すごく嫌がられるんですけども。（会場笑）

＜高野客員教授＞

そういうところも含めて、今日は得がたいお話をありがとうございます。

林ゆりさんからも何かお話をいただきたいのですが、いかがでしょうか。

＜林ゆりさん＞

お酒はやはり人間関係の潤滑油ですね。そういう存在ですね。今、鈴木先生がおっしゃったように「差しつ差されつ」という文化は、今は難しく、あまりない文化になってきているのが、少し寂しく思う世代の一人です。

酒器に関してもそうですね。

うちの場合は、お酒を通じて集まる機会というのが、蔵や家族にはすごく多くてですね、年末年始、お盆の時など、兄弟を含めた家族や親戚中が、七日町の鶴乃江酒造に集まりまして、大宴会が始まるのが子どもの頃からの習わしの一つになっております。

私がこの鶴乃江酒造をやりたいと思った一つもみんなの集まるところを残したい、酒造りや酒蔵を残したいという思いもありましたが、みんなの集まる場所を残したいと思うのも、私があとを継ぎたいと思った理由の一つであります。

それは、人付き合いの少なくなる現代においても、みんなが集まってくれるというのが思いの一つであります。今は父の兄弟がいて、私の小さい頃だと祖父母の兄弟がいて、茶の間だと１２畳くらいのところに30人以上集まって大宴会をするというのが年末年始やお盆の長期休暇のうちの風物詩みたいなものです。

私たちも年末ですとお酒造りの忙しい中、そうした忙しさのフォローもしつつ、父の兄弟が集まってくれます。父の兄弟のいとこ達もだんだん大きくなるとお酒組み合わして楽しくやれるようになり、みんなで差しつ差されつというまでではないですけれども、鶴乃江酒造のお酒を囲みながら、みんなで正月の準備をしてくれつつ、みんなで新しい年を迎えようということで集まります。いとこの子どもたちもどんどん世代交代していっているんですが、そこを一つうちの鶴乃江酒造が人の集まる場としてみんなが集まるという流れが私はこれからも続けていきたいなあと思っております。

弟が生活の拠点を東京に置いているのですが、そこでも集まる場というのを引き継いでいてくれています。なかなかコロナで東京にいる親戚達も会津に帰ってこられない、そこで東京にいる弟の家を拠点にいとこたちやその子どもたちが集まってみんなで集まる、コミュニケーションをとるということで、お酒も一役買っているということが続いております。家族や親戚という小さなコミュニティの中なんですけれども、お酒と地域の関わり方が皆さんの暮らしの中での潤滑油になってくれていたらそういうような存在になれるようにお酒造りを続けて行けたらなあと思います。

なかなかコロナもありまして、我々酒造りを終わったあとも蔵のみんなで甑倒し（こしきだおし）と言うお疲れ様会をするんですが、自分たちが造ったそのときの新酒を持ち寄って、総勢15～20名くらいの蔵のバイトさんやパートさんも併せて、東山温泉に一泊しながら新酒を７升から８升持ち込んで、すっからかんになるくらい、それこそ「差しつ差されつ」でお疲れ様って、一気にみんなで盛り上がるのです。しかし、うちも世代交代していて、若い蔵人さんたちが、増えてきたらみんな呑まないんですよね。（会場笑）　なかなか酒蔵の宴会なのにね。お店に悪いので、鶴乃江酒造のお酒プラス飲み放題プランもつけてやっているんですが、せいぜい今まではウーロン茶くらいだったんですが、今の若い子達、サワー呑んだり、ビール呑んだり、まあそれも良いとは思うんです、日本酒ばかり

でなくて、お酒としてのコミュニケーションをしてほしいなあって思うんですけど、そういった飲み会に変わってきてはおりますが、うちの蔵や林家ではそうしたコミュニケーションをとっており、これは続けていきたいなあと思っております。

＜高野客員教授＞

本当に素敵なお話ありがとうございました。

お酒というのは大勢の人が集まって、特に日本酒の魅力ってそうですよね。大勢の人でお酒を酌み交わして楽しくしていく。そこで盛り上がって、今までの苦労を慰労したり、お祝いをしたり、それが明日の活力につながっていったりと、我々は良い文化をもっているんだなあと、今お話を聞いて改めて思いました。

自分が子どもの時にそういう大人を見ていて、そうすると自分が大人になってどういう風に人とつながっていったらいいのかなあと思えることが、お酒を酌み交わす文化を子どもの頃から見ていて参加しているところが大事だなあと思ったところでした。

若い方々が変わってきたというのは最近どこでもあるところですが、今のお話を聞いていろんな地域とか職場というところでもみんなで集まる潤滑油としてのお酒ってこれからも大事だなあと思いました。ありがとうございました。

これまでのお話を聞いて、大里さん、学芸員の立場で何か思うことございませんか？

＜大里主任学芸員＞

今回の企画展のサブタイトルに私は思いを込めたんですけれども、「酒を醸し、和を醸す」というサブタイトルなんですが、「和を醸す」というところが、お酒好きの皆さまは聞いたことがあると思うのですが、「和醸良酒」という言葉があります。酒蔵さんでは、それ自体を家訓のようにされているところもあります。「和をもって良い酒を醸す」と読むという説もあれば「良い酒は和を醸す」と読むという説もあります。林家の皆さまの団欒のお話ですとか、本当に人の和というものが良いお酒を醸してできたんだなと感じますし、また、先人達が努力してきて良い酒ができあがってきたんだなと強く感じたところです。

私のところに引きつけて言えば、先程申しました「どぶろく祭」ですね。「どぶろく祭」の何がすごいのかといいますと、神社の御神田、神様の田んぼ、供奉田とか、神田とか呼んだりしますが、そういった田んぼで氏子さんたちが作ってとれた米そのものを氏子さんたち、宮司さんたちという地域の人たちがお酒に醸して、お米を備えるのは当然ですが、「御神酒あがらぬ神はなし」と、先日、講演でお呼びした神崎宣武先生が仰っていましたが、必ず、お米も供える、塩も供える、御神酒も供えるというように、神様へのお供えとしてお酒は欠かせない。福島の地域の人々が、自分たちで作ったお米を自分たちの手で醸して神様に供えるという本当に尊い昔からの伝統なんだろうなあと思います。それが日本の中でも一番福島県に多く伝えられているんだというところが素晴らしいところだと思います。

今、郡山駅ビルの中に、小規模醸造所のクラフト酒がたくさん扱われていたりしますが、小規模醸造といえば神社の一期一会のそのお祭りの日にしか飲めないお酒という点では、酒どころ福島のルーツの一つであろうなあと私は感じております。

８　あなたにとっての会津の酒

＜高野客員教授＞

ありがとうございます。

本当に和を醸すというのは大事なところだなあと思いました。

時間というのはどんどん過ぎてしまうもので、終了まであと１１分となってしまいました。さらにずーっとお話を聞いていたいところですが、お一人３分から４分という残り時間となってしまいました。最後に「あなたにとっての会津の酒」というキーワードでお話いただきたいと思います。

ただ、鈴木先生に一つだけコメントいただきたいところがあります。「南会津（清酒）」でお酒のＧＩをとりました。昨年の昭和村のかすみ草に続いての地理的表示ＧＩです。この南会津のＧＩもからめての鈴木先生にとっての会津の酒というお話をいただきたいと思います。

＜鈴木賢二さん＞

福島県には現在６１蔵ありますが、その３分の２が会津地方にあるんです。私が勤めていたのが福島県ハイテクプラザというところですが、前身は醸造試験場でありました。実は一番最初にできたのは須賀川でした。須賀川から今の会津の酒造組合のあるところに移ったということです。酒造りはもともと県内全域で栄えたのだけれども、会津が残っていったというところだと思います。

会津の何が素晴らしいかといいますと、どこで井戸を掘っても水が出てくるというところなんです。浅井戸なんですね。そして良い水ばかり出てきます。それが一番恵まれていると思います。そしてお米もたくさんとれます。お米がふんだんに使えるという裕福さもあると思います。昔はお酒の一升が大工さんの一日の給料に匹敵すると言われたこともありましたように、日本酒が多いと言うことは、裕福だったとも言えるのではないかと思います。そういった文化がたくさん育まれてきたのが会津で、それだけ豊かなところだったのだと思います。

＜高野客員教授＞

鈴木先生にとってのお酒というのはいかがでしょうか。

＜鈴木賢二さん＞

そうですね。今日は食べ物との相性の話をしていませんでしたね。会津は、にしんの山椒漬けとか、鯉のうま煮とか、ちょっと生臭系が多かったと思います。そういう食には、実は燗酒が合うんですね。

なぜそのようなことを言うかということですが、実は私はお酒を飲まないと実に偏食なんです。お酒を飲むと何でも美味しく食べられる。だから私は死ぬまでお酒を飲まないとならないんですね。（会場笑）

さらに最近好きなのは、香りプンプンの大吟醸とだし巻き卵を組み合わせて楽しむということをしています。

＜高野客員教授＞

健康のために鈴木先生の場合はお酒が必要だということですね。ありがとうございました。それでは林ゆりさんお願いいたします。

＜林ゆりさん＞

私にとっての会津のお酒というのは、家業でもありますので、残していきたいもの、残さなければならないものというのが大きいです。今まで、鶴乃江酒造を残していきたい、つないでいきたいという思いで、家業を継いでやってきているのですが、まわりとの関係をみていきますと地場産業として、会津の良さを伝える上でも酒造業、酒造りというものを残していかないとならないとここ数年強く感じるようになってきました。

自分のところだけではなく、本当に会津の酒蔵が横のつながりもあるところで、みんなといっしょに力をあわせながら会津のお酒、福島のお酒を全国に発信していく、そうしたところで会津に魅力を感じていただいて、会津に足を向けていただく、若い人たちにも楽しんでいただけるような酒を造っていきたい、そんなふうに思っています。

私自身も鈴木先生ほどではありませんが、毎日の晩酌に日本酒は欠かせないなと思っています。母が奈良漬けでも酔っぱらっちゃう下戸なんですが、父はいくらでも飲める飲兵衛なので、足して２で割って１合くらいまでは楽しめるかなというくらいです。日頃、本当にお酒は生きものなので、酒造りが始まると本当に休みのない厳しいめまぐるしく忙しい毎日なんですが、家に帰って旬の食べ物とそのときのお酒で、ＯＮとＯＦＦの切り替えをして、毎日の癒やしの一杯になれたらなあと思います。

自分自身が楽しんでいるので、皆さまにもそんな風に会津のお酒を楽しんでいただければ、作り手として本当にうれしいなあと思います。

今後ともよろしくお願いいたします。（会場から拍手）

＜高野客員教授＞

ありがとうございます。

本当に酒蔵さん達が横の連携でやっていた。それで、金賞をとっているというのは、我々は大きい組織ではないけれども、団結といいますかネットワークで、兵庫とか新潟とかの大きいところにも勝てるというのは、会津の酒蔵さん、福島県の酒蔵さんが見せてくれた心意気だと思います。それが我々の文化であり「誇り」だと思います。本当にありがとうございます。

林さんは「癒やしのお酒」、鈴木先生は「健康のためのお酒」になっているというところも会津だなあと思います。

林さん、もう一つだけお聞かせください。

今、若い女性が会津からどんどん出て行ってしまうというのが問題なんですね。若い女性が戻ってくるための秘訣やアドバイスなどがありましたら一言お願いします。

＜林ゆりさん＞

若い女性だけでなく、若者自体も、最初にお話があったように、会津から離れて仕事を見つけてしまうということがあるんですけれども、女性に関して言えば、今後結婚したり、

子育てしたり、そういう中でどういうふうに生活していけるか、そうしたところにサポートがあるといいのかなあと思います。

私の鶴乃江酒造でも、女性の社員は増えてきました。今は、結婚ばかりが人生の次へのステップというところではないので、そのまま作業を続けていけるような、そういう道を進もうという方たちもいるんですが、何かあったときに皆さんが寄り添えるような地域の連携が必要だと思います。もともと会津に拠点のある方は、ご家族とか何かのサポートがあると思うのですが、全然違うＩターンみたいな形で入ってきた方が、コミュニケーションがとれる場、チャンスがあるようなことがあれば、いいと思います。

昔から「会津の三泣き」というのがあるじゃないですか。「会津の人の頑固さに触れがたく泣き、その後会津の人の情の深さに触れて泣き、最後は離れがたくて泣く」というような、会津のそういう人たちの心の温かさがあるので、若い人たちにもそういった手をさしのべるような場があるともっと入りやすくなるのかなあと思います。

＜高野客員教授＞

ありがとうございます。

やはり、そうやって心が通い合う、心を大切にした政策も併せてやっていくということが大事だというところですね。ありがとうございました。

それでは最後に大里さん、会津の酒とは、学芸員の立場から最後にお話したいことをお願いいたします。

＜大里主任学芸員＞

福島県立博物館にきて、もう１０年になりますが、着任したときに、一週間もたたないうちに酒好きの先輩方に飲み屋に連れて行かれて、最初に辰泉を呑ませていただいて、県外では味わえないお酒がいっぱいあるんだよというお話を聞き、大変呑みやすくフルーティで大変酔っ払った記憶があります。

そういうのが会津のお酒の第一印象でした。

「和醸良酒」といいますか、先人達の苦労があって今の酒があるのだなあと思います。展示資料にも、明治３４年の醸造雑誌が展示してあります。その中の全国紙に、「２～３年前までは、会津酒というのは最劣等品のごとく言われていたが、近年富に酒質が上がっている。このままいけば近々東北を代表する銘醸地となるだろう」というように書かれています。展示室の第３章にありますので、そちらも是非ご覧ください。

そうした先人達の努力によって育まれてきた会津酒、大変美味しく楽しんでおります。

＜高野客員教授＞

ありがとうございます。

ちょうど時間となりました。

もっともっとお話をしたかったところでございますが、ここまでのお話などを参考に、これから利き酒などの体験をしながら、本日の午後の部も楽しんでいただければと思います。

私たち会津地域文化藝術フォーラムは、こうした文化を中心とした地域づくりをしてい

きたいと思います。また、私たちのように文化を中心とした地域づくりは、私たちだけの取組ではありません。全国規模では「人文知応援フォーラム」という団体が同じ活動をしております。私たち団体の案内とあわせて「なんだべや」にありますので、ご興味のある方、是非ごらんください。

本日は、鈴木賢二さん、林ゆりさん、大里主任学芸員の３人の皆さんからお話を頂戴いたしました。本当にありがとうございました。

最後に、皆さん、改めて３人の方に盛大な拍手をお願いいたします。

（会場から感謝の拍手）

＜第２部＞　第１分科会　１時限目（13:10～14:40）＜会場：企画展展示室＞

県立博物館学芸員と巡る
企 画 展『ふくしまの酒造り』　　テーマ展『酒をとりまく美術』

▲配布パンフレット表面

▼配布パンフレット裏面

＜第２部＞　第１分科会　2時限目（15:00～16:30）　　＜会場：講堂＞

蔵元トーク　『酒と会津と男と女』

＜パネラー＞

合資会社大和川酒造店　会　長　佐藤彌右衛門　様
会津酒造株式会社　　取締役　渡　部　文　一　様
福島県立博物館　　主任学芸員　大　里　正　樹　様

＜コーディネーター＞

福島県立博物館　　専門学芸員　小 林　め ぐ み 様

＜小林コーディネーター＞

それでは、お時間になりましたので始めていきたいと思います。

「会津塾」の第１分科会の２時限目になります。

蔵元トーク「酒と会津と男と女」。なんかどこかで聞いたような感じのフレーズ。歌を歌いたくなっちゃうようなタイトルを頂戴しましたけれども、私は、本日、進行させていただきます、福島県立博物館の小林と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、お話いただくパネラーの皆さんをご紹介していきたいと思います。

お一人ずつ自己紹介をしていただきながら、それぞれの蔵元のことなども教えていただきたいと思います。

まずは、大和川酒造店の佐藤彌右衛門さんからよろしくお願いいたします。

＜佐藤彌右衛門氏＞

皆さん、こんにちは。

どうも、今日は「酒と会津と男と女」、こういうテーマを預けられてドキドキ、ハカハカしているんですけども、何をどんな風に話していいのか。これ喋りすぎるとやばいテーマだなと思いながらおりまして、ブレーキかけながらお話したいと思っています。

（９代目から１０代目への世代交代）

私、佐藤彌右衛門と申しまして、喜多方市の寺町で酒造業をやっております。私は９代目ですが、先日、我が社に革命が起きまして、私は「断頭台の露」と消えそうな雰囲気なんです。つまり１０代目が、やっぱり時代なんですね。もう、「今までのやり方は古いぞ」とか言っています。私は、「大和川酒蔵北方風土館」と称して、その古い酒蔵跡を博物館兼ミュージアム、そして酒の販売所としてやってきたんですが、息子にガラリとタイトルも変えられまして。世代交代というのは、多分革命のように起きるのかなと思いながら、でもまだ多少力があると思ってますので、そのうちちゃぶ台返しをどっかでやってやろうかという風に思っているところの酒屋の親父です。今は、会長ということになりました。

（飯豊蔵と直売スタイル）

私どもの酒蔵は、飯豊蔵という川沿いの副流水のある、軟水の綺麗な水、地下水の豊富に湧き上がるところに、平成２年に移しました。大借金をしましてですね、今日は、東邦銀行の前頭取がいらっしゃいますが、当時なんだかんだで８億5000万ぐらい借金したんです。「あんな小さな酒屋が、そんな借金して潰れないのか」って言われたもんです。なんとか潰さないでここまで来ましたが、まあ当時、私が今回、政権の座をとられたのと同じように、当時は私も親父がいて、「今までのじゃだめだ」、「販売の方法もだめだ」と言って、私は直売スタイルに変えました。それまでは、もちろん小売店さんにも酒を卸すんですが、ほとんどを問屋さんに卸していたもんですから、そのどうしても利益が出ない。あのコストが違うんです。大手さんは非常に大量に仕込みますから、流通マージンを出せる。そこにリベートを出したり、あるいは販促品を出したり、テレビコマーシャルをかけたりと、どうしても支出が出てしまう。いい酒作っても、売り負けしてしまうこともあって、じゃあ、直接お客様にお渡ししようということを一つやりました。

それからあとは酒質の改革ですね。それまでの「三倍増醸酒」というのを一切やめて、「普通醸造純米吟醸酒造り」ということにしました。それがなんとか功を奏して、非常に利益も上げて、大きな設備の償却ができて、今ここに潰れないできているということなんです。

（大和川酒造店と地域づくり）

そんな中で、うちの親父、先代８代目がやっていた「喜多方蔵の町」だとか「街並保存

運動」というのに、自分も非常に取り組みました。

蔵というのは、地元の商人が、なんていうか、見栄を張るわけですね。蔵っていうのは、もちろんあの家財道具や商品や生活用具など、そういうものを火から守るために蔵を作るんです。あるいは、江戸の街で言うと盗賊とかですね、まあそういうところから守るということですね。

また、蔵というのは温度コントロールが非常に効くし、湿度も一定に保たれますので、お酒を入れたりするのに非常に都合がいい。材料も痛まない。喜多方、そして会津若松もそうですが、漆器ですね、漆を塗る椀に下塗りする時に、蔵の中は湿度も温度も一定ですから、蔵を閉めておくと、埃もつかないし、安定して乾燥するということですね。

そうしたわけで、蔵が非常にあって、商人たちはですね、見栄を張るように、隣に蔵が立つと、こっちも負けないで蔵を建てる、そんな風に競い合いまして蔵を造ってきました。

会津若松も蔵が多いですけれども、喜多方も蔵が多くてですね。「男４０代までに蔵の一つも建てられないのは一丁前でないんだ」という風潮があったわけです。もうみんなね、やっぱり借金してまで蔵を造ったんです。そんな商人たちの蔵は、一つは、倉庫としての蔵、次に生活道具を入れる蔵、そして座敷蔵ですね。座敷蔵は、迎賓館というか、接待をする場所としての蔵です。要するに旦那の書斎的な空間として、蔵の中に床を上げて畳を敷いて床の間を置くっていうのは、今日、企画展の会場で川延さんが説明したように、その文人墨客を呼んで、そこに書をかけるか、絵をかけるか、蔵を建てただけでは一丁前の旦那と言われないわけです。それでやっぱり教養も必要で、文化人と交流しながらやるというのがあったわけです。その３つ目の座敷蔵まで造らないと旦那とは呼ばれなかったわけです。そんなことで喜多方の蔵は非常に商人のアイデンティティのところがありました。しかし、戦後まもなく、蔵なんかあるよりは駐車場にした方がいいとか、高度経済成長の中でどんどん取り壊されていくんですね。

うちの親父は、取り壊されていく立派な蔵を見て、地団駄を踏んでいたんですね。そこで、うちと150mくらい離れた中央通にある呉服屋さんが造った座敷蔵をわざわざひいてきたんです。昭和56年でした。周りの人からあの頃、昭和56年っていうと経済がどんどん悪くなってきた時ですから、そんな時代に蔵をひいてどうすんだってよく言われたもんです。「あの８代目はちょっと頭おかしくなったんじゃないか」とも言われました。もうすごいお金をかけて蔵を引いたので、当時8000万近くなんだかんだ周辺整備までして、環境整備にかかったんです。これもまた借金でやったんです。親父はその後、「判子はお前にやるから、会社はお前がやれ」みたいなことになってしまって今に至るんです。観光で来るような人たちが「蔵の街喜多方」っていうことで有名になってですね、街並み保存などもやっている中で、直接お客様にそのお土産で買ってもらったりしたら、みんな美味しいということでどんどん売れるようになったというところです。

その力があったので、さっきお話しした飯豊蔵という新しい蔵を、千石くらいの酒屋だったんですが、新設の蔵ができたということにつがるわけです。

（彌右衛門氏の考える「四方四里」）

その後、向こうの企画展にも展示されているように、やっぱ酒屋って、地の水、地の米それから地のエネルギーですね。昔は薪と炭ぐらいしかなかったですから。炭ぐらいで十

分やっていたわけです。どっかから石油や石炭を買ってきてやるわけではなくて、それでやっていたのを思いながら、あの「地酒」という言葉がどうも私気にいらなかったんです。あの灘、伏見の大手まで地酒というようなこと言っていたから、これ面白くないので、「里酒」っていう概念を自分で作って、つまり四方っていうか東西南北、自分のところから１里４㎞として、四方４×４の16㎞ぐらい、朝、山に、ちょっと里山に行って薪を背負って帰ってこられるところの範囲のもので全部できる。昔はそうだったので、それを全部やろうということで、米作りを始めまして、熱塩加納村の有機農業を教わりながら、契約栽培したりしました。それでも量が足りないので、自分でも農業法人をつくりまして、米を作りました。米・食糧と水とエネルギーですね。この３つがあれば私たちはもう自立して生きてけるっていう考えがあって、それは先代からずっと色々と教えてきてもらってきました。

（東日本大震災と会津電力）

それで、よしじゃあそろそろ米作りを自分でやろうと思って、積極的に農業法人を拡大して、自分の酒屋の米を全部自分で作ろうと思っていた矢先にあの2011年の原発事故があって、そんなことから、「これはもう頭に来た。あんな原発みたいな危ないもので電気作るんじゃないよ」ってことを思いながら、仲間と色々勉強会をやりながら会津電力っていうその会社を立ち上げて再生可能エネルギーを中心にやりました。これもまさに銀行さんの大いなる５行、東邦銀行さん、福島銀行さん、大東銀行さん、信金さん、信組さん、皆さん出資をして、７つの自治体も出資をしてくれました。そんなことですから、別に儲けるためにやったわけじゃないです。地域のエネルギーは自分たちで作り出せるんです。水と太陽光と水力とそれから風力とか、バイオマスです。もう会津には、本当に、腐るようになってしまった山々があって、今山に手が入らないですね。どんどん切って回さないとダメだていうこともあって、そんなことを含めて会津電力で電力もやってるというところで、全く今酒屋からちょっと離れていて、幸か不幸か、革命が起きまして、もう私は用済みであるなというところですが、最後のちゃぶ台返しをどこでやってやろうかなっていうのを考えながら現在いるところでございます。

＜小林コーディネーター＞

すごいですね。歴史は繰り返されるんですね。８代目にちゃぶ台を返した彌右衛門さんが、今度はちゃぶ台を返されてしまうということですよね。うれしいことですよね。頼もしい１０代目がいらっしゃるということで、未来に向けてのお話も教えていただいた自己紹介でした。

地域との関わりのこともいろいろと教えていただいたので、この後またもっとお話を聞いていきたいなと思います。喜多方から大和川酒造店の佐藤彌右衛門さんにお越しいただいております。

では続いて、お願いいたしますのは、旧田島町、南会津町から会津酒造の渡部文一さんにお越しいただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

＜渡部文一氏＞

皆さんこんにちは。

今日は何の打ち合わせもなく出てきまして、さて何を話そうかなと聞いていたら、佐藤さんが素晴らしい話をしてくれたんで、なんとなく分かってきました。

（会津酒造の歴史）

それで、うちはですね。どんなところから話したらいいのかなと思うんですけども、まず、私のところで酒造りが始まったのは、元禄年間です。

本家の方で、酒造りが始まったので、正確に元禄何年かっていうところは、資料を今探しているんですが、どうしても出てこなくて、西暦で言えば1690年代です。

それで1801年に本家の方の26代目渡邉又左衛門篤敬という者が、京都で勉強をしてきて、本家では味噌・醤油の方を残して、造り酒屋の部分だけを次男の渡邉又八に分家させたのです。それが私どもの先祖になるわけで、会津酒造の初代になります。私で８代目になります。それで今でも、なんとかかんとか造り酒屋をやっております。

（金融業への進出）

明治になってから勉強させられて、あの渋沢栄一さんの子分みたいになって、田島町に田島銀行株式会社を作りました。それが、1929年のあの世界恐慌で倒産しまして、預金者には全部お金は返したのですが、借金だらけになって、残ったのはこの酒屋だけとなり、私も後を継いできたわけなんです。

ですから、あの1929年の世界恐慌で銀行が潰れたときは、もう玄関から仕込み蔵までみんなボロボロで、どうやってこれから酒屋やっていこうかっていう感じで、徐々に徐々に直してきました。江戸時代の蔵の雰囲気を残す建物として残していきたいという基本理念の下にやってきて、今の形になっているわけです。

（８代目から９代目への世代交代）

今、ちゃぶ台返しの話が出たんですけども、うちにも長男と次男がおりまして、私は、大学でろくな勉強してこなかったものですから、酒造りの勉強もしていなくて、本当にまずかったなと思って、長男は酒造りの専門学校を出したんです。その長男が帰ってきて、今は次男と二人で会社の後を継いでいます。兄弟二人でやってくれているのですが、親父がやってきたことの弱点っていいますか、失敗がはっきり見えてきたようで、「なんだ、この親父、馬鹿だったんじゃないか」ということで、今ものすごく肩身の狭い思いをして、私はちゃぶ台返すどころか、おんだされないか、住ませてもらえるだけでもいいなと思って、静かに家にいるわけです。そんな状況なんですけども。

実をいうと、後継ぎの私は、本当に酒一滴も飲めなかったので、昔、佐藤君なんかも一緒に酒造組合の理事なんかもやって、いろんなことをやってきたんですが、酒屋からどうやって逃げたらいいんだってことばっかり考えて、酒のないところに行きたいと思ってい

たら、調停員とか、ロータリークラブとか、教育委員会とか、商工会とか、もうお酒に関係ない分野の方にいつの間にか自分の身が置かれているってことに気がついたんですね。

（東日本大震災と会津酒造）

それから3.11が起こった時ですね。各商工会の状況が、それぞれに大きく変わってしまって、もう会員と自分もどうやって生きていくのかわかんないっていう状況になっちゃってね。それでその頃、ちょうど県商工会連合会の副会長という立場になっていたもんですから、会津に１７の商工会があるんですけど、会津１７の商工会の会長さん、副会長さんもいる中で、福島県の商工会をどういう風に持っていくかっていうことで、東京の方に行って、県選出国会議員をはじめ、東電や関係するところに通っておりました。会社の方は、状況が状況ですから、あの頃は全部従業員には任せてしまったこともありましたけれども、なんとか、ここまで生き延びてきています。今、会社は息子に酒造りをやってもらっているっていうような感じで続いております。とりあえず概要はそんなところです。

今、役職は今年の５月に全部やめました。また、会津酒造株式会社取締役ということで、会長などという肩書きは付けるなと言って、名刺を作りましたので、今後ともよろしくお願いいたします。

＜小林コーディネーター＞

ありがとうございました。お二人ともやっぱり震災のことに触れられていて、大きなエポックになった出来事であるのは間違いないんだろうなと思います。

会津酒造さんも、今、歴史も教えてくださいました。その長い歴史の中で、銀行という金融業にも関わりながら今があるということなんですね。地域との関わりについて、後ほどお聞きしていきたいと思います。

それでは、３人目の登壇者をご紹介します。

県立博物館から、ただいま開催中の企画展、「ふくしまの酒造り」の主担当でもあります民俗分野の学芸員の大里正樹さんです。

よろしくお願いします。

＜大里主任学芸員＞

どうぞよろしくお願いいたします。

当館、学芸員の大里正樹と申します。今ほどの第１分科会の１時限目の方での展示解説にご参加いただいた方も多くいらっしゃいまして、ありがとうございました。まだご覧になっていらっしゃらない方もいるかもしれませんが、ご参加いただいた方には、重複いたします話も少しありますが、お話をしたいと思います。

現在、その展示室の方で「ふくしまの酒造り」を開催しております。その中に、今日、おいでいただきました佐藤彌右衛門さん、渡部文一さんの蔵に関する資料もございますので、皆様のお手元にお配りをした資料についても少しお話をさせていただいて、今後の話のきっかけにもさせていた

だければと思っております。

（松尾神社と会津の酒蔵）

私自身は、県外の出身でございまして、会津に来ましてから、いろいろと調べていく中で、この企画展にも関わらせていただきました。午前中の基調講演では「どぶろく祭」の話をしましたが、午後の部は、この松尾神社のお話から少し話をさせていただきたいと思います。

松尾神社といいますと、言うまでもなく、お酒造りの神様です。福島県内でそれが宗教法人登録されていますのが、西会津町の一社だけなんです。松尾という地区にあります松尾神社です。元々、江戸時代は、その隣にある真福寺というお寺の方が信仰されていたわけなんですが、明治が過ぎて、大正、昭和あたりになると松尾神社の方にたくさん奉納物が上がるようになりました。ついこの間も、今年は11月11日が「上卯祭」と言いまして、11月の最初の卯の日ですね、うさぎの日です。その日が、松尾様のお祭りの日だというので、その松尾神社の泉の水を汲んでお酒造りの種水に入れるといい酒ができるという行事が、今年も行われました。展示室の方でも映像で流しております。佐藤彌右衛門さんの息子さん、現在の社長さんが参列をされていたり、喜多方、会津坂下、会津若松の皆さんが参列をされていました。その松尾神社に奉納されている絵馬にですね、佐藤彌右衛門さんのところがだいぶ関わっておられました。先ほどの酒屋さんの一流の旦那さんと言いますか、酒をつくるだけではなく一流の文化人でもあるんだということをおっしゃっていましたけれども、そうした中で、この奉納額があるんですね。皆さん酒蔵のご当主の皆さんなんですけれども、一流の俳句の歌詠みでもあったということです。その中にも皆さんもご存知の方々も多くおられるかと思います。

今日ご関係の方々もおいでになっていますけれども、一番筆頭は、末廣酒造の新城杏所さん、続いて磐梯町がありましたね、大寺の桑原さんは、磐梯酒造さんですね。そして若松の石橋鶯笛さんというのは薫鷹さんですね。若松の柏木さんは天香さん、そして喜多方の真壁さんと最後は大和川の佐藤さんというような形でございまして、本当にそうした俳句も詠める酒蔵の蔵元さんだったということです。

これは前、渡部文一さんのお宅に伺いました時にお聞きしたんですが、あの小学校の時でしたか、遠足で御薬園に行ったら、新城さんとかがお茶会をしていたというんですね。そんな話とかもあったり、そういう風な話もまた伺っていきたいなと思っております。

（受賞清酒名鑑と大和川酒造店、会津酒造）

受賞清酒名鑑というのは、国税局のお持ちになっていた資料を東北６県全部あるんですけれども、福島県のものをお借りして展示室の方で展示をしております。全部で28mある資料ですので、到底覗きケースの中でも出しきれません。それで、１頁、１頁をそれぞれクリアファイルに閉じたものを置いてございますので、そちらもご覧いただければと思っております。その中に佐藤彌右衛門さんのところで、現在は「大和川」とかいろんなお酒を出しておられるわけですけれども、この銘柄はどうもなくなってしまったようでございます。

「敷島」ですね。

「敷島の　大和心を人とはば　朝日に匂う　山桜花」

その敷島ですね。「敷島」というお酒を明治の時代には出していたということですね。

会津酒造さんは当時、金紋会津ではなくて、時代の色が色濃く反映されてますが、戦争に関係するところでは「凱旋」という銘柄ですね。そして現在の金紋会津にもつがってくるのかもしれませんが、「會津」というお酒ですね。こちらもレッテルとしては、確かに国税局の記録にも残っているものがございました。

私の方は資料の説明が中心になってしまいましたけれども、こういったものを調べさせていただく中で本当に会津の酒の文化には奥深さがあって、まだ入口にしか立ってないのかなと思います。展示をしますといろんな情報をお寄せいただきます。そういったことで、また研究も深めていければと思っております。

＜小林コーディネーター＞

大里さん、ありがとうございます。まだ入口かもしれませんが、でもそこに立ったからこそ見えるお話をね、今日はちょっと一緒に話していただけたらなぁと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

では、ここからですが、今回のタイトル「酒と会津と男と女」です。会津という場所は、喜多方と、そしてこの若松、南会津、奥会津と広いエリアではあるんですが、それぞれの喜多方、南会津からお越しのお二人にとって、どんな場所なのか、そんなことをもう少し、この後、お聞きしていきたいなぁと思うんですね。

そして、蔵元ということで聞いていきたいんですけれども、先ほど佐藤彌右衛門さんから、先代のお仕事として「蔵をひく」っていうお話がありました。なかなかできないですよね。すごいなぁと思うんですが、あの大和川さんの先代の蔵をひいてもやはりそれを残していきたいっていうことを、思うだけではなく、実際に行動に移された。多分そのことも大きなきっかけとなって、今の「蔵の街喜多方」というものが、私たちの目の前に残されてきているんだと思うんです。先代までの街づくりに関わる蔵元としての大和川のことを改めて 佐藤彌右衛門さんはどう思っていらっしゃるのかお聞かせいただけますか。

＜佐藤彌右衛門氏＞

（大和川酒造店の杜氏衆）

はい。今、大里さんにこういう古い明治48年の資料を見せていただいて、当時も、とにかく酒質上げるっていうことが、やっぱり競争ですから、大事だったんですね。

その当時の酒蔵もついこの間までもそうだったんですが、杜氏衆たちに、明治以降はですね、江戸時代もそうだったのかは詳しくありませんが、特に明治以降の会津の場合は、越後杜氏、会津は阿賀野川を通じて新潟との交流が深かったわけですね。

会津はとにかく陸路を行くよりはとにかく川ですからね。会津藩はどうしても新潟に港を作りたかったみたいです。かなり運動をしていたみたいですけども、津川までしか会津領はなかったですから、その先に港を作りたい。それが許可になりそうになった頃には、もう戊辰戦争が始まっちゃったということですから。会津が港をもてば、流通ができて、まだまだ繁盛したんでしょうね。

当時越後は信濃川や阿賀野川も雨季になると氾濫して、台風の頃もそうでしょう、だい

ぶ大変だったそうですから、越後にはその誰も殿様が行きたがらなかったということらしいです。

だから越後の杜氏衆は冬になると会津に来ていました。私どものところには、小千谷の辺から来ていました。あの小千谷の方は大雪なんですね。春先に杜氏衆たちを送っていった時には、びっくりしました。雪の壁だったんですよ。あの２ｍくらいから３ｍくらいの雪が春先でもありましたね。そういうところですから、冬は出稼ぎに行くしかないと。女性たちは東京の方に行ったりで、中でもその出稼ぎとしての杜氏、酒造りというのは高給だったそうです。杜氏衆がよく言っていました。酒屋に半年くらい住み込んで、11月ぐらいから来て、３月ぐらいで帰るんですけど、住み込みで、３食の飯が付いて、冬の寒仕込みになると24時間体制での酒造りですから、夜食も出る。しかも夕食には晩酌が１本つくんだということですから、出稼ぎの中でも高給な出稼ぎだったそうです。

15歳ぐらいになって、中学校も終わり、もう働けるとなると、あの杜氏さんからピックアップされて10人から14・5人くらいの集団に入ってくるんですね。だからもう酒屋の親父は、いかに腕のいい杜氏を捕まえられるかです。そうするとこの腕のいい杜氏が杜氏衆を連れて酒を仕込みに来るということであったわけです。

（酒蔵を支える女性たち）

大変だったのは、女性です。女性って真面目っていうか、祖母や母親の仕事を見ていると、あの家族が大体あの10人くらいいますから、爺さん婆さん父さん母さんみたいな感じで、また嫁に行かない娘たちがいたり、私たちみたいな小さなのが生まれる。そこに杜氏衆たちが10数人入ってくるってことは、大体25人ぐらいの御三どんを朝・昼・晩やらなくちゃならないですね。どっかの旅館みたいなもので、しかも朝早くからで、７時にはもう食事を終えて、米のふかしたものを出して、仕事が始まる。女性たちは、後片付けして９時で、また11時には、今度昼支度をして終わって午後１時半、２時で、今度は４時頃から夕食の準備をして終わって８時です。

その後に待っている仕事は、母親たちはよく繕い物をしていました。それはあの麻袋を繕う。それからあの酒袋。酒袋って、昔はもろみを袋に入れて上から油圧で絞っていましたからどうしても圧がかかって、ほぐれるんですね。その繕いをやっていると、もう10時・11時で、次の日ってなってしまう。

それらを約半年近くやるんですね。それで母親の手を見た時に私、「ああぁ」と思ったんだけどもう本当にしもやけになってですね、それが今度割れて、手のひらの中の血が見えるんですね。だから、よく包帯巻いて御三どんやっていました。それを見ていて「ああ大変だなぁ」と感じていたわけです。

やっぱり杜氏衆たちも新潟から入ってくるわけで、食文化が会津とは違いますから、健康管理のために賄いさんを連れてくるんですね。男たち10数人いて、女性一人です。女性は若い人が来たり、中年の人が来たりするんですけど、その人も一瞬に住み込みで、御三どんを手伝うということで、お女中さんみたいな形でやっていたのを覚えてますね。

私の家内も地元から来てくれたんですけど、私と一緒になるっていう時には、相当ね、反対されたそうです。酒屋に嫁いで行くって言ったら、「酒屋はとても大変だよ」って、周りから散々言われて来たということです。別に自慢しているわけじゃないんですよ。そ

れほどいい男だったから来たっていうわけじゃない。

＜小林コーディネーター＞
いい男だったからだと思いますね。

＜佐藤彌右衛門氏＞
（酒蔵と若い杜氏衆たち）
いえいえ。ただ当時の酒屋のあの働き方は、みんなその若い男性ですから。しかも半年間そのなんていうかなぁ、杜氏部屋に閉じこもっては、仕事をして、夜寝て、食ってとしてるとやっぱりね、15・16・17歳ですから、ムンムンしてるわけですよ。だからね、蔵の中に女性が入ると若い女性でも、中年の女性でも入っちゃいかんと、蔵の中は、「女性は不浄なもの」と敢えて言って、不浄だから蔵の中に入ると酒造りが乱れるからだめと。そんなことはなくて、女性の方が清潔感があるし、やっぱりそういうところに女性が入ってくと、ムラムラとするんでしょうね。杜氏たちの心が乱れるんですよ。それを私が見たことがあるのは朝ですね。
うちの前にあるパーマ屋さんです。うちの蔵の大きな欅の向こう側にあって。昔はそのパーマ屋さんの女性たちは、高校出るとみんな見習いに入るんですね。そこに、やっぱりね、７・８人いたんですよ。
朝になると、杜氏たちがみんな裏に行くんですね。今、うちでいうところの「天空回廊」っていうところから、パーマ屋さんを見ているわけですよ。向こうの女性たちも、手すりにこう手をかけながらなんかこうチラチラ見ているわけですね。

＜小林コーディネーター＞
青春ですね。

＜佐藤彌右衛門氏＞
うんやっぱりね、それはそうでしょうね。そういう意味では禁欲的な、生活ですから。それはもう多分たまんなかったと思いますね。

＜小林コーディネーター＞
そういうのを見てお育ちになられたということですね。

＜佐藤彌右衛門氏＞
（酒蔵の男と女）
若い衆たちはそれでも真面目に、やっぱり外に遊びに行ったりできませんからね。ただ、杜氏には、杜氏頭以下、社長の次に専務、常務がいるのと同じように、杜氏にも三役っていうのがいたんですね。
その三役の連中になるとこれはやっぱり30代40代ぐらいになって、杜氏の頭っていうのは、大体40代50代ぐらいですね。彼らはやっぱりその遊び方知っていますから。すっと夜抜けていって、喜多方の居酒屋とか、そういうとこで一杯やってすっと帰ってくるんです

ね。

ある時、これは、うちじゃなかったけど、近所の酒屋で、ある杜氏がそのままいなくなっちゃったということがありました。杜氏の三役のうちの１人がですね、駆け落ちしたみたいだという話をちらっと聞きました。「ああそういうこともあるんだな。そうすると新潟の里には帰られないだろうし、どこ行っちゃったのかなぁ」っていうようなことを当時思いました。やっぱりいろんなことが、その長い間にはありましたね。もっと、もっと、かなりのこともありましたが、そういうところも含めて、酒屋っていうのは、男と女、様々なそれぞれの役割があって、うんうんうんと思いながらね。ただ今のようにね。今、極めて自由に交際ができるのに、なんで独身者が多いのかなと思うんですけど、もっと男女仲良くね、積極的に付き合えばいいのかなと思うんですが。まあ、昔と今の違いかなと思いながらね。

＜小林コーディネーター＞

いい情景が目に浮かびました。パーマ屋さんの女性たちに手を振っている大和川さんの若い杜氏さんたち微笑ましいですね。

そんな蔵元の人々の姿も今ご紹介もいただきました。

渡部文一さんにも同じお話をお聞きしていければと思うんですけれども。蔵元で働いていた蔵元の人々のことで　何かご記憶に残っていることとか、エピソードとかがあったら、少し教えていただけますか？

＜渡部文一氏＞

今ちょっと佐藤君の話を聞きながら、皆さんに誤解されると困るんで、そんなに酒屋がいつも悶々していたわけじゃありませんから。（会場・爆笑）

＜小林コーディネーター＞

そこは訂正しておかないといけないですね。

＜渡部文一氏＞

（酒蔵を支える女性たち）

女性が酒蔵に入るなって言われたのは、今と違って、生理用品の問題で、それで昔は間違ってちょっとでもそこに血液が入っちゃったりすると全部がダメになっちゃって、その蔵は潰れちゃう、そんな意味で女性は蔵に入るなっていうことを私は杜氏さんから聞いていましたんで、決してあのムンムンしているからじゃないです。その辺だけちょっと誤解しないでいただきたいなと思って今聞いておりました。

女性の大変さは私も全く同感です。

女性のやることは大変で、うちの親父が良く言っていたのは、造り酒屋は、女性が長生きできないということです。また、プライバシーが全くないんですよ。もう蔵人の入った後で風呂に入るとかになります。私のお袋なんかも奥の自宅の方に茶の間と風呂を作ったのは、私が小学校の高学年になる頃ですね。

本当に私の小さい頃は、蔵の連中は、みんな障子に穴あけて、女性が風呂入る姿なんて

見たがるわけで（会場笑）。そんなことがいっぱいあったもんで、その辺のことはよくわかるんですけど。

私の婆さんというのは40代で亡くなってしまいまして、私が生れるちょっと前ですね。だから私は、母方も父方も全くおばあちゃんっていう記憶が全くないんです。そんなことであの女性も造り酒屋っていうのは本当に大変だっていうのは、もうみんな身にしみていると思います。

（変わる酒造り）

ただ本当に時代が変わったっていうのは、昔はあの酒造りしながらも、納豆を食ったり、平気で普通の生活をしていましたけど、今の酒造りは全く変わりましたね。

私が「蔵に入るぞ」って言うと、「もう親父は、まだタバコ吸っていたら絶対こっちには来るな」って息子に言われたり、あと「靴は全部履き替えて、専用の消毒してあるスリッパで入んなきゃいけない」とか、とにかくうるさくなっちゃって、仕込みが始まったらヨーグルトと納豆が禁止になっちゃってですね。

＜小林コーディネーター＞

へえ～。他の菌が入っちゃダメってことなんですね。

＜渡部文一氏＞

そうですね。

私は下戸だったんですけど、東京で就職した時に、初めて「菊正宗」の特級というのを飲んだときに、コップの半分ぐらいスーと入っちゃって、ゲロゲロ酔っ払っちゃったんですけど、「なんでこういう酒が会津にないんだ」というのが私の最初の疑問点でした。それは、結局、無菌状態っていうのが影響したんだなとつくづく思ったんですね。

新潟の蔵などもその辺の研究は、福島の蔵よりも早かったのかなって、今になると思います。

そんなことで、いろいろ時代によって、男性の働き方も、女性の関わり方も変わってきて、もうみんな今は、自分は自分という感じですね。ご飯も、昔はね、お昼から夕飯まで、へたすると蔵の従業員に全部ご飯を出していたんです。

＜小林コーディネーター＞

御三どんの人が必要だったんですね。

＜渡部文一氏＞

私のお袋なんかは御三どんの人と一緒になって働いておりました。そんな感じですね。

＜小林コーディネーター＞

あの酒蔵の少し前の姿なんだと思いますけれども、今お二人に教えていただいて、その姿が皆さんも目の前に浮かべられたんじゃないでしょうか。お二人のお話から、蔵元の暮らしぶりを少し教えていただいたんですけど、お話聞いてみて大里さん、改めてなにかご

感想とかお聞きになりたいことありますか？

＜大里主任学芸員＞

（会津酒造の杉玉）

先ほどお話に出したところで、実際に会場の皆さん、会津酒造さんに行かれたことありますでしょうか。大和川さんの北方風土館を訪れる機会が多い方もいらっしゃるかなと思います。

展示室の入口に杉玉がかけてございます。あの酒林というものなんですけれども。あちらをですね、実は、私は渡部文一さんよりも、次男の方と先に知り合いになりまして、次男さんは、杉玉作りの技術者でもあるんですね。次男さんから色々と習わせていただいて、それがその「せど森の宴」というワークショップのイベントで奥会津振興センターさんの方で実際に会津酒造で実際にやらせていただいたんです。

会津酒造さんのお宅は昔からのお宅ですが、何年の建築なんですか？

＜渡部文一氏＞

江戸時代なんですが、一度火事になっていまして、再建したんですね。

＜大里主任学芸員＞

（近衛文麿と会津酒造）

蔵のお話、蔵人さんたちの話とかもありましたけれども、本当にその店づくりというか、土間があって、そこの小上がりのところに囲炉裏があって、床の間にかかっている額と言いますか、書道の額も近衛文麿が書いた額であったり、多分、近衛文麿が田島まで来ていたということなんですよねきっと。泊まりに来ていたそうなんですよね。あの本当に、当時の華族ですかね、戦前で言うならば。後の首相になる近衛文麿が来ていたんですね。

＜渡部文一氏＞

高校生時代ですね。

＜大里主任学芸員＞

近衛文麿が高校生時代に来ていた、というところでもあったというところですね。

＜渡部文一氏＞

おっしゃっているお店のところは、江戸時代の造り酒屋の酒蔵なんですね。店に入って、ガラッと天井の高いところが酒蔵なんですね。あそこで、酒造りをしていたんですね。

本家の方が、味噌・醤油をやっていたもんですから、本家と同じ場所では酒造りはできないということで、隣に小蔵があって、それを1801年に立ち上げて、それから人も住めるようになったんです。

＜大里主任学芸員＞

たくさん古い資料があって、それを庄司吉之助という福島大学の歴史の先生だった方ですが、その方が調査に来られたということも教えていただきましたが。

＜渡部文一氏＞

（庄司吉之助と会津酒造）

昭和51年に、親父がうちにいなくなっちゃって、突然、田島町長になっちゃたんです。それで親父から「あの家、誰もいなくなったからお前すぐ帰って来い」と言われて帰ってきたら、ちょうどその時でしたね。帰ってきたのは、９月で、１０月からその庄司先生が、うちの土蔵に入って、古文書を全部調べてくれるということで、それを手伝ってくれと言われて、それで庄司正先生の助手みたいになったんです。助手の方１人はいたんですが、私もお手伝いして、おかげで自分の家の歴史も分かってきたということです。

＜大里主任学芸員＞

「大里さんにはまだご飯とか出してないね」って、言われたんですけど、来る方、来る方に何かご飯も振る舞っていたんでしょうか。

＜渡部文一氏＞

（扉に鍵をかけるな。門を造るな。）

地域との関わりでは、先程も少しお話ししましたが、本家の26代の又左衛門という人が、京都で勉強といいますか、本居宣長の最後の授業を聞いて、社会貢献していく大切さを学んで帰ってきたんですね。それで、味噌醤油は本家に残して、造り酒屋の方をうちに分家して独立させたんです。また、社会貢献の一環として、永田の三十三観音をつくりはじめたんです。さらに、「造り酒屋の目的は地域に貢献することだ、扉に鍵をかけるな」ということを実行したんですね。それでも江戸時代から今まで１回もうちには泥棒が入ったことはないです。

あと、「門は作るな」です。いわゆる門は一切造るな。あと、「来た人には必ずご飯を出しなさい」。だからいつも家には、ご飯と味噌汁と油味噌っていう味噌を炒めたやつですね。油味噌とたくわんはいつもあって、来た方には出して、お風呂に入りたいっていう人には風呂どうぞと、玄関にお風呂があって、あれもちょっと特殊な形だなと思うんだけども、酒蔵は社会に貢献するということです。

＜小林コーディネーター＞

素晴らしいですね。扉に鍵をかけるな。門を造るな。

（江戸時代の社会福祉センター）

＜渡部文一氏＞

福島大学の庄司先生が言うには、この家は「江戸時代の社会福祉センター」だっていうんですね。なるほどなあと思ったところです。

貴重品とか、高い物とか、立派な物は何もない。決して贅沢はするなということです。

＜小林コーディネーター＞

目に見えない大事なものが、会津酒造さんの中にあるっていうことですよね。

＜大里主任学芸員＞

本当にそのお話を、杉玉作りのワークショップの時に、事前の打ち合わせでおじゃました時にお伺いしました。庄司吉之助という方は、『福島県史』を編纂した方なんですけれども、その人をして、この家は「福祉の家」と言わしめた、会津酒造さんも先ほどおっしゃっていましたように、渡部又八さんが、田島町の町長もされて、その時に作られたのが『田島町史』という町の歴史の本も編まれていた。それがつながって現在の奥会津博物館という博物館を作ろうというところまでつながっていくというところでは非常に文化的な役割の部分では大きかったということですよね。

＜渡部文一氏＞

（本居宣長と会津酒造）

それで親父の話になっちゃうんですけど、ちょっと今私非常に嬉しいことがありまして、「本居宣長」と事業との関係が分かったのが、今から10年前なんです。私の親父も本家の又左衛門も分からないまま死んでしまったんです。

本居宣長との関係があるということで、三重県松坂市の本居宣長記念館から連絡があって、私は喜んで行ったんです。そうしたら、岩代国永田村渡邉又左衛門篤敬っていう名がちゃんと本居宣長の日記に残ってあったんです。そこで、先程お話ししましたように、本居宣長から学んで、社会に貢献できる造り酒屋になれと初代が始まったということを確信したんです。それを渡部浩三先生に言ったら、それを本にしようとお亡くなりになる前に言われたんです。

＜小林コーディネーター＞

そこからがスタートだったんですね。今、会津酒造さんが、渡部家がずっと地域に、社会に貢献してきた、そういう家の教えもあって今につがってきているというお話をお聞きいたしました。

あの大和川さんもずっと地域に関わり続けてきた酒蔵だと思うんですけれども、展示室の解説会に参加してくださった方はご覧くださったと思います。喜多方では大正時代に喜多方美術倶楽部というのができて、そこに大和川酒造店のご先祖も関わり、地域の旦那さんたちと美術家たちを招いて地域の文化、喜多方の文化を新しく作ってきた歴史もあります。

そして、今現代になってですけれども久松知子さんという若いアーティストをお迎えになって新たな作品文化を生み出すのに佐藤彌右衛門さんも大和川さんもまたその受け皿になってという風に、その新しい文化を生み出す地域貢献の仕方っていうのをやってこられ

て、地域との関わりについて、改めて佐藤彌右衛門さんからもお聞きしていきたいと思います。

アーティストとの関りってどんな風に思っていらっしゃいますか？アーティスト、芸術家との関わり今までたくさんやってこられたと思うのですがいかがでしょう。

＜佐藤彌右衛門氏＞

（大和川酒造店と磐越西線）

そういう意味では、酒蔵にはですね、多分いろんな人、文人、政治家も経済人もいろんな人たちが来ていたようです。それは書や何やらで残されているんですが、多分、明治からの話で言うと、明治から大正の頃には、町役場には、そんなに力がなかったんですね。当時、あの磐越西線が若松までに来た時にも、地元の若松周辺の人たちが、みんなで金を出し合って鉄道を引いたんです。その頃、若松からやっぱり会津坂下の方に鉄道は抜けていくだろうと思われたことから、喜多方の方にもってこようと商人たちがみんなでお金を出し合ったんですね。その時の商人たちが相当の金を出しているんです。13人ほどいるんですが、そういうとこにも名前を連ねているんです。

だから社会貢献はその必ずさせられたって言ったらいいのかな。それで、役場は金がないから、実はあの東山温泉に国鉄の職員が来ている時に、喜多方の町長は、「とにかく交渉してこい、必ずこっちに来るように言ってこい、国鉄に直談判してこい」と言われたらしく、懐に短銃か拳銃を持たされ、「交渉がダメだったらお前、そこで死んでこい」とみんなの前で相当に気合いを入れられて交渉に行ったみたいです。本当かどうか分かりませんが。そんな覚悟でもってやった。だから当時にそういう行政のトップを民間が応援したんでしょね。そんなことがあります。それで鉄道が引けて、今度そこで大動脈ができて、経済が活性化するわけです。

もう1つは、今のように洪水になって、橋が流されるわけです。昔は、木の橋ですから、あっという間に流されて、そういう時に、例えば佐藤もお前半分金出して橋をかけろとかですね、なんかやられたそうですね。それを実際にやらないと、自分もまた向こうから米を持って来られないというのがあるので、必要だし、また、その地域の中で一緒に生きていたっていうことから、半分行政と関わるような仕事は随分やって来たんじゃないかなと思います。

（喜多方美術倶楽部と大和川酒造店）

だから当然そこに、文人墨客が来る、酒屋に行けば酒がある、酒があればというんで、やっぱりアーティストはどんどん寄ってきますから、それはあの商人たちが集まってくるということです。

その喜多方美術倶楽部っていうのは、実は田代与三久さんですね。大正７年に田代与三久が結成しました。田代与三久さんは、蘇陽とも言うんですが、非常に経済界で力があって、金融界では銀行の頭取にもなって、様々なところで渋沢栄一みたいなことをやっていたんでしょ

う。しかし、それもダメになるんだけど。あの当時、今で言えば、横山大観だとか、竹下夢二だとか、当時のトップアーティストとしては若手、まだ完全に売り出し前の連中をあの小川芋銭という人がそれを連れて、田代与三久さんとこに、要するにアーティスト・イン・レジデンスをするわけです。田代与三久さんも力があったから、そういうのを受け入れて、そうこうしているうちに、あの喜多方に美術館を作ろうという話が盛り上がるわけですね。あの当時だから、あの大原謙一郎さんって、あの大原美術館の前理事長がよく言っていましたけど、「佐藤君、あの時代にそんな美術館を日本で作ったら、それはもう私立の初めての美術館ができたぞ」と言うんです。大原美術館は、ずっと西洋美術を集めていて、美術館ができたのは、そのずっと後のことですから。

すごい力を経済だけじゃなくて文化面でも非常にもっていたんですね。この地方は、芸術を大事にしながらやっていたんだなということを改めて評価されて、そうだなと思うところがつくづくありますね。

（大和川酒造店の社会貢献や地域貢献）

それで、社会貢献や地域貢献っていうよりも、やっぱり床の間に何をかけるんですかっていうことですね。床の間にかける書や絵で「なんだ、この程度か」と思われたくないっていうのがあるんじゃないかな。蔵を造ったまでは旦那で、旦那様って様がついて呼ばれる人は少ないんですね。蔵を３つ造ったまでは一応、旦那。その後に様がつくとなるとこれはねそのさっき言ったように社会貢献なんですね。特に田島は天領でもあり、豊かなところだったからおそらくそういう社会貢献なんだろうけど、喜多方はどちらかというと商人の町ですね。若松は朱子学で侍が威張っていたところ、喜多方は陽明学ですから、一生懸命働いてお金貯めたら蔵造っていいぞと、どんどん頑張れお前たちっていうそういう雰囲気ですからね。そこの違いはね、多分あると思います。

（戦争と酒蔵）

ただ、やりすぎとか時代の中にどうしても酒屋は飲み込まれていくわけです。日露戦争は戦費の1/3をなんか酒税の値上げでやったってくらいだからひどいもんですよね。多分今だったら消費税を30％ぐらいにしてあの戦争に向かっていったわけです。酒屋はそれではもたないわけですよ。だからそれで増税反対ということで、その酒造組合というのが全国に立ち上がったという風に聞いていました。

そのくらいにやっぱりあの時代に飲み込まれていく。そして、日中戦争から今度は軍部が力をつけてくると、私どもも、会津酒造さんもそうですけど、それから磐梯町の桑原さんなんかのおじいさん、それでうちの７代目の彌右衛門もそうだけど、大政翼賛会の会長だとか、うちのじいさんは、在郷軍人会長とか、成績優秀につき一応、近衛兵になれとすすめられたんだってことをじいさんは酒飲むとポツっとなんか半分自慢したように言っていましたけど。それから警防団長だのなんだのかんだの地域のリーダーをやらされたって言うんです。

ここに今、「敷島」というのを見て思い出しました。

「敷島の　大和心を人とはば　朝日に匂う　山桜花」

という歌もありますけど、宴会場っていいますか、喜多方には料亭が４つ５つありました

ね。「敷島」はもう今ありませんけど、こういうところに「赤紙」が来ると地元の若者がその「甲種合格」して名誉の出征だということで、必ず在郷軍人会長が呼ばれるわけですよ。酒席に座って若者たちを戦場に結果的に送り出したんです。その葉書が随分残っていたんです。それで、戦後、帰ってきた人は別にして、その戦死した人もまた、お国のために名誉の戦死をしてきたってことでまた酒席をやったんですね。その案内も残っていましたから。

爺さんは戦地には行かなかった。歳だったから行かなかったけど、ただ相当辛い仕事もさせられた。だから当然ＧＨＱが来た時には、「もう悪いことしたわけじゃないし、大したことない、俺は何事もなかったんだ」って言っていたということですけど、それでも公職追放を３・４年受けているんです。耶麻郡からも、県からも、国からも公職追放があって、それが終わった頃にですね、みんな郡からも県からも国からも解かれたんです。それが古い金庫の中に入っていたのをちょっと覚えていますけど。

だからそういう意味で言うと、なかなか国の方向には抵抗できなかった面もあって、もっと主体的に生きられれば良かったんだろうと思います。まあなかなか今の日本もだから相当こういう話になると別の話になるぐらいだけど、トランプのアメリカがあんな国になるっていう時代に入った時に、日本は 戦後80年、昭和100年なんだそうですね。もうそろそろもう１回その「大和心」っていう本来日本が持っている日本の形ね、その右翼化するんじゃなくて、改めて自分の国の歴史を思い直して、アメリカに無理やり書き換えられたみたいなことになっていますから、ここから一歩出ないとダメだなって感じはしますけど、ちょっと余計な話になってしまいました。

＜小林コーディネーター＞

いえいえ。社会貢献のお話をずっとお聞きしてきて酒蔵の姿、役割を果たしてこられたことをお二人から聞いてきたんですけれども、戦争中にはそんなこともあったんだなというのを今お聞きして知ることばかりでした。

大里さんはこのラベルで、戦争中の背景がちょっと伝わってくるようなものっていうことで、紹介もしてくださっていたんですけれども、今もそうなんですよね。

金賞の新酒鑑評会が国税局の管理だっていうのは、私も栗原さんからお聞きしていました。その酒税を集めて国が何かをして、場合によっては、時代によっては、それで戦争二関係してくるということが、かつてはあったということなんですよね。

ここまで酒蔵の社会貢献のお話をお二人からお聞きしてきました。

改めて大里さんから、酒蔵と地域ってどんな関係性だったと見ていらっしゃいますか。

＜大里主任学芸員＞

（酒蔵と地域）

あの展示室の方でも、後半部分ですかね。出しておりますけれども、本当にあのいろんな酒蔵さんの肖像画を出させていただいてたり、長尾さんの蔵の屏風、「長尾家屋敷繪圖屏風」なども出させていただいてます。地域にとっては、本当に大きな地位を占めた経済人であったというところは、まず本当に感じるところですね。ただそれだけでなくて、やはりその酒蔵さんの社会貢献みたいなところですかねノブレス・オブリージュとかいうよ

うなところですかね。そういったところは非常にあったんだろうなと思います。

例えば展示室にあります「長尾家屋敷繪圖屏風」は、長尾家が会津藩の中では１番の大きな酒蔵であったということ、その屏風に描かれた屋敷絵図は、非常に広大な屋敷ですけれども、戊辰戦争でそこが全部焼き払われてしまって、その屋敷の威勢を知るものはあの屏風しか今はないわけです。そういったその長尾家からは、長尾柳涯という人物が出て、後の喜多方美術倶楽部にも関わっていたり、地域の文化を支えていた方です。

あともう1つ肖像画として壁に下げておりますのが山口儀平像というのがありますね。それは会州一さんです。その会州一さんの初代の絵ですが、ここは小林さんの方が詳しいところでありますけれども、あの酒蔵さんでもあったけれども、会津藩の茶道ですね、石州流の指導的な立場にあった一流の文化人であったということですね。

あともう１つは、四家家ですね。いわきの四家さんは、肖像画として又兵衛さんの肖像画を出していますけれども、磐城平藩を経済的にも支える大きな商家でもありながら、江戸の文化人とも付き合いがあって、歌人としても大成した人物でもあったといえます。

＜渡部文一氏＞

ここでよろしいでしょうか。一番大事なお話をしておきたいと思います。

（会津酒造と野岩線、会津鉄道そして大内宿）

野岩線と会津鉄道の話です。

明治の20年ぐらいに、東京の茅場町に野岩越線株式会社っていうのを俺のひいじいさんと南会津の３人で作ったんですね。それでなんでこんなちっぽけな南会津で野岩越線なんての考えられんのかなと思ったら、実はそのバックに近衛篤麿さんという方がいて、近衛文麿さんの親ですね。その方の力があって、結局は日露戦争でだめになったんですね。うちの親父が野岩線をやりたがって田島町長になったわけです。それで結局、鉄道を開通してから町長をやめたんですけども、そのような歴史があって、うちの親父は会津鉄道株式会社を残して、あとは野岩線っていうのを作って、それで満足して死んだわけです。電車で会津に来てもらって、会津に入ってもらえるようにと鉄道を作ったのは、私も見ている前でそれやっていますから分かったんです。そのうちに下郷町の櫻木町長さんを呼んできて、今の大内宿を作るきっかけになったんです。

その前の大塚下郷町長さんっていうのは、いわゆる郷土史家で、大内宿のことを細かく書いています。親父の一番の親友もやっぱり郷土史家で、南会津の歴史という20何巻のものを作った人なんですけど、その人が大内宿は間違いなく本物だから、大内宿を残して観光地にしようということでした。

大事なことを、ちょっと言うのを忘れていたもんですから、発言させていただきました。

＜小林コーディネーター＞
　いや、全然、私、存じ上げませんでした。そうだったんですね。鉄道を引かれて、あの街をつくり、街を残したっていうことですよね。

＜渡部文一氏＞
　あの野岩線は本当に親父のライフワークでした。それで、塩原を抱き込む気になって、あそこにトンネルを開けたんですね。

＜小林コーディネーター＞
　もう、もはや地域づくり、街づくり、なんか小さな国のようですね。すごいなと思います。
　喜多方もあの旦那さんたちが、磐越西線をグーっと北に引っ張ってきたお話を先程お聞きしましたけれど、本当にそういう風に牽引して地域づくり、街づくりということを酒蔵さんたちがしてこられたんですね。

＜佐藤彌右衛門氏＞
（酒蔵と行政）
　大体その酒屋とか味噌・醤油屋っていうのは、米屋、麦屋、大豆屋は、昔はもうジャンジャンと作っていたわけですから、会津はもう非常に自給できるだけの豊かな量があったわけです。
　ただその飢饉になったりして、米が取れなくなると、酒屋はちょっとまずいぞと、米のある時は酒屋に持っていく、つまり受給の安定、価格調整もやっていたわけですよ。
　そのために、お前に免許をやるから、お前んとこは酒つくっていいよ。これ、あの味噌醤油もそうですが、そういう為政者と一体になって、経済の安定のために、それはある程度行われている。だから、いざという時は、その代りにお前もやんなくちゃならないよ、みたいなことなんですね。
　土木や建築が、やっぱり行政と裏表に必ずないといけなくて、いざというときに、あんまり土木業者が減っちゃうとダメなわけです。やっぱりそれと同じように、受給調整という役割を見直されていたわけです。
　だから辛い時もあったんだろうと思いますよ。

＜小林コーディネーター＞
　あの、辛いとは心と反対のことをせねばならないことですか？

＜佐藤彌右衛門氏＞
　いや、辛いっていうのは、お上から命じられて、あんなことまでなんでやらなくちゃなんないんだってことで、やらざるを得ないっていう、それはだから大戦もそうですけどね、やっぱりあの頃、みんな巻き込まれていくわけですけど、そういうことも反面あるわけで、だから決して、酒屋ってそんなに周りから見えるほど、よろしくはないんですけどね。

＜小林コーディネーター＞

辛い思いも抱えながらやってこられたっていうことですね。

＜渡部文一氏＞

新規参入者ゼロっていう世界ですから。

＜佐藤彌右衛門氏＞

（杜氏のいる風景）

例えば、杜氏たちが来る。もうこれは大変だ。もう一冬、これから御三どんしなくちゃならない。面倒見ないと大変だけれど、その大人数がいると、これは、ご飯はうまいしね。だって、大釜で炊くわけですから、しかも、正月も過ごすわけですね。あの一旦、仕込み始めると途中で、やめるわけにはいかない。完成するまで。もう微生物が発酵していくわけですから。

大晦日も、みんなで食べて、次の日は、杜氏衆たちがね、餅つき始めるわけですよ。僕の子供の頃ね。彼ら馬力あるからね。もう一升二升、五升ぐらいの餅はどんどんついちゃうわけで、つきたての餅でね、うまいんです。ぎゅっと臼から取り出して、醤油をペロンとやって食ったりすると最高でね。朝寝坊していると、下の大きい天井の高い入口のところが、臼をつく杵の音がトントントントン聞こえてきて、それで目が覚めて、「今日は餅だ！」。美味しいもの、美味しいって贅沢もんじゃなくて、そういうものが食べられたっていうことがあります。

あともう１つは、やっぱり厳しいけど、一応いろんなイベントをやるわけです。杜氏たちが、くたびれないように、杜氏たちを慰労する酒盛りやって、その宴会があり、そこで歌が出る、様々なことがある、そして、やっと春になると今度は、そろそろ帰る頃になるわけです。火入れと言って、あのお酒の発酵を止めて、樽に酒を収めて、そして杜氏衆たちが帰っていくわけですよ。一気に。その頃になると雪どけでね。あの屋根からぽたりぽたりと雪の雫が落ちて日差しが温かくなって、みんなを見送った時の、そのほっとするときの喜びというか、そういうものもあるわけです。

例えばこの、７代目の爺さんの歌にあるんだけど、

「唎酒を吐く窓下に残る雪」

というのがありますね。その春先に、あの最後のどの酒をやるかあるいはこういう鑑評会に出品するか、仕上がった先はずっと検査室に並べて、あの蛇の目いう二重に藍の丸が入っている猪口で色を見て利き酒して、その時にもう春で、「唎酒を吐く窓下に残る雪」ということで、ほっとした感と新酒が出来上がったっていうのとがあるわけですね。

それからここにもう１つありますけれど、「利き底の蛇の目の藍も春の色」ってなるんですよ。だからこういう句が詠めるっていうか、そういう立体的な空間の中で、春が来て、夏が来て、お祭りがあって、祭りになるともう大変ですよ。みんな酒屋が一生懸命、金出してお祭りやるみたいなもんですから。

そうしてまた秋が来て、杜氏が入ってくる。その春夏秋冬の流れの中に酒屋はあったということで、それはある意味で、こういう文化を生む土壌でもあるわけです。そういう立

体的な空間があるからあの文人墨客が寄ってくる、多少その政治家が来ても何が来てもご馳走するぐらいの余裕はあるということなんでしょうね。ちょっとね。そんなことで悪いことが実はないということですね。

＜小林コーディネーター＞

はい。だからこそ文化が生まれ、先ほどお祭りにも触れてくださいましたけど、喜多方も田島もね、大事なお祭りをずっとずっと地域と続けてこられていらっしゃいますよね。

それでは、だんだん時間も迫ってまいりましたので、少し質問をしながら、最後の方に向かっていきたいなと思っています。

今ずっとですね、大和川さんと会津酒造さんに、それぞれの蔵元がどんな蔵元だったのか、そしてどんなことをしてこられたのかをお聞きしてきました。教えていただいてきました。

蔵元のこれからについて、今度お二人にお聞きしていきたいんですが、自己紹介でも触れてくださっておりましたけれども、代替わりが進んで、新しいシーンにそれぞれの蔵元さんが進んでおられるんだと思うんですが、改めて、代は変わって、ちゃぶ台返しされているとしても、会長の彌右衛門さんから見て、大和川酒造店のこれからは、どんな風に地域と関わる蔵元であって欲しいなと次の世代に託したいと思っていらっしゃるか、このあたりもお聞かせいただけますか。

＜佐藤彌右衛門氏＞

（新しい価値観と古い価値観）

はい。自分としては、一生懸命、時代の中で生きてきて、マーケティングして生きてきたつもりなんです。でもやっぱり私たちが一生懸命頑張ってきた時代は、戦後の高度経済成長を経て、まあ70年安保ってことはないですけど、私たちはその団塊の世代のちょっと前にいるんですが、ほぼ団塊の世代ですね。この時代の価値観はやはり今の若い世代、私たちのお酒を飲んでくれる男女含め若い世代ではなんて言うのかな。古い世代で言うと、ダイレクトマーケティングやっていました。あの通信販売で季節ごとの酒のカタログを送るとですね、「もううちの旦那が亡くなってので、お酒は飲む人がおりませんから、送らなくて結構です」とか、「そろそろ年になったので、お酒飲めなくなりました」とかお話しがくると、「ああそうだな」と思い、つまり僕たちが生きてきた時代ではない時代を今の世代、次の世代が迎えているわけです。

だから新しい価値観と出会っていくから、当然私たちの価値観はもう彼らからすると若い世代からすると必要ないんですね。終わっていく世代で、彼らは今度その時代の同期の連中からまたその若い連中に仕掛けていかなくちゃならないからそれを思えばまあ古い価値観は早く、どうせ古い世代のマーケットはいなくなるんだから、次の世代に向けて新しいことをやっていかなくちゃなんないんだとそういうことを。私も昔同じようなこと言っていたんですよ。

あの飯豊蔵を造って、あの最新鋭の工場だと思って作った頃ですね。親父に言ったんですね。「マーケティングね、俺たちがやってるんだ、こんな古い酒じゃ売れねえんだよ」と。その頃、親父はまあ一線引いていたので、朝からもう神社の掃除始まって、掃除好き

な人でしたから。

そのある時、その飯豊蔵を造るっていう時にまあ大きな借金をするんだけど。あの頃は生命保険に入ると結構それが担保になったんですよ。そこで、親父に「あと１億足りないんだよ、だから親父、保険に入ってくれと、銀行もそう言うと１億出せるからと言うので、保険に入ってくれ」って言ったらね、親父が「いや俺はもう保険といっても、戦争のあん時見てみろ、あん時預金もそういう金融証券全部パァになったんだからこんなもん絶対好きじゃない」とか言いながら保健に入ってくれなかったんですよ。それで小さくして投資したんですが、その時にね、親父と喧嘩しましてね。親父が「お前ねマーケティング、マーケティングって生意気なこと言ってるけど、お前、今売れてんのが何だか分かるか。コカコーラの瓶のデザイン変わったの分かるか」って言ってくるんですよ。俺は「えぇっ」となるわけです。「グリコのアイスクリームのデザイン変わったの分かるかとか」って、これも「えぇっ」となるわけです。親父は、よくコーラが好きで飲んでいたんですね。親父から「お前そんなことも知らねえのか、何がマーケティングだ」とかってやられてですね。いやそれやられると思わなかったけど、でもまさにそうです。

やっぱりいい気になって有頂天になっている頃に、ガツンとこう頭を叩かれたっていうのはね、１つ大きなね、反省としてありますね。だからさ、そういう時代、必ずあの調子のいい時に乗っていても、その時に乗りすぎない。それをやっぱりちゃぶ台返しでどっかでやるっていうのは必要なのですね。あの若い世代には「思いきりやれ」と言うのは、それはそれでいいんです。だって、次の時代は私たちはどんな時代が来るかわからない。ただあのエネルギーもそうですけど、依存するような形では、やっぱりやられてしまう。

（水と食料とエネルギーの自給）

自分で水と食料とエネルギーを自給するっていうのは、私でも、酒屋でも、とっても大事です。米も自分で作り、エネルギーも自分で作ったものを使う。遠くから持ってくるようなものを使っていること、日本全体で化石燃料を25兆円も買っているわけですから。国家予算の1/4にも匹敵するような額です。それは国が買っているのではなくて、民間がみんな高いエネルギーを買っているわけですから。そういうことではなくて、地元のものをちゃんと使うということをやっていくということは、教えていきたい。そのことは先人からこの豊かな会津を守っていこうと次の時代に渡していくよって、いうことはその７代目も８代目もやってきたわけですから、そこを一番伝えながら、あとはね、マーケティングは残念ながら私たちは、一応年金世代でお金を使う世代であるから、俺たちも大事にしないとダメだよとは言ってるけどね。

あんまり酒もだんだん飲めなくなってきましたからね。そういう意味では、あの次の時代にまあなるたけ原発のようなひどいものを残さないで、ここで終わって渡してやんないと、あれ必ず子供や孫の時代まで行っちゃいますから、ああいうエネルギーの形ぐらいは変えていかないとだめだなと思っています。

＜小林コーディネーター＞

ありがとうございます。大和川さん、次の世代に変わって、新しい社長がリニューアルされたミュージアム、私もお邪魔してきましたけど、入り口にかけられたのれんも変わら

れて、そこに書いてあるのは「四方四里」ですね。それはさっきご挨拶であの自己紹介で言ってくださった「四方四里」。彌右衛門さん大事にしてこられた大和川さんの心情をちゃんと受け継いでもいらっしゃるんだろうなと思いますので、これからの大和川さんの動きにも私たちもまた期待もしています。そしてご一緒できる部分、皆さんと一緒にしていきたいなとも思ってもおります。

それでは、渡辺文一さん、お願いいたします。

＜渡部文一氏＞

（高度専門家の時代へ）

商工会で本当に皆さんが、福島第１原子力発電所が爆発して、それがやっと風評被害のいくらかが落ち着いたなと思ったら、今度はコロナ禍で、それでいろんな行事を県内の中で地区の中で見てきたところで、つくづく感じさせられたのは、造り酒屋であろうと床屋さんであろうと土建屋さんであろうと、何でもこれからは何と言っても「高度専門家」の時代です。

それでそれをＡＩでも何でも活用しながら最高のレベルのものを自分で開発して作っていくというか、やっぱり高度専門家にならなかったらやる必要はないと思います。

私の場合はあの親父から受け継いで、親父というのは商売一つもやんなかった人なんで、私はひどい目にあって相続税ばっかり払って、もう裸になっちゃって、もう本当にあの山林とか、土地なもんですから、隠しようもなくて、どうにもなんなくなって税金だけ取られてきたんです。

だけど、息子が学校で勉強して帰ってきて最初の一言が、「俺は財産も何にも土地も山も何にもいらないから、これだけやってくれ」って、その無菌状態のあの冷凍庫を作ってくれと言うんです。あのでっかい冷凍庫、あの時、4～5千万円したんじゃないかなと思ったんですけど、「そんな高いもの買えるわけねえだろ」って言ったら、息子は、「もう何にもいらないからそれなかったらこれからの造り酒屋やる必要ないからもうすぐ商売やめましょう」て息子に言われて、「なるほどな、そういう時代なのか」と思って、もうそれから、ちゃぶ台返しじゃなくて、俺は、もう全部社長の座から何から、株券から、全部息子にやっちゃって、自分は退きました。

そんな感じで決してこれからは、やっぱり高度専門家でやって、世界を見て生きていくというのが一番大事なことなんじゃないかなと、醤油なんかもすごいでしょ、今世界中にあちこちに出て行っています。日本酒だって、シャンペンとかワインとかに負けないように世界にやっぱり乗り出していくのはこれから、と思って若い世代に期待をしております。以上です。

＜小林コーディネーター＞

ありがとうございます。あの南会津・田島の４つの蔵元さんでタッグを組んで最近新しい動きにも取り組まれてもいらっしゃいますね。そういうあの集まりがあってこそ、これから、もしかしたら海外にさらに伝わっていくこともあるのかなとも思います。

是非、今日お二人から頂いた言葉をね、蔵元さんそれぞれにまた伝えていきながら、文化で地域を一緒に作っていければなと思います。

最後にちょっとお時間に近くはなってきましたけれども、酒の歴史を知るスタートに立ちましたと最初おっしゃっていた大里さん、あのお二人に今日たっぷりとその蔵元の歴史から役割から教えていただきましたけれども、改めて民俗の学芸員として会津の酒蔵さんに寄せる思いとか期待を最後に聞かせください。

＜大里主任学芸員＞

今、小林さんにもおっしゃっていただきましたけれども、本当に今回の企画展が、本当に始まりに立ったぐらいというところは、本当だなと思っております。展覧会をこうしてやって見ていただくとありがたいことにいろんなご意見をいただくんです。それで「こういう資料がうちにもあるよ」というようなことをもうすでにいくつも頂いております。そういったところからも、これが終わりではなくて本当に始まりだというところで、また研究を進めて、私ができるかどうかはともかくとしても、また次の世代も、今回が県立博物館としては酒の展覧会は初めてですから、二番煎じにはならずに研究成果の新たな進展を見せた上で、 次の酒の展示がいつかできるといいなと思っております。

本当におめでたいニュースもありまして、まず企画展が9月21日から始まりましたが、その前の9月の時点では、私も今このＴシャツ着ているんですけれども、南会津の方では特定の地域名称ですね、ＧＩの表示を南会津の日本酒が取れたということで、県内の日本酒業界にとっては嬉しいニュースであります。

また、全世界の部分では、これも企画展が終わった12月に正式決定になるという話だったものが、11月5日に、日本の伝統的酒造りがユネスコ無形文化遺産へという嬉しいニュースもありました。博物館では、その地域の文化も掘り起こす仕事もしながら、福島県の酒とその文化を世界に向けてまた発信していくための盛り上げる一助になればいいなと思っております。

＜小林コーディネーター＞

県立博物館としても、いい意味でのちゃぶ台返しがいっぱい起きるといいなと思います。

それではお時間になりました。たくさんの「酒と会津と男と女」のお話をお聞きしてまいりました。皆様いかがでしたでしょうか。それではこれにて「会津塾」第１分科会の２時限目を終わりたいと思います。パネラーの皆様にどうぞ大きな拍手を最後にお願いいたします。

ありがとうございました。

＜第２部＞　第２分科会　１時限目（13:10～14:40）　　＜会場：講堂＞

映 画 と 会 津 地 域 活 性 化

(1) 講　演（13:10～14：00）

演題:映画「霧幻鉄道只見線を300日撮る男」の安孫子亙監督がみた会津の未来

講師:監督　安孫子 亘 氏

⑵ 鼎　談（14:00～14：40）

テーマ:「映画を活用した会津の地域振興」

＜登壇者＞

監　督　　安孫子　亘 様

会津若松商工会議所　会頭　　澁川　惠男 様

福島大学客員教授（会津文藝代表理事）髙野　武彦

◆◇◆ オープニング ◆◇◆

＜高野客員教授＞

皆さん大変長らくお待たせいたしました。定刻となりましたので、会津塾の第２分科会を進めてまいりたいと思います。

第２分科会でございますけれども、映画をテーマにして:「映画を活用した会津の地域振興」について、皆さんと考えていきたいと思います。「映画は地域振興に結びつく」という考え方の下で、本日は安孫子監督にご講演を賜りたいと思います。

やはり映画は、地域の魅力や地域の再発見につながります。ドキュメンタリー映画などは本当にいろんな角度からいろんな視点から地域を見ることができると思います。今日は、安孫子監督から「会津の未来」についてお話をいただきたく企画いたしました。

早速ですが、安孫子監督から、まず50分ほどご講演をいただきたいと思います。

その後、安孫子監督と澁川会津若松商工会議所会頭、そして私の３人で鼎談をしたいと思います。

安孫子監督のご講演をお聞きしながら、感じた感想なども踏まえて、映画を未来の会津の地域づくりにどう活かしていくか、今日は皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

それでは安孫子監督、どうぞよろしくお願いいたします。

(1) 講　演（13:10～14：05）

演題:映画「霧幻鉄道只見線を300日撮る男」の安孫子亘監督がみた会津の未来

講師:監督　安孫子 亘 氏

＜安孫子監督講演＞

ご紹介どうもありがとうございます。

会津で、ドキュメンタリー映画を制作しております安孫子亘と言います。

今日、本当にこういう機会をいただきありがとうございます。

（森康ジャパンに学ぶ「組織づくり」）

皆さん。昨日(11/15)のサッカー、観ましたでしょうか。あの日本代表がインドネシアと今ワールドカップを戦っていますけれども、素晴らしい勝ち方をしました。インドネシアは、そんなに強いチームじゃなかった。でも、森康監督は、今回、すごいチームを作ったなあと思いました。あの森康ジャパン、よくここまで強いチームを作ったと思います。

これは、組織の作り方だと思います。１つのチームづくりではありますけども、言い換えれば自治体であったり、会社であったり、小さな団体であったり、そういったものに置き換えられるんじゃないかなと思います。

要は、森康監督は、チームのリーダーであります。自治体や会社でもリーダーはいます。その下に選手たちがいる。それをサポートしていくサポーターがいます。チームの選手には家族がいます。そうした方々のサポートがあって選手たちが個々に動ける。森康監督は、そういった組織づくりをして、日本代表をうまく操ってここまで来ているなと思います。選手たちの個々の力がついてきました。選手それぞれが活躍する海外をはじめ、いろんなところで技を磨いて、個々の能力を高めている。そういったところに、今のチームの強さがあるんじゃないかなと思います。

（「会津はひとつ」から「会津ジャパン」へ）

それをまとめていくリーダーの存在は、どこの地域にもあると思います。この地域のリーダーの存在は、重要なことだと思います。そして、周りで支える市民の力、サポート力が一番大事だと思いますし、それを一つにまとめていくことが大事だと思います。これはいつも高野さんが言っている「会津はひとつ」だと思います。

皆さん、「チームジャパン」がありますが、私は「会津ジャパン」という、会津は地方の小さな一角ではない。会津があって日本が作られる。「会津ジャパン」という考え方が大事だと思います。「会津ジャパン」私はすごくいい言葉じゃないかなと思い、私は今日、一つこの「会津ジャパン」という考え方を持ってきました。そういったリーダーの力が私は必要だと思っています。

（映画には力がある：安孫子監督作品から考える）

映画には力があります。これまで、私は、映画を作ってきましたが、多分私の作品まだ見たことない人がいっぱいいるかと思います。

挨拶を兼ねて、ちょっとだけ短くまとめたものがありますので見てください。

これは、リーダーの存在の映画です。

＜ドキュメンタリー映画「『知事抹殺』の真実」予告編＞

https://www.youtube.com/watch?v=ZC78mYQZaoQ

・日本映画復興賞奨励賞受賞(2017年)
・江古田映画祭グランプリ受賞(2018年)
・国際映画祭Digital Box Office Awards 正式出品

この「『知事抹殺』の真実」は、私の代表作になってしまいました。今、どこに行っても「あの『知事抹殺』の人ですね」って言われてしまいます。

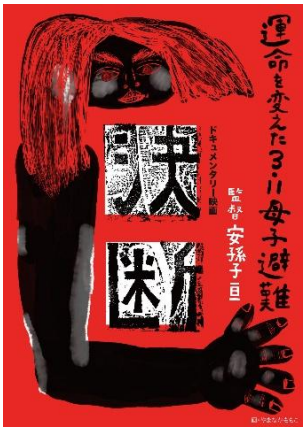
このドキュメンタリー映画を公開した時には、会場が溢れて、とんでもない事態が起きました。あのひとつの社会現象が起きたんじゃないかなっていうぐらい、みんなの関心を集めた映画になってしまいました。

この細かいところはですね、実際に皆さんにどこかで見ていただければと思いますので、触れませんけれども。まあ、このタイトルもね、ちょっと過激なタイトルでしたので、福島県ではうけても、県外ではどうかなと思ったのですが、県外でもすごかったんですね。沖縄に行っても、札幌に行っても、どこも満員なんですよ。それはタイトルにも（インパクトが）あったかなとは思います。

このタイトルをどうやってつけたのかということですが、実は、ある人に会った時に、『知事抹殺』という厚い本を渡されたんです。その方から「今こういうことが起きてるんだ。なんとか記録できないか。映像にできないか」という相談を受けてですね、その本のタイトルである「『知事抹殺』の真実を見よう」ということで、『知事抹殺の真実』というタイトルになりました。

この映画には、今でもオファーがあります。いろんなところで上映しています。

今は、『決断』という映画を上映しております。これは、今、全国公開、劇場公開が終わって、自主上映会という形で全国を回っております。



＜映画『決断』の予告編＞

https://www.youtube.com/watch?v=w7RU55-pCzs

・「国境なきドキュメンタリー国際映画祭」(2024年アメリカ)
　受賞作品

これが『決断』っていう映画なんですけれども、『知事抹殺の真実』を札幌でやったんですよ。北海道で上映した時にですね、そこ

で呼んでくれた被災者が「私は3.11で自主避難をしてきました。幼い子供たちを連れてきた母子避難なんです」と言うんです。

そこで初めて私は、福島県から避難してきた人に会ったんです。彼女から「あのこういう人たちが私を含めて全国にいるんです」っていうことを聞いて、原発事故から７年経っておりましたが、私はいろいろ取材も広げて、いろんなところにこういった避難をされた方々の声を拾いに取材に行きました。そしてできたのが『決断』という映画です。今、いろんなところで上映しています。いわゆる「自主避難」と言われている人なんですけれども、そういった人たちが13年経った今でも、ある意味過酷な暮らしをしています。

何がこの映画で描けたかと思いますと、それはやはり、「避難したことが正解だったのか、正解じゃなかったのか」、「避難したくてもできなかった人もいるだろう」、「そういうことすら思わなかった人もいるだろう」という様々な思いがあると思います。

その答えは、私は「正解はない」と思います。それぞれが、それぞれの思いを持って、今福島県はこういう現状にいるんだろうなあと思っていいただきたいと思います。

この人たちの一部の声を皆さんに聞いていただいて、この自主避難と言われている方々が、今日本にもまだまだたくさんいるんだということも、私は全国の人にそして世界中の人に知っていただければなと思います。

そして、何よりも、そういった決断に至った原因というのは、やはり原発事故での放射性物質の流出ということであって、皆さんの恐怖を、そして命に関わる重大な「決断」をせざるを得なかったということです。その要因は消えることはないと私は思います。

いろんなところで、今、裁判が行われています。勝った負けたどっちにしても、あの元に戻るというのはなかなか難しいかもしれない、でもそういった現実を伝えるのも私の役目かなと思っています。

この『決断』は、県外からのオファーがすごく多いのですが、久々に来週(11/23) 福島県内の喜多方市で上映します。もし良かったら来てください。そして、大阪や青森の映画祭、来年３月には東京の映画祭でも上映することになっていますので、もし良かったら、皆さんどこかの機会で見ていただければなと思っています。

こうしてみると、「安孫子監督、お前は　原発の映画しか作ってねえんじゃないか」って言われそうですけども、そういうわけではないんですよ。

次に、見ていただくのは『奇跡の小学校の物語』です。

これは小学校の統廃合をテーマとして、それを物語にした映画です。ちょっと見てください。

＜『奇跡の小学校の物語』の予告編＞

https://www.youtube.com/watch?v=5MnMhwPKBrA

・文部科学省選定
・厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財
・栃木・蔵の街かど映画祭招待作品

これが『奇跡の小学校の物語』です。

この小学校は、あと５年で廃校って言われたんです。宇都宮市の城山西小学校っていう、ご多分に漏れずどこでもある、「児童数が少なくて閉校になっちゃうよ」という話だったんですけれども、「あと5年」って言われたその小学校が、ある校長先生の赴任で一転してしまった。

その校長先生が使ったのが１本の桜です。この桜は校庭のど真ん中にあるんです。これは珍しいですよね。どうやったって邪魔なんです。でも素晴らしい「しだれ桜」なんです。「孝子桜」と呼ばれて、親孝行の桜という言い伝えがある桜です。

この１本の桜を利用して、この校長先生は、この学校を救ってしまった。これはすごい話です。とても見事な話なんです。詳しい話をするとあっという間に時間がなくなっちゃうので省きますが、この校長先生が赴任してきた時に、この満開の桜の下で地元の人が二人だけでおにぎり食べているところを見ました。

地元の名もない桜を、この校長先生は「地域の宝」として作り上げて、翌年「桜祭り」を開いたんです。そしたら５千人も来たんです。その次の年には２万人も来たんです。そうやって、この学校をどうやって宇都宮市という広い市の中で知ってもらうか。「小規模特認校」になると、通学圏内を越えても通えるシステムがあるんですね。そのために、いろんなところにこの小学校を知ってもらいたいがために、校長先生、地域のリーダー、そして地域の人たちが固まって、一つになってこの学校を救ったというお話です。

この『奇跡の小学校の物語』には、つい最近も北海道の美瑛町からオファーが来ておりまして、さらに今、日程を決めている最中のものも何件かあるんです。

この映画は 2016年くらいにできた映画なんですが、オファーが、ずっとなくならないんです。それほどこの統廃合、児童数の減少に伴うそういった学校の整備に関して、いろんなところで問題がある。でもその学校がその地域の象徴であり、やはりその街を作っていくためには、本当に不可欠なんだということです。そうした思いの市民の皆さんが、「力を合わせて学校を守るためにこの映画を使わしてくれ」という話がすごく多いです。

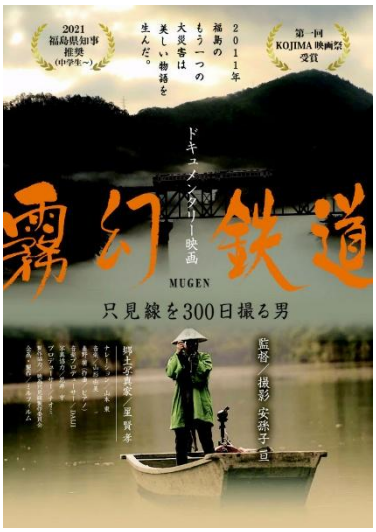
一つの映画の力っていうのが湧いたんです。働いたんです。

実は、二つの小学校で、この映画をやってくれというオファーがありました。特に父兄の皆さん、保護者の皆さんが一丸となって、この映画を小学校の体育館でみんなに見せて、この学校をなくさないようにしようと、集会を開いたんです。こうしたことを全国でやっているんですけれども、その２校はその翌年に残ったんです。

その２校のうちの１校は、会津若松市の大戸小学校です。これは小規模特認校として存続しています。

保護者の皆さんからは、「映画やって良かった」「ありがとうございました」という一報を受けましたけども、私ら映画人としてはそういったことに働きかけられるようなこの映画ができた、そして見せられて何かを変えられたっていうのはあまりないんです。ですから本当に嬉しかった。たった２校かもしれないけれど、そういう熱意と情熱、そしてこの中の人たちの言葉そして行動が乗り移ったような、そういったことを私はすごく感じています。この映画を作って良かった。そして、今でも全国でこの映画を待っていてくれている人たちに届けたいと思っています。

そして、本日の講演のタイトルにもありましたけども、霧幻鉄道、只見線の映画を作りました。



＜映画『霧幻鉄道　只見線を300日撮る男』の予告編＞

https://www.youtube.com/watch?v=owS92U_DLEQ

- 2021年：映画「霧幻鉄道」が福島県青少年健全育成条例に基づく「有益な映画」として「福島県知事推奨」を受ける。
- 2023年：映画「霧幻鉄道」がKOJIMA映画祭で最高賞（倉敷市長賞）を受賞

これがあの「『霧幻鉄道　只見線を300日撮る男』です。

これは星賢孝さんですね。あの熱血漢ですね。この人のおかげですね。只見線に、多大なる力を与えたんじゃないかなと思います。いろいろな働きかけで、この只見線がつながりました。けれども、やはりこの星賢孝さんの存在も大きいんじゃないかなと思います。

あの賢孝さんね、皆さん知っていますか？ちょい悪親父なんですよね（会場笑）。結構かっこいいし、優しいし、ちょっと危険な香りもするようなね。そして、これがモテるんですよ。いろんなとこ行ってもファンが多い。特に、台湾行った時なんかは、すごいです。（星賢孝さんは）もう先生ですから。もう、日本以上に台湾の人たちが、エネルギッシュに応援しています。多分皆さん（星賢孝さんの県外での人気のすごさは）お分かりにならないかもしれないんですけども、この前も東京で写真展やって、行ってきたんですけども、本当にファンが多い。星賢孝さんの写真、ＳＮＳにバンバン、バンバンあがっていますけど、あの写真を見て訪れる人が多くなっている。これが現実です。私もこういう仕事していて、元々カメラマンなんですけど、（星賢孝さんのようなことは）できないです。年間300日、それも35年ぐらい、同じところで、只見線というずっと同じもの撮っているんですから。これは、生業としては成り立たないです。この人は、郷土写真家という肩書きがついていますように、これは、プロの写真家ではない、郷土写真家、故郷の写真家です。だからこそできた。そして、だからこそ生まれた。こういう只見線の物語だと思います。

星賢孝さんがやっていることは、私は本当に頭が下がるばかりです。この只見線にかける情熱というのは、ただ者ではない。そういうことが、只見線の全線開通という働きかけや動きに多分な力を注がれたことなんだと思います。特に、生まれた環境が、霧が立ち込める霧幻峡と言われるところです。和舟、この手漕き舟ですね。これも50年ぶりに復活させてしまうんですね。この只見線の霧幻鉄道の映画とともに、異常な盛り上がりを見せているんですけども、やはり人を呼び込むことができる、皆さんの関心を勝ち取るっていうことで言ったら、私は、お金じゃないなと思います。星賢孝さんのやっていることっていうのは、お金ではない。いろんなところで写真展を開催し、そして私たちも一緒に映画、その他いろいろなイベントに行きますけども、ほとんどお金を取らないんです。少し取った方がいいですよって言うんですが、「そういうことでやっているわけじゃない」と言うんですね。逆に、お金のためにやっていたらこういう風にはなんなかったかもしれないと、

私はそういう風にも思います。星賢孝さんは、やはり只見線、そして会津の景色、風景を愛しているんです。星賢孝さんは、「私は撮鉄ではない」って言うんです。「電車を撮っているだけじゃない。奥会津の風景、素晴らしい風景が、これはもう刻一刻、毎日毎日、毎分毎分、違うんだ。それを私は撮り続けて、まだ見ない、まだ見ぬ景色を私は撮りたい。その景色の中に只見線がぽっくり入っている」と言っています。それを星賢孝さんのやはり生きがいとして、星賢孝さんの活動は続いていく。そういうことですね。

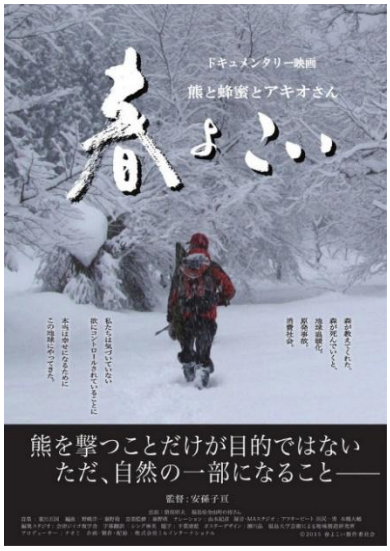
まだ、この映画を見ていない方は、もしよかったら、明日(11/17)、郡山でやります。星賢孝さんも行きます。私も行きます。

それで、なぜ奥会津くんだりまで、外国から観光客が押し寄せてくるんだろう。私は、「聖地巡礼」っていうことが言えるんじゃないかなと思います。あの写真のところ、あの写真を撮りたいっていう人もいるかもしれません。あの風景の中に溶け込みたいっていう人たちもいると思います。そして、只見線の全線開通とともに、この映画が公開になったんですけども、各地で公開した時に、やっぱり只見線見に行きたいっていう方が北海道から私は九州までこの映画を持って行った時に何回言われたかわからないです。それほど自分たちの日常の中にある景色以外の日常を離れた景色の中に入ってみたい、そして見てみたいっていう観光客の欲をかきたてるんだと思います。そして、「ＳＮＳで見た写真のところに行ってみたい」「映画で見たところに行ってみたい」と思わせ、行動させるところにも、やはり映画、映像の力っていうのはすごく感じる。そしてあの自分なりにもそういった思いを持ってこの映画を各地で上映していっています。

次にもう1本見てください

＜「春よこい～熊と蜜蜂とアキオさん～」の予告編＞

https://www.youtube.com/watch?v=jIC_5p0a_fg



これは、「奥会津の最後のマタギ」と言われる猪俣昭夫さんを撮った物語なんです。元々マタギを撮ろうっていう意欲がありました。東日本大震災の後でしたので、私はそれにプラスして、放射性物質が自然界にどうやってはびこっているんだろうなっていうことをふと思ったんですね。それについては、山の詳しい人に聞こうということで紹介を受けたのが、金山町の猪俣昭夫さんでした。お会いして、素晴らしい方だなと思いました。

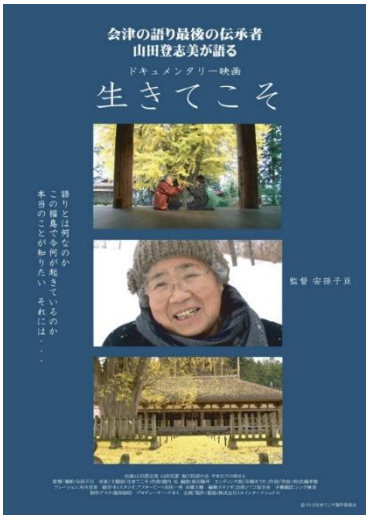
この間、２年から３年撮っていたんですけど、熊にはなかなか会えなかったです。でも、猪俣昭夫さんからは、「その山を見る、そして山を知る」。「熊も住めない山になったら人間も住めなくなるよな」と、山に対して、そして自然界に対して、自然と共に歩むということはどういうことなのかということをとくと教わりました。

皆さん、ご存知かもしれないんですけれども、猪俣昭夫さんが、ちょっと倒れられましてね。あの強靭で頑丈な方がですね、ちょっと体調を崩されてしまったんですね。関係者に聞いたら、今はだいぶ良くなって家にも帰って、ちょっと左半身が麻痺したんですけども、少し動くようになってきたとのことです。それで、もう山に行っているって言うんで

すから。「ええっ」て驚いて聞いたんですけれども、麻痺しているのに車椅子で山に行っているそうです。山に入って自然にたわむれて、そういったことがリハビリにつながっているんだなと思います。これはもしかしたら元に戻っちゃうかもしんないよ。俺は、本当にすごく可能性を感じました。いろんなところに、猪俣昭夫さんと一緒にこの映画を持って行きますと、猪俣昭夫さんの「春よこい」は、マタギということで、すごく珍しがられて、関心を持たれました。

猪俣昭夫さんは、日本蜜蜂もやるんですね。非常に詳しいです。それでスペシャリストなんです。大手メーカーのテスターまでやっているぐらいの人なんです。それで、私も日本蜜蜂をやってみようかなと思ったら、できまして、今でもずっと続けています。私のことはいいんですけども。皆さんには先程、猪俣昭夫さんのあの元気な姿を見てもらったんですが、やはりこういった記録映画っていうのは、大切だなと思います。こういったものをやはり記憶に留める。これから山に入る人たち、そしてこれを目指す人たちにとってはすごくバイブル的な映画になるだろうし、ドキュメンタリーはもう劇映画みたいな作り物ではないので、教科書そのものです。一挙手一投足、喋っている言葉全てが、後世に伝えられるものが、この記録映画なんじゃないかなと私は勝手に思っております。

猪俣さん、早く元気な姿を見せていただきたいと思います。猪俣さんは、東京オリンピックの時にマラソンランナーまでした人です。猪俣さんは、映画になる前はそんなに露出度はなかったらしいです。映画になって、この「春よこい」というマタギの映画が全国でやるようになって、とんでもない変身ぶりといいますか、周りがですね、周りが騒ぎ立てるようなことでとんでもないことになっちゃったんです。あのBE-PALという自然界の大手の雑誌なんですけれども、そこで連載があったり、時計のメーカーであるロレックスがビデオを作ったり、様々な形で猪俣さんの元を訪れるようになって、大変な露出度になってしまいました。これは良かったなっていう代わりに、過酷なことをさせてしまったなっていう責任もあります。これは勝手に映画を作って公開して、どうだっていうことではないと思います。私は、作ったら作ったなりの責任もあってですね、私はもう一生涯付き合っていくと思いますけども、私たちは被写体になった人たちの後々にも責任を取らないと作った者として示しがつかない、そして作りっぱなしで、ほったらかしではいけないと思います。私は、昔、テレビの番組を作っていたんですけれども、テレビみたいな使い捨てのそういった仕打ちだけは私はしたくない、こういった人たちを私は大事にしていきたいと私は思っています。



もう1本見てください

＜「生きてこそ」会津の語り最後の伝承者　山田登志美＞

https://www.youtube.com/watch?v=s_b9pdFtGQc&t=7s

『生きてこそ』見ていただきました。

最後に、避難者の仮設住宅に行っているシーンがあるんですけども、この仮設住宅のシーンをちょっと覚えといてもらって、その前に山田登志美さんについて、お話しします。

私は、「会津の昔語り」という文化が福島にあるっていうのを全く知らないで会津に来ていまして、知ったときには、すごく衝撃を受けました。面白い方だなあ、そして語り口がすごくいいなあって思いました。普通に雑談していても昔語りになっちゃうぐらいのそういった対話力を持っている人なんですけれども、惜しくも１年ちょっと前に、お亡くなりになられました。

先ほども言いましたように、私はこういった姿、最後のおそらく全盛期の頃のあの語りを撮れています。そういったものが記録できたっていうことは、本当に私は幸せだなあと思います。この山田登志美さんは「語りの世界」では、「日本の宝」だと思います。そういった人が、だんだんこうして亡くなるわけですけれども、こうやって「映像の中で生きている」そういった言葉が生きている、言葉が皆さんに聞いてもらえる、それはやはり映像の力じゃないかな、そして映画の力じゃないかなと私は思います。

（会津ジイゴ坂学舎）

先ほどの仮設住宅に話は戻ります。実は、私、仮設住宅を譲り受けたんです。それもログの再生可能な住宅で、これが私の映画を作っている、会津ジイゴ坂学舎という下郷町の落合の分校です。廃校となる分校の木造校舎で100年近いもんですから、隙間風ビュービューでした。

そこで、その横に仮設住宅を移築しました。その中で映画を作っています。今まであまりにも寒いからちょっと暖かいところ欲しいなあと思ってその仮設住宅を譲り受けたんです。

コロナの真っ最中だったので、上映も全部ストップして、仕事全くなくなった中で１年空いたんで、じゃあ自分で作ろうっていうことで、プロデューサーと一緒に造ったんです。しかし、素人ですから、近くの大工さんにも一緒に手伝ってもらって自分たちで１本１本組み立てたんです。基礎も作って(写真右上)、どんどん積み上げてってできるんですよ。屋根なんかは、やっぱり仮設なんですね。これ鉄板１枚なんですよ。

それで冬もこせるようになりました。あったかいです（写真上：完成後）。編集するとき、今までは寒くて震えていたんですけれどもあったかいです。仮設住宅２件分を譲り受けて自分たちで作りました。なんか綺麗になっています（写真右下）。なかなか仮設住宅とは思えないような仕上がりです。犬もいます。

住宅の表にちゃんと仮設住宅であることを貼って示してあります。自分の記憶からなくしたくないで

すし、訪れてきた人にも忘れて欲しくない。そして、覚えていて欲しいなって思います。リアルな建造物として。私はこういうことをして、皆さんに知ってもらう(写真左の看板に記載)、そして、ここで映画を編集しています。鶏も一緒に生活しています。犬とあったかい暖炉と美味しい卵が毎日１個か２個。恵まれています。美味しい卵を食べて、なんとか生き延びていこうと思います。

今紹介しました「会津ジイゴ坂学舎」は、映画を作っているところですが、皆さんの交流の場にもなってもらおうと思って、カフェとレストランもあります。

ここは、古い小学校そのままでしたので、理科室だとかは、もう埃だらけだったんですけど、皆さんに掃除を手伝ってもらって、ピカピカに磨いたんです。

横浜から料理長が移住してきました。そして美味しい、それは美味しい洋食を作ってくれます。トロトロオムライス、美味しいんです。なんと言ってもシェフのおすすめはハンバーグです。本当に おいしいですから、皆さんぜひ来てください。特に、甘いものが好きな人は、30cmぐらいの大きなパフェがあります。これね、男の人一人でこのパフェを目当てに来て、食べて行くんです。結構、男の人で甘党の人いるんですね。私がその代表ですけども。子供の頃からチョコレートパフェで育って、こんな体になっちゃったんですけど。

大変美味しいものがありますので、是非皆さんにお越しいただきたいと思います。

（ミニシアターの勧め）

もう、残すところ時間がないので、駆け足になります。

最後に、映画の力だとか少し説明しようかなと思ったんですけど。

特に会津若松には映画館がないんですが、私はミニシアターで十分だと思っています。

東京で私が上映しているのが、「アップリンク吉祥寺」（https://joji.uplink.co.jp/）という小さなところでも映画館は成り立つんです。工夫すればこんな綺麗なシートで、気持ちよく映画を見ることができます。

そして、沖縄にも１件、私はおすすめのミニシアターがあります。

シアタードーナツです。（https://theater-donut.com/）文字通りドーナツが売っています。でもドーナツ屋さんではないんです。映画館なんですけど、ドーナツが売っている。テーブル付きで映画が見られてお茶とあのドーナッツを映画が始まる前に食べられるんです。食べながらでもいいんですけど、そしてオーナーが前説と後説してですね、皆さんとの交流を図る。そしてこの前は、私の『決断』を持っていったのですが、大好評で満員でした。ここのいいところがですね、ドキュメンタリーもありますけども、大手の娯楽映画はやらないというところです。中身のあるドキュメンタリー映画をＩか月、３か月と平気で長期でやっちゃうんです。そうすると観に行けなかった、忘れて行けなかったっていう人も「まだやってんだ」っていうことで観に来る。そういったことがこのミニシアターの自由

なところですね。なんて言うんですかね、そういうスタンスで、大がかりじゃなくても、小さいなら小さいなりにできる、映画の見せ方は、そういったところから映画の力をつけて伸ばしていけばいいなと思っています。

（農業、オーガニックと新しいドキュメンタリー映画制作）

先程の会津ジイゴ坂学舎に作った私のミニシアターですが、下郷町にあります。

こういったものを参考に、会津若松でも何かできればいいなあと思っております。

農業を今、少し携わっておりまして。オーガニックビレッジ宣言をした喜多方市があります。やはりオーガニックって、地球環境にやさしい、化学的に合成された農薬や肥料を使わないことで、土壌や河川、大気の汚染を防ぐだけでなく、周囲の生態系を守ることにもつながるっていうのは、今とんでもない気候変動がある中で大事だと思います。

そして２人に１人が罹患すると言われている癌。これもやっぱり食べ物が原因だと思います。安全で健康的な食べ物を摂るには、やはりオーガニックなどのそういった食べ物に代えていく、そして自分たちの生活を何か変えていかないとダメだなと思います。

今、密かにですね、その映画をこの喜多方市の近くで作っています。是非お楽しみいただければなと思います。

時間が来てしまいました。

皆さんに伝わったかどうか分かりませんが、勝手に喋りましたので、もし何か参考になるところがあればなと思います。

今日は、本当にありがとうございました。

＜高野客員教授＞

安孫子監督どうもありがとうございました。

もっとお話をお聞きしたいところでもありますので、次に、３人の鼎談として、「映画の力」「映画の活用と地域づくり」などについてお聞きしたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

ここで、安孫子監督に盛大な拍手をお願いいたします。

(2) 鼎 談（14:05～14：40）

テーマ:「映画を活用した会津の地域振興」

＜登壇者＞

監　督　　安孫子　亘 様
会津若松商工会議所　会頭　　澁川　惠男 様
福島大学客員教授（会津文藝代表理事）　髙野　武彦

＜髙野客員教授＞

それでは、続きまして、安孫子監督を囲んで、私と会津若松商工会議所の澁川会頭と、会津に映画館が必要なんじゃないかというテーマでお話ししたいと思います。

安孫子監督からのご講演もありましたので、そのテーマで残りの35分間お話ししたいと思います。

安孫子監督、真ん中のテーブルの方にご移動をお願いいたします。

澁川会頭も、どうぞ着席をお願いいたします。

それでは、よろしいでしょうか。

ここから、鼎談を始めて参りたいと思います。

皆様もうご存知だと思いますが、会津若松所商工会議所の澁川会頭です。

これから、この３人でお話を進めていきたいと思いますが、最初は、只今の安孫子監督の講演をお聞きしまして、私なりに安孫子監督に少しいろいろと質問をしながらお話を聞いていきたいと思います。安孫子監督の作品で、檜枝岐歌舞伎を撮った『やるべぇや』の話も聞きたいと思います。

安孫子監督、少々お付き合いください。

それでは、監督。私もドキュメンタリー映画って、素晴らしいと思うんですけども、監督は先程の講演の中で、昔、テレビを撮られていたっておっしゃっておりました。監督がこのドキュメンタリー映画を撮ろうというか、この世界に入ったきっかけと言いますか、動機など教えていただけますか？

＜安孫子監督＞

そうですね。元々東京で、テレビ番組を作っていたわけなんですけれども、やはり半分ぐらいはですね、ドキュメンタリーが多かったんです。特に動物関係、そしてネイチャリング系の番組が多くてですね。皆さんご存知かわからないですけど、『わくわく動物ラン

ド』とか、『世界まるごとＨＯＷマッチ』とか、あと『新世界紀行』ですね。そしてネイチャリングです。いろんな番組で、世界中はもう多分地球何周しているかわかんないぐらい、いろんなところに行かせていただきました。

そこで、やはり野生動物の面白さを知りましたね。「二度と撮れないようなシーンは逃さない」みたいなことですごくドキュメンタリー性のある、その瞬間を逃さない。私は、元々テレビのカメラマンだったんで、そういったことからやはり養って来たっていう感じですね。やはり絵を取り残さないというというドキュメンタリーがあって、そこに正確さとか、その瞬時のものの大切さってありますよね。

＜高野客員教授＞

そのドキュメンタリー映画の魅力って、どんなところでしょうか。

＜安孫子監督＞

それは、やっぱり「真実に勝るものはない」っていうところだと思います。これは、ドラマと違って、何回もリハーサルや練習があるのとは違いますし、本番がダメならもう１回もう１回と嫌になるぐらいその役者さんはやらされるんですけど、ドキュメンタリーは１回切りです。もう撮り逃したら終わり。そういうことが、研ぎ澄まされたところで、次どういうことが起きるんだろうっていう野生動物の中にいて、ライオンなり、ヒョウなり、チーターが、次どういう動きをするんだろうっていうことの先を読まなくちゃ全く撮れない世界なんで、先を読むんですね。動物への洞察力っていうか、そういうものを養っていったことになりましたねぇ。

＜高野客員教授＞

ありがとうございます。あと下郷町に移住されたお話ありましたけれども、この下郷町を選んだ理由と移住のきっかけについて教えてください。

＜安孫子監督＞

あの東京でのテレビ番組を卒業したんです。卒業したっていうか、テレビでできないことをやろうとずっと考えていて、そのきっかけになったのはやはり東日本大震災ですね。3.11です。このとき本能的に下郷町に入りました。理由はわかんないです。福島県の皆さんは、福島県から逃げる、脱出するというそのさ中に、私は福島県に入らなくちゃいけないっていう思いが先に立ってしまって、気がついたら下郷町であの古い小学校にたどり着いていたっていうところです。

＜高野客員教授＞

私も先日、会津ジイゴ坂学舎のカフェに行かしていただきましたけど、本当に美味しい

カフェで、本当に素敵なところでした。

あの日も檜枝岐歌舞伎の『やるべぇや』の話になりましたが、安孫子監督は最初はこの『檜枝岐歌舞伎 やるべぇや』から始まったんですよね。

＜安孫子監督＞

福島県はそうですね。東京を出てから、ちょっと那須にいたことがあって、そこの地方紙に小さくね、「歌舞伎の世代交代」っていう小さい記事があったんですね。2009年にそれを初めて見て、なんだろうな。今まで動物撮ったけどもやはり人間撮らなきゃなっていうなんか基本に帰ったっていうかそこで人物を撮る。そして福島県に入るきっかけがそこでできたっていうことですね。

＜高野客員教授＞

私、『やるべぇや』観て、感激しちゃって。監督は、それまでは動物だけだったんですね。人はあまり撮ってなかった。今日もずっと観ていて、監督のドキュメンタリーって、人が本当に中心にいるなって感じました。それで、この人を残していくというか、人の何を伝えたいなと思っていらっしゃるんでしょうか。

＜安孫子監督＞

やっぱり文化と暮らしですかね。今、言えば、2009年から福島県に入っていますけれども、震災を契機に福島県は何か変わりましたよね。震災を私は撮りに来たってことではないです。あの瓦礫から這い上がる姿を求めに来たわけじゃなくて、震災後の中で暮らしている人がどういった生活を後々送られていくのか、その中で今見ていただいたような文化が福島県に数多くあると思うんです。東京から通うんじゃなくて、福島県ましてや会津に住んでいると、そういった人と人との巡り会いがある。そういったことが１番のポイントかなと思います。

＜高野客員教授＞

そうですね。やはり文化と暮らし、そしてそこに住む人ですね。また、巡り会う人と人、さらにそこから生まれるもの。そうしたものが大切ですね。

話は変わりますが、私、監督の映画を見ていていつも感じることがあるんですね。今日は、音楽の話を監督はお話しになられなかったんですけど、この映像と音楽ってとても素晴らしいなと思っています。映像にマッチした音楽、そしてドキュメンタリーについて教えてください。

＜安孫子監督＞

映像と音楽は切り離せないものだと思います。相乗効果ですね。このシーンにも全く違う音楽を持ってきてしまうと違うニュアンスに伝わってしまう。アレンジしてくれるのは今一緒にやっているプロデューサーが音楽関係のことをずっとやってきてくれて、音楽一

筋でやっていた人たちに任せると、やはりシーンに合った音楽をつけてくれる。そういったものを極めていますよね。そういったことで音楽がついていくんですけど、やはりこの「生き様」っていうか「人の生き様」は音楽なのかなと思うくらいにマッチングしているなっていつも感動しております。

＜高野客員教授＞

ありがとうございます。それでは、澁川会頭からも感想や何か質問などありましたらお願いいたします。

＜澁川会頭＞

私は会津若松商工会議所という地域の経済団体をやっておりますので、そういった観点からお話をさせていただきたいと思います。結果的には街の活性化というものを目指しておりますけれども、街を元気にする、活性化するためには、若い活力が不可欠だと思っているんですよ。だけど現状はですね、少子高齢化、人口減少によって、本当に高齢化社会が間近に迫っているという風な状況ですよね。

（若者を残す手段としての映画館）

それで、若い人たちを残すための手段としてね、映画っていうのは非常に有効なものではないかと思っているわけです。

３年前に会津若松商工会議所で中心市街地を活性化するための市民アンケート調査を実施いたしました。その結果は、いっぱいあったんですが、特に若い層の人たちの回答をみますと第１位・第２位・第３位は、ほとんど固定化しておりまして、第1位が、街の中に商業施設がないので是非大型商業施設が欲しい、それから映画館、それからゲームセンターです。昨日、会津大学で、公共政策フォーラムというのがあって、全国の大学が会津の街を活性化するための政策のプレゼンやって、その順位をつけたんです。私は審査員として参加してきたのですが、その内容は同じような考えと言いますか若い人たちの考えの中には、会津若松に映画館がないということなんですね。若い人たちの希望とすれば映画館、ゲームセンター、商業施設が欲しい。それも街の中で、歩いていける範囲内に欲しいということなんですね。

今、会津若松には、ほとんどそれらがないので、若い人たちがどう過ごしているかというと、ドンキホーテに行っているっていうんですよ。若い人が、スーパーで時間を過ごすしかないという状況は、やはり、進学や就職で東京を目指すようになってしまうんですね。

（人口が減っても、サスティナブルな街づくりを継続していく）

今、日本の人口１億2,000万人のうち、１／３にあたる4,000万人が東京を中心にする首都圏に集まっている状況で、ずっと変わっていない。

先ほども、高野さんからもお話あったように、今年の４月に人口戦略会議から、700ほどの自治体に消滅可能性があるという報告がありました。10年前の増田リポートがあって、その当時よりも100ほど減っていますけれども。会津の場合ですと17市町村のうち、４町村だけ残って、13市町村は全部消滅可能性といわれていて、その筆頭が会津若松市ということなんですね。

皆さんご存知だと思うんですが、会津若松市のいわゆる地価公示価格、路線価が毎年発表になりますね。県内の税務署管内の中で下落しているのは会津若松市だけなんですよ。郡山市、福島市、いわき市は全部微増か昨年と同じぐらいで、大きな下落となっているのは会津若松市だけなんです。「土地が安くなったら、安く買えるからいいじゃないか」みたいな発想もないわけではないんですけれども、それだけ街がもう低迷しているという風なことになっております。

人口戦略会議の発表から政府は危機感をもって、地方創生として移住政策を打ちだしているんですが、利便性の高い都市機能のある首都圏から、都市機能の脆弱な地方に移るというのはかなりの抵抗感はあると思います。

安孫子監督には会津に移住してきてくださって大変ありがたいです。

移住とはＡ地点からＢ地点に人が移動するわけですから、結果としてマスの奪い合いなので、日本全体で問題となっている人口減少対策の抜本的な対策には、全然なっていないと私は思っています。いわゆる地方創生っていうのは何を目指すのかということが大事だと思います。それは、人口が減っても、サスティナブルな街づくりを継続していくとだと思うんです。人口が減ってもその街が活性化していくということだと思います。

（重要なのは関係人口）

最近は、交流人口・関係人口って言われていますけれども、交流人口とは、ねずみ算的な普通の観光客数に相当するわけなんですが、関係人口というのは、リピートする人口なんです。つまり、我々は、会津に住んでいて、しょっちゅう東京に行くと思うんです。仕事や遊びを含めてね。これはリピーターですよね。東京、首都圏にとってみれば、まさに関係人口なんです。行けば、ホテルに泊まる、食事する、酒を飲む、お土産買うということで、経済効果ものすごく大きいわけです。東京って、その関係人口で保たれている街であるわけですね。東京も、今後人口は減ります。つまり、日本全体の人口は確実に減ってくるわけですからそれを補完するためには、移住してもらって移住先で固定されてしまうということでは、実は困ってしまうわけで、関係人口というリピートしてもらうことが非常にありがたい話なんです。

（異文化・異空間・非日常を求めて人は移動する。それがすぐに手に入るのが映画）

その関係人口を増やすための方策としていろいろとやっていると、その人が動く動機を考えるんですね。まさに、毎日皆さんが生活している世界の中にある文化から、それと違う世界、いわゆる異文化・異空間・非日常を求めて人は移動するわけです。私は、今日の安孫子監督の映画を見た瞬間に、まさにこれが異文化・異空間・非日常がすぐに手に入るのが映画だと思っているんです。

やはり、会津若松の市内に、映画館を作って、若い人たちがそういう一つの空間の中で、

感動を共有するということが大事ではないかと思うのです。「感動とか共感というのは、動物の中では人間だけができる」とも言われておりますので、そういった意味でも、会津若松に映画館が必要だと思っています。もっといろいろとお話ししたいですが、とりあえずそんなところで一旦マイクを置きます。

＜高野客員教授＞

澁川会頭ありがとうございました。

私がこれから話そうとした話まで、全部話してくれて嬉しい限りです。

ここで、私から「福島県の映画館の現状」がどうなっているのか、また、映画館と地域づくりについて、先進事例も交えて簡単にご紹介したいと思います。

お手元の資料を見てください。

まず、１人当たり、一年間に映画をどのくらい観ているんだろうというところをみたいと思います。2023年のデータですが、１位は東京都で２回です。２位は、なんと山形県で、1.9回ですから、ほぼ２回ですね。３位が京都府1.6、４位が神奈川県1.5で、全国の平均が1.3回となっています。

我が福島県は下から４番目で0.6、山形県の1／3以下というところです。やはりこの下位の方に岩手県、秋田県、青森県という東北の各県が入ってくるんですね。

一人当たり年間映画鑑賞回数等調べ（2023年）

全国順位	都道府県名	一人当たり年間映画鑑賞回数	人口	映画館数	スクリーン数	年間観客数（概算）	１スクリーン当たり人口	１スクリーン当たり観客数
1	東京都	2.0	14,099,993	83	415	27,960,000	33,976	67,373
2	山形県	1.9	1,026,228	8	54	1,900,000	19,004	35,185
3	京都	1.6	2,536,995	15	85	3,940,000	29,847	61,250
4	神奈川県	1.5	9,229,713	33	223	13,410,000	41,389	60,135
平均	全国	1.3	124,357,549	592	3,682	155,535,000	36,600	42,242
39	青森県	0.7	1,184,558	7	36	880,000	32,904	24,444
39	秋田県	0.7	913,514	5	18	640,000	50,751	35,556
39	山梨県	0.7	795,544	3	12	570,000	66,295	47,500
39	長野県	0.7	2,005,274	15	72	1,490,000	27,851	20,694
39	宮崎県	0.7	1,040,711	5	26	730,000	40,027	28,077
44	福島県	0.6	1,766,912	6	33	1,060,000	53,543	32,121
44	高知県	0.6	666,293	3	11	420,000	60,572	38,182
46	岩手県	0.5	1,163,024	7	23	570,000	50,566	24,783
46	徳島県	0.5	694,841	3	19	350,000	36,571	18,421

▲一般社団法人コミュニティシネマセンター『映画上映活動年間2023』(http://jc3.jp/wp/wp-content/uploads/2024/05/FEYB2023_Chap1-4_P030-047.pdf)より高野作成

しかし、隣の山形県がこれだけ多いというのはどうしてなんだろうというところです。

次の資料で、「鶴岡まちなかキネマ」という鶴岡市の事例を紹介したいと思います。

鶴岡市の人口は約11万7000人です。会津若松市、約11万1000人ですから、大体同じくらいの規模ですね。会津の皆さんが、よく映画を観に行く米沢市は、人口約7万4000人です。7万4000人の人口規模でも映画館があって、映画産業は成り立つんですね。

鶴岡市は、もう皆さんご存知のとおり庄内藩の城下町で今も武家屋敷が残っています。「本間様には及びもせぬがせめてなりたや殿様に」という有名な言葉がありますように、商人の力も強いところです。北前船なども会津の歴史・文化と関わってきます。かつては絹織物産業が盛んでした。会津には会津大学がありますが、同様に山形大学農学部があります。山大農学部の歴史は古いですね。

また、藤沢周平の出身地ですから、鶴岡を舞台とする作品が結構あります。『蝉しぐれ』とかのロケでも有名ですね。そのほか『おくりびと』『おしん』などメジャーな映画のロケ地でもあります。

今述べたように、鶴岡市と会津若松市、古くから似ているところがあります。

最近の経済情勢でも似ているところがあります。大型商業施設の撤退です。ダイエーやジャスコが、平成以降撤退してしまいました。また80年間、鶴岡の繊維工業を支えてきた工場群が平成20年には、全部撤退してしまったのですね。かつての会津の富士通などの半導体産業と重なるところがあります。

こうしたことを背景に、鶴岡市でも「中心市街地の空洞化」というのは大きな問題だったんです。

会津地域文化藝術フォーラム

「鶴岡まちなかキネマ」（鶴岡市）の事例（1）

鶴岡市：人口117,042人（2024/10）　　参考：会津若松市：人口111,216人（2024/10）
米沢市　：人口　74,827人（2024/10）

庄内藩　城下町　今も残る武家屋敷
「本間様には及びもせぬがせめてなりたや殿様に」
北前船　旧酒井家庄内藩士らが起こした絹織物産業
山形大学農学部　慶応大学先端生命科学研究所　東北公益文科大学大学院
藤沢周平作品のモデル　「蝉しぐれ」「おくりびと」「おしん」などのロケ地

＜平成以降の産業の衰退＞
2002年(H14)　ダイエーの撤退
2005年(H15)　ジャスコの撤退
2008年(H20)　松文産業鶴岡工場閉鎖
（80年間繊維産業を支えた工場群の閉鎖）

⇒ 中心市街地空洞化

鶴岡市民の選択
映画のロケ地が多い庄内地方
山形国際ドキュメンタリー映画祭（1989年～現在）
山形県の「庄内の食と映画文化発信」を支援
→「映画館の復活」（松文産業鶴岡工場跡地利用）

↓

○荘内銀行の強いリーダーシップ　⇒　民間主体の地域づくり
2007年：株式会社まちづくり鶴岡　設立
（鶴岡商工会議所、荘内銀行、鶴岡信用金庫等）

↓

2010年（H22)5月「鶴岡まちなかキネマ」オープン
商店街との連携（半券割引）　映画以外の活用（コンサートなど）

4

© 2024一般社団法人会津地域文化藝術フォーラム

ここで鶴岡市民の選択は、「映画館」が欲しいということになったんですね。

映画館の復活をこの工場跡地で考えたところです。

その背景には、庄内地方は映画のロケ地に選ばれることが多かったんですね。そこは会津とも似ていますね。そして、山形県には映画の文化が根付いたということもあります。「山形国際ドキュメンタリー映画祭」は1989年から現在まで35年間続いていますし、これからも続いていきます。さらに山形県は「庄内の食と映画文化発信」を支援しています。

こうした背景もありますが、地元の地方銀行である庄内銀行がリーダーシップを取ったことが大きいです。よって、鶴岡商工会議所とか、鶴岡信用金庫も加わって、2007年に「株式会社まちづくり鶴岡」を民間主導で作って、地域づくりを始めたんですね。そして2010年に「鶴岡まちなかキネマ」という映画館のオープンとなったところです。この映画館は、昭和初期に建築された木造の松文産業鶴岡工場を大規模改装したものです。メジャー作品の上映に加え、映画祭や地域密着型の企画運営で、最大で年間８万人の来館者があったということです。

ところが、資料「鶴岡まちなかキネマ事例（2）」にも記載しておりますが、コロナ禍を乗り越えることができなかったんですね。2022年５月に閉館してしまいました。

しかし、それでも諦めが悪いのが、鶴岡市民なんです。すごいですね。クラウドファンディングで1000万円集めてしまいました。そして、2023年3月に再オープンしたんです。

なぜできたのか。鶴岡市社会福祉協議会、商店街の皆さんが中心となった山王まちづくり株式会社、そして鶴岡市が立ち上がったんです。まず、鶴岡市社協が土地と建物を取得して、映画館機能を一部もてないかと鶴岡市に相談しました。山王商店街の皆さんが「鶴

会津地域文化藝術フォーラム

「鶴岡まちなかキネマ」（鶴岡市）の事例（2）

■ コロナ禍を乗り越えられなかった「鶴岡まちなかキネマ」

2020年(R2)5月　閉館、再び映画館のない鶴岡市　　最大8万人/年

あきらめない鶴岡市民　クラウドファンディングで1000万円集める

2023年(R5)3月　再オープン

「鶴岡市社会福祉協議会」「山王まちづくり(株)」「鶴岡市」の連携協働

「鶴岡市社会福祉協議会」が土地、建物を取得

・4スクリーンのうち2スクリーンを残し、社協事務局機能、介護予防室整備

・山王まちづくり(株)、鶴岡市との連携協働により、映画機能と福祉的機能・教育的機能・地域活性化機能の側面から相乗効果、多様な交流をねらう。

鶴岡市のねらい:「映画文化の振興」「映画機能を生かした地域との多様な交流の創出」

高野コメント

① 映画と福祉・教育・商店街活性化をねらった施設の在り方として注目モデル

② 急速に進む高齢化、単身化の中、孤立・孤独対策は急務である中で、居場所づくりにも最適。居場所づくりは、高齢者だけでなく、子ども、子育て中の家族をはじめ、あらゆる世代で課題が顕在化しており、映画館を活用した様々なイベントは、生きがいづくり、認知症・健康づくり・子育て・ライフプラン等多様な講座・イベントの開催も可能

③ 商店街イベントとのタイアップ、電子マネー等、地域経済活性化にも期待

5

© 2024一般社団法人会津地域文化藝術フォーラム

岡まちなかキネマ」を再生して商店街の振興を図りたいと運営会社としての山王まちづくり株式会社を作って、鶴岡市に相談しました。そして、この２つの相談を受けた鶴岡市も有識者からなる検討会を立ち上げ、クラウドファンディングやサポーター組織を構築して、再開に至ったと言う話です。

再開した「鶴岡まちなかキネマ」は、今まで４つのスクリーンがありましたけれど、２つは社協の事務局と介護予防の施設にして、残った２つのスクリーンを映画館にしたんですね。よく考えたなあって思うんです。

高齢化社会です。高齢者の居場所づくりが課題です。高齢者ばかりではありません。子どもや子育て中の家族をはじめ、若者、働き盛りの方々にも居場所づくりは大事です。

孤立・孤独防止の問題は、あらゆる世代で課題が顕在化しております。映画館を活用した様々なイベントは、生きがいづくり、認知症・健康づくり・子育て・ライフプラン等多様な講座・イベントの開催も可能となります。

映画文化というものを使って、孤立・孤独防止、居場所づくり、そして介護予防、そうした福祉と教育と商店街活性化を狙った施設のあり方として、注目されると思います。

急速に進む高齢化対策っていうのは、急務でございますので、そういったところにこの映画を活用していくという発想は、会津若松とだけではなく、この会津の中で映画館の持つ機能を多様な形で使っていく方法は、新たな視点ではないかと思います。

鶴岡市のねらいとしては、「映画文化の振興」「映画機能を生かした地域との多様な交流の創出」があると聞いています。

私の私見ですが、映画は地域振興に結びつくと思います。その理由を３つにまとめてみました。

会津地域文化藝術フォーラム

映画は地域振興に結びつく（私見）

１　映画によるコンテンツツーリズムによる交流人口・関係人口の拡大など、地域経済活性化につながる。

ロケ地巡り　聖地巡礼　観光関連産業の活性化

２　映画は、地域の再発見につながる

⇒　視点の変化により地域の魅力再発見

普段なにげなく見ている地域の風景や人々の営み、生活風景、文化などが、カメラを通してみると新たな発見につながる。

ひいては、「誇り」の醸成や、新たな地域づくりへの挑戦にもつながることに期待。

３　映画は、社会の中の「多様性」を見いだし、社会教育の充実や共生社会の実現につながる。

⇒　絵画・文学等様々な芸術分野の中でも、映画はマイノリティにスポットをあてたり、多様な価値観に寄り添い、そうした価値観を顕在化させることがもできる。

その結果、多様な価値観を認め合うこと、人権を大切にする考え方、差別意識をなくすことなどをはじめ、豊かな心を育むことにもつながり、社会教育の充実や、共生社会の実現にも寄与すると期待できる。

まず、映画によるコンテンツツーリズムによる交流人口・関係人口の拡大など地域経済の活性化につながることが期待できるからです。澁川会頭からもご発言がありました。安孫子監督のお話の中にもコンテンツツーリズムである「聖地巡礼」のお話がありました。映画にとって魅力は、聖地巡礼もコンテンツツーリズムとして交流人口、関係人口を拡大していく、それが地域活性化にもつながり、観光関連産業も育成されると思います。

第２に、映画は地域の魅力、地域の宝の再発見につながると思います。カメラマンの目によって見た世界って、全然違うなと本当に思います。安孫子監督の目を通すと我々が見えなかった自然の素晴らしさっていうのも分かってきますし、そういったところから地域の魅力とか宝を再発見してくる。

それは、私が今日、冒頭の挨拶の時に「誇りの空洞化」が問題で、「誇りの醸成」が必要だというお話をしました。そういったことにもつながっていくのではないかと思います。

最後に第３として、映画は社会の中の「多様性」を見いだし、社会教育の充実や共生社会の実現につながると思います。今、多様性ってよく言われます。映画では文学と同様にマイノリティなどにもスポットを当てることができます。多様な価値観に寄り添ってそうした価値観を顕在化させることもできる。また、多様な価値を認め合うことが大事なんだというメッセージも出せると思います。

多様な価値観を認め合い、人権が大切にされ、差別意識をなくす、そうしたことにこの映画は機能するのだと思います。こうしたことが、地域への誇りを醸成し、豊かな心を育むとともに、文化芸術による共生社会がこの会津で作られるのではないかと期待するところであります。

以上、問提提起としてまとめてみました。勝手なことも申しましたが、私の報告から、安孫子監督が思いますことをお話いただけますか？

＜安孫子監督＞

先ほどから、人口減少そして高齢化社会の話がありますが、これを受け入れながらこれから生活していくのが本当じゃないかなと思います。人口がこれ以上増えるっていうことは、もうイメージとしてはあまりないと思います。それを受け入れていくことが大事だと思います。

高齢化社会っていうのは、もうどんどん迫ってきますので、会津若松に映画館を作ったとして、映画にアクセスしてくれるか、自宅から映画館に通ってくれるかということも、いろいろと考えていかなければならないのではないかと思います。そういう時にデマンドタクシーを活用したり、民間の力で公共交通機関から外れた人たちにも料金も安くてアクセスしやすいようなものを作って、映画館を楽しんでもらうことができればいいなと思います。

今、ちょっと農業の映画を作っているんですが、私は魅力ある農業を目指す若者が増え

ていって欲しいと思っておりまして、そのような映画にしたいと思って、今、映画を作っております。

どうせやるならオーガニックなどの農業を広げるような、何か働きかけになるような映画ができればいいなと思っています。

そして、若者が来るにあたって必要なものは、地域Wi-Fiです。自治体Wi-Fiですね。もう会津美里町は整備できて運用しています。広域wi-fiという形ですね。wi-fiがどこに行っても使える、そして観光地でWi-Fiにつながるようになれば観光的にもそしてインバウンドの人たちにもいろいろな面でアクセスしやすくなる。そして、移動もしやすいと思います。

また、防災や監視カメラ、学校関係でいえば子供の見守りなどの面でも、いろんなことにこのwi-fiというのは活用できると思います。

今、皆さんはプロバイダーを介してインターネットを利用されていると思いますが、地域的にWi-Fiが整備されると、どこでも無料でwi-fiが使えるようになります。若者にとっては何よりも欲しいものだと思います。スマホ１個で生活しているような若者を「なんだそれは！」って見るのではなく、逆にそれを活用するような暮らしを認め合うことを目指して、高齢者と若者が一緒になって何かをできるようなことを目指していくことが大事だと思います。デマンドタクシーだって若者が運営するような会社ができていいと思います。そして、高齢者が、遠くからでも夜飲みに来られて、また家まで送ってもらえるようなシステムができれば、夜の街も、会津はもっと明るくなるんじゃないかなって思います。私がやっている農業の映画も、未来に向けて、そういう発信をしていければいいなと思っています。

＜髙野客員教授＞

ありがとうございます。今の農業のお話も本当に大事だなと思います。若い方々が、自分の人生について、会津で暮らし続けるという絵姿を描けないという問題があります。これは、会津だけの問題ではなくて、地方で生まれ育って、高校を卒業して大学行く、大学を卒業して就職を考えるときに、自分が生まれ育ったところで、どう生きていけるのかっていうところが想像できない、イメージできないという状況にあります。そうしたことを是正し自分の人生をイメージするためにも、やはり映画があると思います。自分にはこんな可能性があるんじゃないかって思うきっかけができるんじゃないかなと思います。

あと、監督のお話にあったミニシアターですね。私もアップリンク吉祥寺に行ってきましたけれども、本当にいいミニシアターですよね。映画の魅力っていうのが、本当に伝えられるところだなと思うんですが、安孫子監督、ミニシアターは簡単にできるもんなんですか？

＜安孫子監督＞

できると思います。あの今見てもらった私の会津ジイゴ坂学舎のミニシアター（写真右）は、まだ空調整備が整っていないんですけれども、スペース的にはあるんで簡単にはできると思います。

＜高野客員教授＞

ありがとうございます。もっと話を続けていたいのですが、残りがあと５分切ったところになってしまいました。

澁川会頭、短くてすみません。最後に一言、お話しいただきたいと思います。

＜澁川会頭＞

安孫子監督の様々な視点からのお話しを聞いて、この会津を改めて、スクリーンに映して感じるということは、まさに地元の宝の再発見とブラシュアップにつながると思っております。

先程、安孫子監督からもありましたが、インターネットがいろいろと発達しました。ただ、今はいろんな映画も配信されておりますが、私は映画館の大スクリーンで、多くの観客と同じ空間で感動と共感を共にすることが一番大事なことだと思っています。一緒に観たもの同士が共感する。これは「心の交流」につがると私は思っております。

会津に観光に来たついでに、映画も見て、その帰りに喜多方でラーメンを食べるとか、ちょっと足伸ばして大内宿に行くとかでも、経済効果は非常に大きものがあると思います。鶴岡市や米沢市に映画館があってなんで会津にないのか。私は非常に不思議に思っております。これは、行政といろいろ相談しまして、是非とも、１日も早くですね、会津に映画館を作りたいと思っておりますので、皆さんよろしくお願いいたします。

＜高野客員教授＞

ありがとうございます。今、澁川会頭からお話があった大きなスクリーンで、多くの観客と共感する、これってやはり鶴岡の社協がそのように考えて実行しているところなんですね。「居場所づくり」って大事なところです。映画を観るときは、皆さん無言でも、いろんな情報を映画館でもって伝えられることもできるし、そこでの共感が、やはり人間関係をより良くしていく上でも大事なんだっていうところだと思います。

澁川会頭から会津若松に映画館が必要だと力強い発言がありました。ミニシアターという方向もあります。いろんなところに映画を楽しめる場所ができてもいいなあと思いますし、会津の魅力発見というところにもつながっていくんじゃないかなと思います。

それでは、最後に安孫子監督からもう一言だけ頂戴して、終わりにしたいと思います。安孫子監督よろしくお願いします。

＜安孫子監督＞

今の話の続きですけども、映画館ができたときは、それぞれの監督そして関係者が会津を訪れて、いろんなところを見てもらって、そこがロケ地として生まれる。そして,いろんな映画が生まれる場所になるかもしれないです。また、ミニシアターなり映画館がそう

いう役目を果たしてくれればいいかなと思います。そして、未来の会津は、若い世代と高齢者が本当に交流できるそういった場所になってほしいなと思います。それが日本でも先進的な何かこう新しいものが生まれる地になればいいなと思っています。

＜高野客員教授＞

安孫子監督、本当にありがとうございました。

皆さん安孫子監督、そして澁川会頭に大きな拍手で、感謝の意を伝えたいと思います。皆さん、よろしくお願いします。

（会場内拍手）

皆さん、今日はどうもありがとうございました

これで第２分科会の１時限目を終了いたします。

＜第２部＞　第２分科会　２時限目15:00～16:30)　＜会場：なんだべや＞

みんなで座談会「人口減少と会津の地域づくり」

講師：福島大学客員教授（会津文藝代表理事）髙野　武彦

＜髙野客員教授＞

皆さん大変長らくお待たせいたしました。定刻となりましたので、会津塾の第２分科会の２時限目、「みんなで座談会『人口減少と会津の地域づくり』」を進めてまいりたいと思います。

「みんなで座談会」といいますように、このように車座で行いたいと思います。

はじめに、私の方から問題提起として1時間ほどの講演をして、その後意見交換したいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

◆テーマ：「人口減少と会津の地域づくり」
◆講　師：福島大学客員教授（会津文藝代表理事）髙野　武彦

それでは、早速始めてまいります。

まず、本日お話をしたいことを簡単に説明します。

皆様ご承知のとおり、急激に進む人口減少は、福島県はもとより、日本全国で大きな危機であります。今後の地域づくりをはじめ、国づくりにおいても、その課題解決を図ることが、最も重要であることは、もはや誰もが認識しています。

そうした中で、会津の地域づくりを進めていくために、必要なことは何か。一言で言え

ば、「女性と若者に選ばれる会津地域になること」だと私は考えております。

まずは、そこを始めに押さえていきたいと思います。しかし、そうは言いましても、過疎地域で、高齢化率も高く、そのうえ急激に人口は減り、千葉県より広い面積である会津地域には、わずか２５万人しか住んでおりません。さらに、２０５０年には１４万人まで減少すると予測されるこの会津地域に、本当に可能性はあるのだろうか。

時間の都合上、まず可能性を発見する視点や、地域づくりの視点についてお話をしたいと思います。その上で、一つの方策についてお話をいたします。

１　人口減少の状況

（１）人口戦略会議公表資料（2024. 4. 24）

まず、会津地域の現状を把握するために、人口動態からみていきたいと思います。

右の図表１をご覧ください。

本日の開会の挨拶でも申し上げましたが、2024年4月24日、人口戦略会議は、2020年～2050年の若年女性人口（20～39歳）の減少率が50％以上の自治体を「消滅可能自治体」として公表しました。マスコミ各社から大々的に報道され、日本中に衝撃が走りました。

特に、会津地域１７市町村では、磐梯町、湯川村、柳津町、昭和村以外が消滅可能自治体とされたことは、大きな話題になりました。

【図表１】

	2020年人口		2050年人口		人口減少率（%）	若年女性人口減少率（%）
	総人口	うち若年女性人口	総人口	うち若年女性人口		
会津若松市	117,376	10,749	76,262	5,057	35.0	53.0
喜多方市	44,760	3,514	24,846	1,374	44.5	60.9
北塩原村	2,556	191	1,259	69	50.7	63.9
西会津町	5,770	322	2,587	109	55.2	66.1
磐梯町	3,322	243	2,035	150	38.7	38.3
猪苗代町	13,552	942	6,670	326	50.8	65.4
会津坂下町	15,068	1,169	8,641	483	42.7	58.7
湯川村	3,081	248	2,021	131	34.4	47.2
柳津町	3,081	154	1,636	88	46.9	42.9
三島町	1,452	73	528	19	63.6	74.0
金山町	1,862	74	715	22	61.6	70.3
昭和村	1,246	62	670	38	46.2	38.7
会津美里町	19,014	1,335	9,218	436	51.5	67.3
下郷町	5,264	283	2,331	78	55.7	72.4
檜枝岐村	504	37	279	14	44.6	62.2
只見町	4,044	195	2,084	85	48.5	56.4
南会津町	14,451	856	6,369	234	55.9	72.7
合計	256,403	20,447	148,151	8,713	42.2	57.4

▲2024.4.24「人口戦略会議」資料から高野作成

しかしながら、消滅可能自治体とは、あくまでも、「このまま何も対応しなければ」という前提がありますので、一喜一憂せずに「危機感を強めるもの」として冷静に受け止めることが大切です。

また、今回の発表は若年女性人口（20～39歳）の減少率が50％以上の自治体を消滅可能としているように、人口減少の問題を女性にのみ押しつけております。このような一つだけの指標でみることは、分母が小さければ、小さな変動でも大きく率が変わることになります。私は、冷静な分析が必要だと思います。

ただ、問題提起としては、重要で、これは男女ともに若年層の社会増減の推移など丁寧

に観ていく必要があると思います。

（２）社会増減と転出先

人口戦略会議では、若年女性人口(20～39歳）の減少に注目をしていますが、ここでは一般的に使われる男女別社会増減の数による現状を見てみましょう。

図表２のとおり、福島県の最近１０年間の15～24歳の社会増減は、男女ともに他県に比して減少数が多い状況です。特に、近年、特に女性の減少数は、全国でもワースト1位が２回、2位が５回と多く深刻な状況であります。

男性も、2017年以降ワースト10位以内となっており、福島県の若者の社会増減は、男女ともに減少数が他県に比して非常に多い状況です。

また、図表３のとおり、その転出先は、男女ともに半数以上が首都圏（１都３県）に転出している状況で、次いで宮城県が続いています。

【図表２】

福島県の男女別社会増減数の推移（15～24歳）

	男性(15～24歳)		女性(15～24歳)	
	社会増減数	全国順位ワースト	社会増減数	全国順位ワースト
2014	▲ 1,463	17	▲ 2,573	2
2015	▲ 1,567	15	▲ 2,526	7
2016	▲ 1,868	12	▲ 2,827	3
2017	▲ 2,126	7	▲ 2,937	2
2018	▲ 2,192	6	▲ 2,996	2
2019	▲ 2,045	8	▲ 3,127	2
2020	▲ 2,193	5	▲ 2,909	2
2021	▲ 2,212	3	▲ 3,193	1
2022	▲ 1,951	4	▲ 3,050	1
2023	▲ 1,927	9	▲ 2,642	4

▲総務省　住民基本台帳人口移動報告より高野作成

【図表３】

福島県からの転出先
（15～24歳）

	男性	女性
首都圏	52%	57%
宮城県	14%	15%
その他	34%	28%

▲総務省　住民基本台帳人口移動報告より高野作成

（３）合計特殊出生率

人口減少問題を論じるときに、「少子化」の状況を見る必要があります。

一般的に用いられる資料が「合計特殊出生率」ですね。この「合計特殊出生率」とは、１５歳から４９歳の女性の年齢別出生率を合計したもので、１人の女性が仮にその年次の年齢別出生率で一生の間に生む子どもの数を推定したものをいいます。

なお、この分母には、「未婚女性」も含まれているので、分母の既婚女性に対して未婚女性の割合が増えると合計特殊出生率は、減少するという点を理解しながら活用すべきです。

わかりやすくいえば、既婚女性が１０人で、そのうち、子どもなしが５人、子どもが１人いる女性が５人、子供が２人以上いるのが０人だとすれば、

出生率は　５／１０＝０．５

ここに、未婚で子どものいない５人が加われば、

出生率は　５／１５＝０．３３

ということになり、未婚女性の割合が増えると合計特殊出生率は、減ります。よって、地方は都市部より合計特

【図表４】

	福島県の出生数	合計特殊出生率	
		福島県	全国
2011	15,072	1.48	1.39
2012	13,770	1.41	1.41
2013	14,546	1.53	1.43
2014	14,518	1.58	1.42
2015	14,195	1.58	1.45
2016	13,745	1.59	1.44
2017	13,219	1.57	1.43
2018	12,495	1.53	1.42
2019	11,552	1.47	1.36
2020	11,215	1.39	1.33
2021	10,649	1.36	1.30
2022	9,709	1.27	1.26
2023	9,019	1.21	1.20

▲厚生労働省「人口動態調査」より高野作成

殊出生率が高いからといっても、未婚女性が少ない結果でもあるので安心できないということになります。このことは、後ほど説明しますので頭に入れておいてください。

図表４のとおり、福島県の場合、2011年には1.48であったのが、2023年には、0.27ポイント落ち込んで、1.21ですかろうじて全国平均よりは、0.01ポイント高いという状況です。

（４）結婚の現状

出生率が低下した背景に、婚姻率の低下が言われます。

図表５のとおり、福島県の婚姻率は全国と比較しても低く、年々低下している状況です。

図表６は、平均の初婚年齢です。

男女ともに福島県の初婚年齢は、全国平均よりは若干若いものの、1995年と2023年を比較すると男性は、2.6歳、女性は3.4歳晩婚になっている状況が伺えます。

このように、全国各地と同様に、福島県でも婚姻率の低下と晩婚化の傾向が伺えます。

【図表 5】

婚姻率（人口1000人当たり）

年	福島県	全　国
平成30	4.2	4.7
令和元	4.1	4.8
令和 2	3.7	4.3
令和 3	3.5	4.1
令和 4	3.4	4.1

▲福島県『目で見る福島県の指標2024』

【図表 6】

	男性		女性	
	福島	全国	福島	全国
1995年（平成7年）	28.2	28.5	25.9	26.3
2023年（令和5年）	30.8	31.1	29.3	29.7

▲厚生労働省「人口動態調査」より高野作成

そこで、国や自治体などでは、少子化対策として、様々な婚活事業や子育て支援策がとられています。しかし、それらの政策は的を射たものでしょうか。

私自身、20代の娘がいます。職場にも20代女性がいます。彼女たちを見ていますと、少し違うような気がしてきました。

図表７は、人口問題に詳しいニッセイ基礎研究所　人口動態シニアリサーチャーの天野馨南子氏の『まちがいだらけの少子化対策』からの引用です。

【図表７】

未婚女性の理想ライフコースの変化　（%）

	1987年（昭和62年）現在55～71歳		2021年 令和３年 現在21～37歳	増減	
専業主婦	33.6	↓	13.8	▲ 19.8	大きく減
再就職	31.1		26.1	▲ 5.0	
両立	18.5	↑	34.0	15.5	大きく増
DINKS	2.5		7.7	5.2	
非婚就業	3.7		12.2	8.5	
その他	10.7		6.1	▲ 4.6	

未婚男性がパートナーに望むライフコースの変化（%）

	1987年（昭和62年）現在55～71歳		2021年 令和３年 現在21～37歳	増減	
専業主婦	37.9	↓	6.8	▲ 31.1	大きく減
再就職	38.3		29.0	▲ 9.3	
両立	10.5	↑	39.4	28.9	大きく増
DINKS	0.7		5.5	4.8	
非婚就業	0.8		6.5	5.7	
その他	11.9		12.7	0.8	

「専業主婦コース」は、結婚し子どもを持ち、結婚あるいは出産の機会に退職してその後は仕事をもたない。
「再就職コース」は、結婚し子どもを持つが、結婚あるいは出産の機会に一旦退職し、子育て後に再び仕事を持つ。
「両立コース」は、結婚し子どもを持つが、仕事も続ける。
「DINKSコース」は結婚するが子どもを持たず、仕事を続ける。
「非婚就業コース」は、結婚せず、仕事を続ける。

▲天野馨南子『まちがいだらけの少子化対策』金融財政事情研究会（2024年　38～43）を参考に高野作成

これをみますと、私のような1960年前後に生まれた者が20代から30代であった1987年当時は女性自身も１／３は専業主婦を夢見ており、男性も１／３強がパートナーに専業主婦を望んでおりました。また、子育てが一段落したら女性が仕事に復帰することを望む者も男女ともに１／３程度いたということです。

しかし、現在の21歳～歳をみますと、男女ともに専業主婦を夢見る人はかなり少なくなったという現状です。女性は19.8ポイント減の13.8％、男性はさらに減少し、31.1ポイント減の6.8％です。

一方で、大きく伸びているのが、夫婦共働きの考え方です。女性は15.5ポイントアップの34.0％、男性はさらに28.9ポイントアップの39.4と４割に迫っています。

また、子育て後に再就職する考えの層を加えると、女性の場合60.1％が結婚後も働くことを考え、男性は68.4％と７割近くが女性が働くことを望んでいます。

このようにみてくると、1960年前後に生まれた方々と、現在の若い方々の、結婚、子育て、仕事というライフイベントと人生設計は大きく意識の違いがみてとれます。このことについて、天野氏は「共働き世帯の増加は仕方なく増えた結果ではなく、統計的に若い男女が『そうなりたくて増えた』『育児休業法施行により、従前は困難だった夫婦のライフデザインが実現可能となったので選択されるようになった』結果である」[1]と分析しています。

私としては、先ほど申し上げた、婚活イベント実施や現在の子育て支援などの少子化対策が、現在の50代以上である1960年前後生まれの人間やそれ以前に生まれた人間の価値観で政策を決定し実施しているような気がしてなりません。天野氏の言うように「育児休業法施行により、従前は困難だった夫婦のライフデザインが実現可能となったので選択されるようになった」のも一つの理由でしょう。しかし、昭和の時代の賃金体系では、一方の親の収入で家族を養えた賃金モデルが、企業における総額人件費の抑制などから、多様な働き方が生まれ、親一人の収入だけで家計を支えられないという実態もあると思います。このことからも、少子化対策は労働問題であるとも私は思います。

もう一つ、少子化対策を考える上で意識改革をしなければならない点があります。

古い世代の人間ほど、未だに専業主婦世帯の方が、子どもが多くいるのではと思いがちです。

しかし、実態は図表８のとおり、共働き世帯の方が、子どもは多いのです。さらに２人以上の子どもがいる世帯も、共働き世帯の方が多いのです。このことからも「女性が社会進出すると少子化が加速する」という意見が良く聞かれますが、それは、どうやら違うようですね。データに基づくことが大切であり、思い込みや偏見で物事をみてはならないことに気づかされると思います。

[1] 天野馨南子『まちがいだらけの少子化対策』金融財政事情研究会（2024年　57頁）

また、共働き世帯の方が子どもが多いということは、前述のように世帯収入にも関係することとも言えると思います。このことはやはり家計収入を増やせるよう、雇用政策が重要であるとともに、働きながら子育てしていくことができる労働環境整備が必要だということも示唆しているともいえます。

このことを、さらに裏付けるデータが図表９「2022年と2005年の合計特殊出生率比較」です。これは2005年からの17年間の合計特殊出生率の変化をみることで、有効な少子化対策をしてきたかどうかをみることができます。

【図表８】

共働き世帯と専業主婦世帯の子どもの数

	共働き世帯		専業主婦世帯	
	子の有無	子の数	子の有無	子の数
全国計	100%		100%	
子どもがいない世帯	34%		39%	
子どもがいる世帯	66%	100%	61%	100%
うち子ども1人		31%		39%
うち子ども2人		50%		45%
うち子ども3人		16%		13%
うち子ども4人		3%		3%

天野馨南子『まちがいだらけの少子化対策』金融財政事情研究会（2024年 52頁）を参考に高野作成

福島県の合計特殊出生率は、前述のとおり、全国平均よりも高いです。しかし、2005年と比較すると、全国一落ち込みが厳しいのが福島県です。一方、東京都の2022年の合計特殊出生率は全国最下位ではあるものの、2005年よりはアップし、全国順位も17位と効果が見えてきていることもうかがえます。

１位は徳島県です。２位が宮崎県、３位が島根県と全体的に西日本が高い。東日本で一番高いのは17位の東京都でありますが、東京都以外の東日本は、全て2005年と比較して、合計特殊出生率は低下しています。北海道・東北になると、全て33位以下であります。まさに「西高東低」の状況がうかがえます。

【図表９】2022 年と 2005 年の合計特殊出生率比較

順位	都道府県名	2005年比増減	2022年合計特殊出生率	順位	都道府県名	2005年比増減	2022年合計特殊出生率	順位	都道府県名	2005年比増減	2022年合計特殊出生率
1	徳島県	0.16	1.42	17	東京都	0.04	1.04	33	北海道	▲ 0.03	1.12
2	宮崎県	0.15	1.63	17	滋賀県	0.04	1.43	33	長野県	▲ 0.03	1.43
3	鳥取県	0.13	1.60	17	三重県	0.04	1.40	35	千葉県	▲ 0.04	1.18
4	長崎県	0.12	1.57	17	愛媛県	0.04	1.39	36	青森県	▲ 0.05	1.24
5	富山県	0.09	1.46	17	高知県	0.04	1.36	36	茨城県	▲ 0.05	1.27
5	山口県	0.09	1.47	22	石川県	0.03	1.38	36	埼玉県	▲ 0.05	1.17
5	大分県	0.09	1.49	23	山梨県	0.02	1.40	39	静岡県	▲ 0.06	1.33
8	和歌山県	0.07	1.39	23	岡山県	0.02	1.39	40	群馬県	▲ 0.07	1.32
8	島根県	0.07	1.57	23	香川県	0.02	1.45	40	新潟県	▲ 0.07	1.27
8	福岡県	0.07	1.33	26	愛知県	0.01	1.35	42	山形県	▲ 0.13	1.32
11	兵庫県	0.06	1.31	26	大阪府	0.01	1.22	43	宮城県	▲ 0.15	1.09
11	奈良県	0.06	1.25	28	福井県	0.00	1.50	44	秋田県	▲ 0.16	1.18
11	広島県	0.06	1.40	28	京都府	0.00	1.18	44	栃木県	▲ 0.16	1.24
11	熊本県	0.06	1.52	30	岐阜県	▲ 0.01	1.36	46	岩手県	▲ 0.20	1.21
15	佐賀県	0.05	1.53	31	神奈川県	▲ 0.02	1.17	47	福島県	▲ 0.22	1.27
15	鹿児島県	0.05	1.54	31	沖縄県	▲ 0.02	1.70				

▲日本経済新聞社編『新データで読む地域再生』(2024年　8～9頁)

それでは、徳島県がなぜ合計特殊出生率が全国一位の改善率なのかをみていきましょう。それには２つの理由があります。

まず、徳島県では、産後の負担軽減と円滑な復職を後押ししていることがあげられます。

具体的には、徳島県内の８割にあたる20市町村が、妊娠中や出産後に専門家の相談を受けやすい「産前・産後サポート事業」を展開しています。中でも、徳島県美波町では、町内で出産した母親の９割が相談会に参加しております。こうした取組から、出産後も働き続ける女性が増加しているということです。

２つ目は、徳島県の企業の子育て支援が厚いことがあげられます。

具体的には、徳島県では厚生労働省が行う、子育てサポート企業の認定制度「プラチナくるみん」の認定企業の割合が2023年３月末で全国１位の7.8％です。これは、２位の静岡県の33.1％の２倍以上で、全国平均の５倍近いということです。

また、プラチナより基準の低い「くるみん」認定企業数は57.4％でこれも全国１位です。

さらに、官民の女性管理職比率（2020年）も19.6％で全国１位。2005年の女性管理職比率からも5.5ポイントも上昇しています。

したがって、徳島県では、結婚して妊娠出産というライフイベントに向き合いながら継続して働いていけると思える環境づくりや、そうした生き方を応援するしくみが整ってきているということが合計特殊出生率のアップにつながっているといえると思います。

つまり、最近の若い人たちのマインドに合致しているのだと思います。

以上から、冒頭私が申し上げた、会津の地域づくりを進めていくためには、一言で言えば、「女性と若者に選ばれる会津地域になること」が、会津の未来のために必要なことであると述べたことになります。

２　会津地域の可能性　～会津の繁栄こそが、福島県を豊かにする～

皆さんは、そうはいっても、過疎地域で、高齢化率も高く、そのうえ急激に人口は減り、千葉県より広い面積に、わずか25万人しか住んでいない。さらに2050年には14万人まで人口が減少すると予測される会津地域の未来に可能性はあるのだろうかという疑問になられると思います。

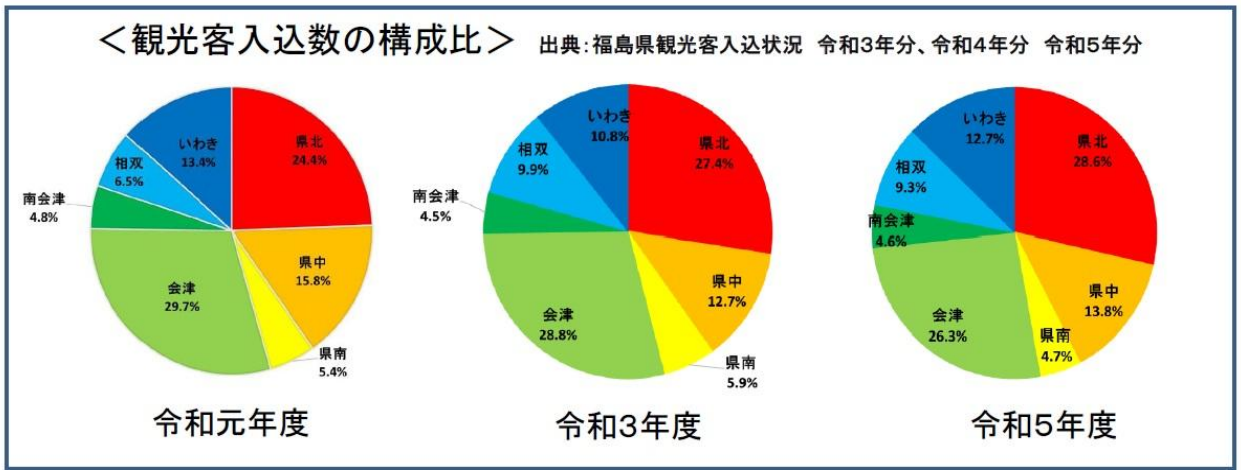
まず、私は、「会津地域に未来の可能性はある」と断言します。その疑問にお答えしていきたいと思います。

私は、会津の繁栄こそが、福島県を豊かにすると思っています。

（１）観光客入込数

具体的に説明します。人口減少が避けられない今、地域活性化の活路は交流人口の増加です。福島県で交流人口を増加させる直球の施策は観光です。福島県の観光客の入り込み数を見ますと、本県の観光は、会津が中心です。

【図表 10】



コロナ前の令和元年度の福島県内の観光客は順に、会津が29.7%、県北24.4%、県中15.8%です。

コロナ禍の令和３年度は、会津28.8%、県北27.4%、県中12.7%です。

コロナが５類になった令和５年度は、１位が県北に代わって28.6%、会津26.3%、県中13.8%となっています。

このデータは注意が必要です。

県北、県中の観光客と会津の観光客はダブルカウントになっているということです。

例えばスカイラインを経由して、又は土湯温泉を経由して会津に入ってきた、逆に会津から福島にスカイラインや土湯温泉を経由して行った客は、県北と会津にダブルカウントされるということです。

つまり、最終目的地のみでカウントしたら、圧倒的に会津なのです。会津を最終目的地にして、県北、県中から入ってきて、観光して帰って行く。ゆえに、会津に魅力がないと福島市や郡山市に観光客は来ない。会津の魅力が高まれば、同様に経由地である福島市と郡山市が潤う。ゆえに、会津地域に投資をすることが大事なんです。

また、同時に、会津地域自身も自らの地域を磨かなければならないのです。

（２）会津五街道

只今、私が申し上げた「会津の魅力が高まれば、同様に経由地である郡山と福島が潤う。会津に投資をすることが大事」という構図は、実は江戸時代から築かれています。

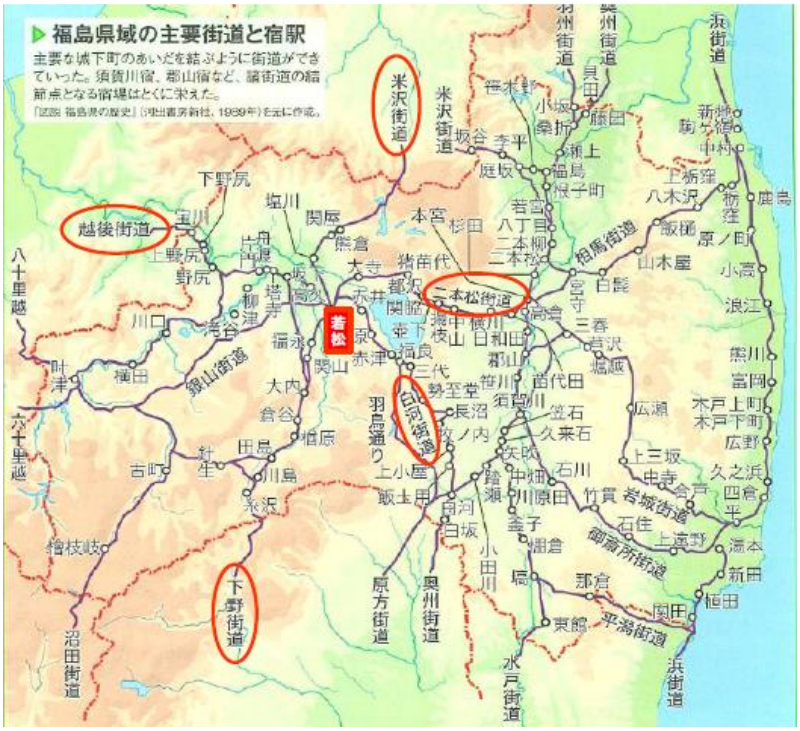
それが、会津五街道です。

1604年（慶長9年）江戸幕府は、日本橋を起点とする５街道という５つの幹線道路を整備しました。東海道、中山道、日光街道、奥州街道、甲州街道がそれです。道中には宿場を設け、五街道を経て日本中の隅々にまで幕府の支配が及ぶようにしました。これと同じものが、会津にあります。

1649年（慶安２年）に保科正之公は、５つの街道を幕府に届け出ました。それが、越後街道、下野街道、白河街道、二本松街道、米沢街道です。この５つの街道は、大町四つ角の制札場「札之辻（ふだのつじ）」（大町一之町（おおまちいちのまち））を起点に放射線状に伸びています。これは日本橋を起点とする五街道に匹敵します。これを江戸時代に会津藩に認められたということは、すごいことなのです。

【図表 11】会津五街道

1649年(慶安2年)に保科正之公が会津五街道を幕府に届出



なぜ、会津にこの五街道が整備されたのか。会津藩は五街道の一つ奥州街道から外れて内陸に位置していますが、仙台藩の伊達氏、米沢藩の上杉氏など外様大名に、にらみを効かす役目がありました。このときの道路整備が、今の道路網の基礎となっています。江戸時代の道路整備が、結果として令和の今の世も観光産業、地域振興にとって重要な位置づけをなしているということです。

【図表 12】

（３）会津地域の立地ポテンシャル

次ぎに、会津地域の立地ポテンシャルの高さです。

まず、日本地図を見てみましょう。

日本地図は、通常、図表12のように見るのが普通ですね。

しかし、私は、地図は回して見ることも重要だと思っています。

図表13です。このように回してみますと、どうです。会津は、環日本海の中心なのです。

【図表 13】

＜地図の見方が大事＞

会津は環日本海の中心

皆さん、このように見たときに、無限の可能性を感じませんか？

次ぎに、図表14をみてください。今後予想される震度６弱の地域です。ＮＨＫのホームページから引用しております。

会津は地震のリスクが低いのです。今後予想される南海トラフ巨大地震、首都直下型地震は、甚大な災害となると言われています。

そのとき、会津の役割の重要性がこの地図からも明らかではないでしょうか。

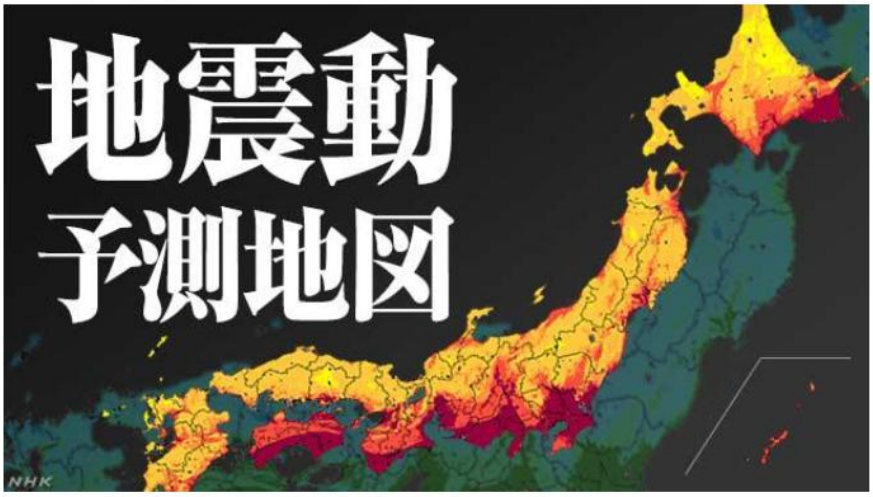
会津に日本の首都機能や経済循環の機能を補完する機能を持たせることが、日本の再生につながっていきます。

かつて首都機能移転の話がありました。福島県では阿武隈高地を候補地としていました。そこも当然魅力です。しかし、会津五街道があって、このように日本国内における地理的条件をみたとき、この会津の役割の重要性に気づかされると思います。

だからこそ、会津の地域づくりをしっかり行い、豊かな地域にしていくことが、福島県を豊かにし、日本の活力を高めると私は思うのです。

【図表 14】

地震動予測地図 震度6弱以上 各地のリスク



▲ NHKホームページ(https://www3.nhk.or.jp/news/special/saigai/natural-disaster/natural-disaster_10.html)参照

会津は地震のリスクが低い → 災害時には日本復興の拠点 → 首都機能移転

（４）日本の経済発展を支えた「奥会津の歴史と誇り」

ここで、会津の地域づくりを考える際に、忘れてはならないことがあります。それは、日本の経済発展を支えた「奥会津の歴史と誇り」です。

奥会津を語るときに私は、114年前の1910年(明治43年) に始まる只見川電源開発を忘れてはならないと思っています。

只見川電源開発は、昭和２１年の宮下ダムの完成後、柳津 (昭和28年)、本名(昭和29年)、田子倉 (昭和34年)、滝(昭和36 年)、大鳥ダムが昭和３８年までに順次完成し、平成元年の只見ダムの完成に至るように、日本の戦後復興、高度経済成長を支えてきました。

今日の私たちの生活は、この奥会津地域の皆さんのご協力と、奥会津地域の皆さんの日本と会津地域の未来を願う崇高なお考えがあってこそ享受できているという認識に立たなければならない。それに敬意を表して地域づくりを進めていかねばならないと思うのです。

そして、私には、忘れることができない言葉があります。只見線を鉄路で全線を復旧することを県で決めたとき、金山町の方から言われた言葉です。

「県は俺たちに、『ここに住み続けていい』って言ってくれたんだな」

この言葉の重みです。

「ここに住み続ける」。

奥会津の人々が住み続けるためには、いにしえから育んできた歴史と文化を更に磨き上げながら、未来につないでいける地域社会を作らなければならない。だからこそ、地域住民の活発な「創造活動」によって、地域の宝である文化芸術や豊かな生活文化を育みながら産業振興を図る「創造的地域づくり」が必要なのです。

（５）縄文時代から続く生活文化

続いて、会津地域には「縄文時代から続く生活文化」があり、それを守り育てていくことが非常に大切です。

会津地域は、喜多方、奥会津も含め、数々の遺跡が物語っているように、縄文時代から人々が住み、生活を営んできました。そして、この縄文時代の日本の人口分布は、約６割近くが、東北地方、関東地方に多くの日本人がいて、紀元前2900年ころの縄文時代晩期には、東北地方が半数を占めるに至っております。

このように、会津地域は古くから栄えてきているということ。そして、厳しい自然環境と共生しながら育まれている会津の文化は、縄文時代から磨かれてきた貴重なものであり、宝であることに目を向けてほしいのです。

会津若松の人は、武家文化以降のことを多く言いますが、会津全域を見てほしいのです。縄文文化、古墳、会津仏教文化、キリシタン文化、伝統工芸など、会津一円でみると素晴らしい地域の宝があります。まさに「会津はひとつ」で見るべきなのです。

この視点が、会津の地域づくりでは一番大事なところです。しかし、かけ声だけでは空回りします。

（６）広域連携で取り組む文化を中心とした地域づくり

私は、令和３年４月から令和５年３月までの２年間務めた会津地方振興局長時代に、会津地域１３市町村長の皆さんとともに、広域連携を推進するために、全国初となる「人生100年時代会津地域自治体広域連携指針」を策定しました。今日も、両沼郡の首長の皆さんが、会津塾にご参加いただいております。この「人生100年時代会津地域自治体広域連携指針」は、市町村長の皆さんと膝を交えて作り上げました。

この「人生100年時代会津地域自治体広域連携指針」の中に、会津地域の「文化政策」の根拠として、指針14と指針15に記載しております。

指針14は、「交流人口・関係人口の拡大」として、「地域の歴史文化など地域の宝を磨き、将来に向けて利活用を進めるとともに、各産業が連携して文化観光施策を展開し、交流人口・関係人口の増加に取り組んでまいります」と定めております。

指針15は、「文化芸術の振興、多様な働き方、新たな地域活性化」として、「文化は、人間が人間らしく生きるために極めて重要であり、人間相互の連帯感を生み出し、共に生きる社会の基盤を形成するものです。また、より質の高い経済活動を実現するとともに、科学技術や情報化の進展が、人類の真の発展に貢献するものとなるよう支えるもの」と書き込んであります。

「地域の持続可能な発展には、歴史や文化を踏まえた施策が重要」なのです。さらに指針には、次のように書き込んであります。

> 地域の文化は、豊かな自然を背景に、豊かな農作物や水産物がとれることで、農林水産業がその地域の基幹産業となり、やがてそれらがその地域独特の自然環境の中で発展しながら独特の食や工芸等が生まれ、地域の文化として育まれてきました。さらに、それらが製品化され、特産物、民芸品等として売られてきたように、地域文化は、古くから交流人口や関係人口の増加に寄与する重要な要素であり、地域経済の持続的発展を可能とするための必要な要素でもあります。

文化が、一次産業→二次産業→三次産業→一次産業・・・という経済循環を産み出すということであります。そして、文化は、人間が人間らしく生きるために、また、人間相互の連帯感を生み出し、共に生きる社会の基盤を形成し、地域の宝を磨き上げていくためには、個々の文化や風習がとても重要になってきます。

３　文化観光の可能性

（１）福島県の観光客の目的

ここで、福島県の観光客の目的をみてみたいと思います。第１位は「歴史・文化」になります。そのほかの項目は、自然・温泉・行祭事などで、会津に多い観光資源です。図の「その他」には「道の駅」が入っています。道の駅あいづ、道の駅猪苗代、道の駅磐梯、これらは県内で１位・２位を争っていますから、観光客の目的の半分は会津地域にあります。ですから、会津観光の方向性は、文化観光であって、それをするのが創造的地域づくりだということです。

【図表１５】

（２）福島県立博物館の企画展からみえる人々の文化への関心

ここで、会津若松市にある福島県立博物館は、歴史文化の拠点施設でもあります。福島県立博物館の入場者数から、県民の皆さんの歴史文化への興味関心の動向を考察してみたいと思います。

図表16をみてください。黄色で示したところが、戦国・江戸時代や武家文化などの企画で、割合的には多いです。しかし、それにまじって、ピンクの縄文時代や、水色の恐竜などの太古の時代のものもあります。注目は、8位の「興福寺と会津」や24位の中通りの仏教というように、仏教関係も人気があります。

【図表１6】福島県立博物館企画展入場者数ランキング（年報より髙野作成）

順位	開催年度	企画展名	開催日数	入館者数	一日当たり入館者数
1	H16	アート オブ スター・ウォーズ展	75	64,436	859
2	H8	秀吉と桃山文化	43	56,155	1,306
3	H3	シルクロード紀行	48	44,581	929
4	R4	新撰組展2022	51	43,673	856
5	H1	縄文の四季	48	43,282	902
6	H5	明治はじめて物語	48	42,437	884
7	H4	マンガ文化の源流	49	42,324	864
8	R1	興福寺と会津	39	41,211	1,057
9	H2	亜欧堂田善とその系譜	44	37,303	848
10	H7	探検貝化石ワールド	44	37,003	841
11	H4	恐竜のあるいた道	57	35,280	619
12	H3	縄文絵巻	57	33,558	589
13	H2	太古の生きものたち	51	29,607	581
14	H9	縄文たんけん	43	29,498	686
15	H2	秀吉・氏郷・政宗	55	29,270	532
16	H5	稲とくらし	58	29,011	500
17	H10	戦国の城	49	28,783	587
18	H30	美しき刃たち	34	27,281	802
19	H11	氷河時代	49	27,083	553
20	H6	会津大塚山古墳の時代	48	26,131	544
21	H1	町の成立とにぎわい	54	25,882	479
22	H6	玉堂と春琴・秋琴	37	25,492	689
23	S61	武家の文化	27	25,247	935
24	H1	中通りの仏教	55	23,737	432
25	S63	江戸時代の流通路	50	23,471	469

【図表１7】福島県立博物館企画展一日当たり入場者数ランキング（年報より髙野作成）

順位	開催年度	企画展名	開催日数	入館者数	一日当たり入館者数
1	H8	秀吉と桃山文化	43	56,155	1,306
2	R1	興福寺と会津	39	41,211	1,057
3	S61	武家の文化	27	25,247	935
4	H3	シルクロード紀行	48	44,581	929
5	H1	縄文の四季	48	43,282	902
6	H5	明治はじめて物語	48	42,437	884
7	H4	マンガ文化の源流	49	42,324	864
8	H16	アート オブ スター・ウォーズ展	75	64,436	859
9	R4	新撰組展2022	51	43,673	856
10	H2	亜欧堂田善とその系譜	44	37,303	848
11	H7	探検貝化石ワールド	44	37,003	841
12	H30	美しき刃たち	34	27,281	802
13	H6	玉堂と春琴・秋琴	37	25,492	689
14	H9	縄文たんけん	43	29,498	686
15	H4	恐竜のあるいた道	57	35,280	619
16	H3	縄文絵巻	57	33,558	589
17	H10	戦国の城	49	28,783	587
18	H2	太古の生きものたち	51	29,607	581
19	H11	氷河時代	49	27,083	553
20	H6	会津大塚山古墳の時代	48	26,131	544
21	H2	秀吉・氏郷・政宗	55	29,270	532
22	H8	福島の山岳信仰	44	22,339	508
23	H5	稲とくらし	58	29,011	500
24	H1	町の成立とにぎわい	54	25,882	479
25	S63	江戸時代の流通路	50	23,471	469

ここで、入館者数は、開催日数にも関係がありますので、一日あたりの入館者数でみてみることにします。図表17です。

そうしますと、１位には「秀吉と桃山文化」があがってきます。２位に「興福寺と会津」そして武家の文化が３位まで浮上します。22位に福島の山岳信仰があがってきます。ここでも、縄文文化や恐竜や太古のものが大きく、20位の会津大塚山古墳の時代も注目して良いでしょう。

注目は、７位のマンガ文化、８位のスターウォーズ、９位の新撰組展は今やゲームや2.5次元舞台で大人気の刀剣乱舞、12位の美しき刃たちも薄桜鬼というアニメの影響があり、いわゆるポピュラーカルチャーの影響を受けています。

以上のことから、人々の関心は、かなり幅広いということがわかります。企画展ランキングから、一般の人々の好みは、まず、縄文文化、古墳文化や恐竜の時代など、武士の時代以前にも興味が大いにあることがうかがえます。

そうしますと、これまでの観光施策が、人々の関心とのミスマッチが生じていたのではないかと気づかされます。

令和５年には奥会津で縄文展が行われました。奥会津に15,000人もの方々が訪れました。リピーターもいました。上記のように、博物館の企画展のランキングからみますと、決して不思議ではなく、人々の関心とマッチングしたといえます。

また、歴史・文化といいますと、ＮＨＫ大河ドラマも戦国時代が多いです。民放での時代劇と言えば江戸時代のものが多いですね。そうしますと、人々の好みは、戦国・江戸時代等、武士の時代であると思いがちです。しかし、戦国・江戸時代等武士の時代は当然好きですが、見落としてならないのは、キーワードは「文化」だということです。つまり、秀吉も「桃山文化」とセットで知りたいということです。武士の時代を通して、当時の様々な文化や生活を知りたい、触れたい、感じたいということです。

また、キャラクター、映画、アニメ、ゲームなどのポピュラーカルチャーの影響が大きいということもいえます。

令和４年度の新撰組展、土方歳三の愛刀「和泉守兼定」の本物があるということで大盛況でした。しかし、そこには『刀剣乱舞』による「刀剣ブーム」が背景にありました。

文化芸術の発信基地でもある博物館の企画展からみても、文化芸術の幅は広く、人々の関心も多種多様であることがわかります。

（３）福島県立博物館の企画展ランキングからみえる問題と課題

この企画展ランキングから問題と課題も見えてきます。

令和４年の秋に開催された「新撰組展」はすごい盛況でした。コロナ禍なのに若い女性や家族連れがたくさん来ました。歴代４位の43,000人もの観光客で、一日あたり800人以上の観光客が来館しました。しかし、その観光客を会津地域の周遊や地域経済に十分に生かし切れていなかったのはとても残念です。コロナ禍だからこそ、消費につなげたかったですね。

令和５年度の奥会津の縄文展の15,000人も十分に戦略をもって会津を周遊させられなかったのは残念です。

只見線のすごい賑わい。インバウンドも来ています。さらに只見線を地域活性化に活かすには、只見線の観光客の滞在時間をどう延ばしてくか。これが課題です。そうした中、個人や地域での頑張りはもの凄いです。多くのメディアでも取り上げられ、今や、奥会津・只見線は台湾でもとても有名です。しかし、素晴らしい取組なのですが、観光施設やイベント会場だけでの「点」なのです。それが地域的、時間的に関連したつながりになっていません。

今、必要なのは、観光施設やイベント会場を目指す「点」の観光から、周遊型の「面」の観光へ戦略的に移行することです。そのために、「会津はひとつ」で文化観光をしていく必要があります。

やっぱりＮＨＫ大河ドラマ「八重の桜」の効果はすごかったなあと思います。

「八重の桜展」の来館者数19,613人でも、経済波及効果は、東邦銀行の試算では111億円、日銀福島支店の試算では113億円と言われています。ここまでの経済波及効果のあるものは福島県内では他にはなかったと思います。新撰組展は、八重の桜展の来館者数の２倍を超えますから、200億円の経済波及効果があってもと思いたいところですが、そうではなかったし、単純にそのようには計算されません。ただ、大きな違いは言えます。八重の桜展では、「面」の観光が実現できたために、福島県立博物館を訪れた方々が会津地域内を周遊された。しかし、新撰組展は、「点」の観光であったがために、会津地域内の周遊が非常に少なかったということです。コロナの影響ということで片付けられないと思います。同じコロナ禍の令和４年に経済効果をアップさせたという事例が、足利市立美術館にあります。

（４）足利市立美術館の取組

先進事例として、足利市立美術館をご照会します。

足利市は、ゲームや2.5次元舞台で人気の刀剣乱舞とコラボして効果を出しています。

平成29年（2017年）と令和４年（2022年）に企画展を行っています。2017年は『刀剣乱舞』と初のコラボでした。そうしたところ、一日あたり1,260人もの来場者があって、足利市役所や地域の方々は、びっくりしたわけです。足利市役所発表の経済効果は30日間で４億2,000万円ありました。足利市役所は経済効果として発表しましたが、厳密に言えば消費額です。

これで、気をよくした足利市、2022年の市制１００年イベントをまた刀剣乱舞とコラボしようとしたのです。しかし、2022年は、コロナ禍

【図表１8】

	2017年 特別展 「今、超克のとき。 山姥切国広 いざ、足利。」	2022年 「足利市制100周年記念特別展 戦国武将足利長尾の武と美 ーその命脈は永遠にー」
開催期間	2017年3月4日(土) ～4月2日(日) (30日間)	2022年2月11日(金・祝) ～3月27日(日) (45日間)
来場者	37，820人	25，587人 （前回比▲12，233人）
一日当たり来場者	1，260人	568人 ※コロナ対策として入場制限
経済効果 (消費額)	約4億2，000万円	約4億8，000万円 （前回比　6，000万円増）

です。開催に賛否両論あったと聞きますが、結果やりました。

コロナ対応のため、入場制限をしなければなりません。結果、来場者数は、前回よりも12,233人も減りました。しかし、経済効果（消費額）は6,000万円アップし４億8,000万円となりました。一人あたりの消費額でみますと、2017年が11,100円であったのに対し、2022年は平均7,600円もアップの18,700円に上がったのです。

その秘策をみていきましょう。

企画展のメインは、「山姥切国廣」という日本刀の本物の展示です。作者は「九州日向住國廣（ひゅうがじゅうくにひろ）」と言います。安土桃山時代ですが、國廣が足利に滞在していたとき、足利領主だった長尾顕長（あきなが）の依頼で作成した刀で、国の重要文化財です。刀剣乱舞では、図表19の右上のキャラクターとして描かれています。企画展は、すごい賑わいで４時間待ちでした。

足利市の戦略は、まず、今、大人気のコンテンツ『刀剣乱舞』を活用したことにあります。次に、地元商店街とコンテンツ企業のニトロプラスがコラボして、スタンプラリー、各種コラボイベント、コラボグッツの販売等、やれることは、何でもやって、滞在時間を延ばす方策を展開しました。

その上で、旅行者に足利学校などに足を向けさせ、足利市の歴史と文化を学び、本物に触れてもらう機会（学び、体験感動）を提供するということをしました。

結果、リピーターが増加しました。北海道からも来ます。結果移住者も増加しました。

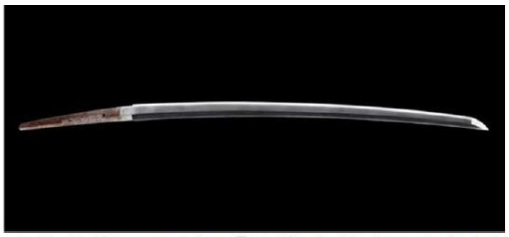
【図表１9】

ここで、令和４年の福島県立博物館での新撰組展を振り返ってみましょう。

新撰組展のメイン展示の一つ、土方歳三の愛刀「和泉守兼定」本物の展示がありました。この本物の力はすごかったですね。多くの方が食い入るように観賞していました。特に刀剣ファンの若い女性達の熱心な観賞ぶりには驚きました。お目当ては「和泉守兼定」なのだろうけれども、他の刀剣だけでなく展示物をしっかり観賞していて、「本物」の体験と「学び」の実践をしていました。

現在、「和泉守兼定」は、『刀剣乱舞』のほか「ゴールデン・カムイ」でも取り上げられ非常に人気があります。刀剣乱舞でのキャラクターとしても登場しています。新撰組展でも入口に巨大パネルがあって、多くの来場者が記念写真をとっていました。足利レベルのコラボがあれば、一人あたり18,700円の消費ですから約８億円の経済効果があったと期待されたかなあと思ったりしてしまいます。

【図表２０】



▲土方歳三の愛刀「和泉守兼定」(本物展示)

【図表２１】

▲刀剣乱舞の「和泉守兼定」

（５）足利市立美術館の取組から考える文化観光・創造的地域づくり

足利市の事例から「創造的地域づくり」で必要なことをまとめてみたいと思います。

一言で言えば、「点」の観光から「面」の観光へということです。

足利市も、2017年の企画展は、「点」の観光でした。それが、令和４年は「面」の観光へ戦略的に移行したんです。2017年は、確かに『刀剣乱舞』とコラボはしたものの、一部の企業にとどまったのです。また、市内の観光も「足利学校」の案内はしたものの周遊を狙うなどの戦略的なものではなかった。『刀剣乱舞』というキャラクターと山姥切国廣という本物の刀剣をコンテンツとしてとらえたコンテンツツーリズムの段階であったといえます。

しかし、2022年の企画展は、『刀剣乱舞』と単にコラボして終わりではなく、観光客に足利市内を周遊させ、体験させ、地元住民とのかかわりを持つ仕掛けをしていきます。その中で、観光客も地域の住民も、地域の歴史や文化について「学ぶ」「体験」する、「感動」することを仕掛ける。そして、観光客の「また来たい」という感情を引き出し、リピーターを確保することに、経済界も行政も一体となって取り組む。地域住民には「おもてなし」の心と、地域への「誇り」を醸成する。こうしたことをしていくことが、地域活性化につながると私は思います。

重要なのは、「本物」の体験です。いくら刀剣乱舞とコラボしても本物の刀がなければ人は来ません。前述のように、新撰組展でも、来場者は本物の「和泉守兼定」をじっくり見ています。加えて他の展示もじっくり見ます。本物の刀剣があるからそのストーリー、

歴史に興味がわきます。

このように、文化観光で一番大事なのが「本物」です。「本物」をどう見せるか。本物から全体をどう磨き上げるかにあります。そこに、コンテンツツーリズムからクリエイティブツーリズム（創造的観光）へ移行でき、観光客の周遊など経済効果、地域活性化が期待できることにつながると思います。

４　「誇り」と創造的地域づくり

（１）「誇り」と地域づくり

会津地域のみんなの願いは、会津地域の誰もが、誇りを持って会津に暮らし、豊かで自分らしい人生１００年時代を笑顔で健やかに生きていけることだと思います。

大切なのは、会津に住む「人」、会津に思いを寄せる「人」、主役は「人」です。

個々人にはそれぞれの人生があります。人生において、誰もが皆「主人公」です。

お金持ち、貧しい人、障がいのある人、悩める人、若い人、こども、高齢者、そう誰もが皆「主人公」なんです。

そこで重要なのが「誇り」です。

「誇り」は英語で「プライド」ですね。しかし、日本語でいう「誇り」が大事なんです。「アイツ、プライド高いよね」と良く聞きますが、「誇り高き」となると良い意味です。「プライドを捨てよ」とは言いますが、「誇りを捨てよ」とは言いません。逆に「誇りを持て」となります。ですから、日本語でいう私たちの「誇り」を大切にしなければならないのです。

「誇り」を育むには、結果として、自分を認める、住まう地域を認めることです。つまり、「自己肯定感」が重要だと思います。そして「地域」を認める。自分たちの地域が素晴らしいと認め、肯定する。それが、「自信」となります。

「誇り」が生まれると、まず、誇りを守ろうという動きになります。自分を意識し、地域を意識する。そのことが「守る」「保全する」「未来につなぐ」そういう思いと行動になります。地域の魅力発見と保全ですね。そして、その行動は、さらに自分を磨こう、地域の魅力を高めようと「挑戦」する意欲が生まれます。やがてそれは地域みんなの共通意識になって、未来につなぐ地域づくりになります。

「地域づくり」に積極的なところ、成果を出しているところは、自己を肯定し、自己を認め、「誇り」をもっています。だから様々な挑戦が生まれています。先進地域に行くと、「どうしてこんな力がみんなで出せるんだろう」と思います。それを見ていて、「誇り」ということの大切さに気づかされます。

「誰もが皆『主人公』」である会津地域。「誇り」を育む会津地域。それが「挑戦」し続けることができる「輝く未来の会津」につながると思います。

（２）「誇り」にこだわるもう一つの理由

私が、地域づくりにこだわる理由は、前述のように、「誇り」→自己肯定・地域肯定→地域の魅力発見と保全→地域づくりへの挑戦というプロセスがうまれるからです。

なぜ「誇り」にこだわるのか。さらに、もう一つの理由があります。

それは「人間は感動する唯一の動物」だからです。地域の人が幸せを感じていないところに、そこに人は寄り付かない。人は住み続けない。なぜ、子どもは、会津を出て行くのですか。福島を出て行くのですか。会津での生活に私たちは満足していますか。会津での生活に幸せを感じていますか。

そこに住む人々の中に「誇り」と「幸福感」に満ちあふれていれば、そこに人は集まるんです。それがあれば、子どもたちは、大学に行っても戻ってきます。「誇り」と「幸福感」が、住み続けるための大切な要素です。

今、移住政策盛んです。私も移住政策は大事だと思います。しかし、現在、行政が行っている移住政策、どこかずれていると私は思います。巨大予算をかければいいとは思いません。

有効な移住政策は、地域の「誇り」と「幸福感」を充実させる政策です。

まず、教育、医療、高齢者や障がい者への福祉、子育てに力を注ぎ、日本一の教育と医療、福祉、子育て環境を整える。そのために、どういう政策、つまり公共経済政策と行政政策をするかなのです。

今、急激な人口減少に伴う地域の衰退をどう克服していくか、地域の活性化をどう図っていくか、これが大きな課題です。その解決策を一言で言えば、「誇り」の醸成だと私は思います。

本日の開会の挨拶でその一部の考えを申しました。

長く続く過疎問題の問題、会津を離れた若者が帰ってこない。福島県内の高齢化率上位10位以内のほとんどが会津地域の市町村が占める現状。ここにきて、さらに急激に進む人口減少。

ここで、今、誰もが危機感をもっています。私もあります。ただおそらく、私のもつ危機感は若干違います。それは、「誇りの空洞化」への危機感です。

この長引く過疎化や県外へ流出する人口の問題が、会津にもたらしたものは何か。

皆さん、会津人の誇りを失いかけてはいませんか。「会津には何にもなくて」って、つい言ってしまいませんか。こうしたことを「誇りの空洞化」といいます。私は、この「誇りの空洞化」が起きているのではないかと危機感をもっています。少し詳しくお話ししましょう。

皆さん、ここで少し若返って、自分が今18歳の高校３年生になったと思ってください。今、就職を考える時にきました。さて、どこに就職しようか。両親や祖父母はできれば会津に残って欲しいという。その気持ちは理解する。しかし、これから、この会津でずっと働いて過ごしていく自分の人生を描こうとした時に、なぜか描けない。そういう高校３年生の皆さんが多いのです。

一方、大学に進学した。大学３年生になった。就職活動を始めた。両親は会津に帰ってこいという。しかし、ふるさと会津に帰って会津で一生を過ごす自分の人生の絵が描けない。

この会津で生まれた。高校生まで過ごした。さて、これから先、この会津で働き、暮らし続ける意味は何だろう。

東京の大学を出た。故郷会津に戻ろうか。はて、その答えが見いだせない。こうしたことを「誇りの空洞化」といいます。

縄文時代から会津の歴史は育まれ、豊かな自然によって、様々な美味しい農作物がとれ、それが特産物になり、様々な生活の知恵、工夫から伝統工芸が生まれ、それが流通して、これまで会津は全国にその名を広めてきた。

私たちには誇れる自然、歴史、文化、風土、産業、地域の宝、そして会津の人々がいる。もう一度その誇りを取り戻そうではないか。会津で生まれ育った人、会津に移り住んだ人、誰もが、老若男女問わず、会津に暮らす一人一人が「会津に生きる、会津に生活する」そこに誇りをもてるようにしていくことが私は非常に重要だと思います。

先ほども申しましたが、誇りをもつと、その誇りを守ろうとする。さらにその誇りを磨こうとする、そこに挑戦が生まれるのです。誇りをもつことは未来への挑戦となる。

本日の私のこの講演の冒頭は、人口減少対策を考える上で、まずはこれまでの少子化対策が、若者の意識とは、ずれていることを認識することが大事と申しました。そして、結婚しても働き続けながら自己実現を図ることができるよう、雇用対策が必要だと申しました。さらに移住対策も重要だが、教育、医療、福祉、子育てに力を注ぎ、日本一の教育と医療、福祉、子育て環境を整えることが何よりも大切だと申しました。私は、これらの公共政策と併せて、地域住民の心理的側面である、この心の問題である「誇りの空洞化」対策を車の両輪としてやっていかないと本当の人口減少対策になっていかないと私は思います。そうしたことを皆さんと一緒に考えながら一緒に汗をかいていきたいというのが「会津地域文化藝術フォーラム」であります。

５　地域づくりと文化・芸術

なぜ、私が、文化や芸術を重視するのか。それは、文化・芸術の前では誰もが皆平等だからです。

どんなに豊かな方、貧しい方、障害のある方、ない方、子ども、お年寄り、誰でも美味しいものを食べたとき、同じく「美味しい！」って笑顔になります。美しい風景を見れば「きれいだなあ」と思います。

一方で、厳しさもあります。

全盲のピアニストの辻井伸行さん、ダウン症の書道家の金沢翔子さんなど、障害があっても、素晴らしい芸術性があります。障害の有無、年齢、性別、国籍も超えて、誰もが感動します。しかし、評価は健常者と同じ土俵で評価されるという厳しさもあります。

ゆえに、文化・芸術の前では誰もが平等なのです。そして、文化・芸術は「感動」を与えます。人間は感動する唯一の動物です。その感動の先には「誇り」が醸成されます。

地域づくりも、このように文化と芸術を基本にすることが重要です。皆さん、ディズニーランドを思い描いてください。ディズニーランドには様々な経済循環と新しい技術が集結していますね。ベースにあるのは、芸術と文化です。

差別のない平等な世界からこそ、持続可能な政策が実現でき「誇り」が醸成され「幸福度」が高まり, 豊かな人生が送られるのだと思います。

６　会津の地域づくりは広域連携が重要

会津は、生活圏が複数市町村に及びます。どこの家庭でも、職場、学校、病院、買い物、みんな自分の市町村の中だけで完結できません。個人の生活圏が広域なんです。ここが、福島市や郡山市、いわき市など他の地域との大きな違いです。

図表２２をご覧ください。これは、会津管内１３市町村の職員の皆さんが、勤務している自治体内に住んでいるのか否かを調べた結果です。３年前のデータですが、大きくは変わっていないと思います。

この表からは、柳津町、北塩原村、湯川村などは、役場職員の半分以上が自分の町村には居住していなくて、会津若松市や喜多方市､会津坂下町など、周辺市町村から通っている状態が伺えます。また、会津地域の約半数の12万人が居住する会津若松市でさえ、職員の約２割は、周辺市町村から通勤しています。

【図表２２】

各市町村の居住地調べ　(R3.8.24現在)

	職員数	うち市町村内		うち市町村外	
会津若松市	910	744	81.8%	166	18.2%
喜多方市	543	466	85.8%	77	14.2%
北塩原村	63	29	46.0%	34	54.0%
西会津町	127	97	76.4%	30	23.6%
磐梯町	76	40	52.6%	36	47.4%
猪苗代町	173	153	88.4%	20	11.6%
会津坂下町	165	120	72.7%	45	27.3%
湯川村	64	32	50.0%	32	50.0%
柳津町	83	40	48.2%	43	51.8%
三島町	46	34	73.9%	12	26.1%
金山町	68	55	80.9%	13	19.1%
昭和村	50	44	88.0%	6	12.0%
会津美里町	209	142	67.9%	67	32.1%
会津地域計	2,577	1,996	77.5%	581	22.5%

▲人生１００年時代会津地域自治体広域連携指針 14 頁参照

上記は、会津地域１３市町村職員の状況でありますが、民間企業でもほとんどが同じ状況にあります。つまり、いろんな場面において会津の地域住民の生活圏は広域なのです。

ここで大きく懸念されることがあります。柳津町です。地球温暖化の今、１３年前に激甚災害となったあの2011年夏の新潟福島豪雨災害のような甚大な災害が起きたらどうするかということです。隣の三島町だって被災している。そうしたら、三島町からの支援は期待できない。自分の町の中で何とか災害の初期対応できなければならない。しかし、町役場に集合できる職員は半分しかいない。それではどうするか。そのときに柳津町から会津坂下町や会津若松市に通っている公務員は、逆に会津坂下町や会津若松市に行けないのだから、彼らが全員柳津町に登庁して災害対応にあたる。一方、会津若松市にいる柳津町職員は、会津若松市役所に行って、国と県との調整に入る。そうしたことが必要になってくると思います。これは、夢物語でないです。県庁は既にその仕組みになっている。だから、各市町村の業務を標準化して共通化すればできると思います。

これは災害の事例ですが、生活圏が広域の会津の地域振興は広域で考えるべきなのです。その理由として、私は５つ考えられると思います。

（１）真に必要な住民サービスの提供も広域でないと対応できない

住民の生活圏が広域であれば、教育・医療・福祉をはじめとする行政サービスも広域でなければ対応できません。会津地域内でもすでに水道やゴミ処理など、広域での対応があります。病院がない町村もあります。会津地域の皆さんに真に必要な住民サービスの提供も広域でなければ対応できません。製造業の企業誘致による市町村財政の充実を考えても、誘致市町村以外からの雇用も考えなければ企業立地に結びつきません。大規模小売店も商

圏と従業員の雇用は一つの市町村では収まりません。

教育・医療・福祉・環境などの行政サービスをはじめ、雇用、交通、観光等の産業経済や労働政策も広域対応でなければ「真に必要な住民サービスの提供」にはならないのです。

（２）住民の意識も、皆「会津」

会津の人々が県外に行ったとき、「どこから来たの？」って聞かれると、昭和村や磐梯町、下郷町、只見町など、町村名に会津の冠がなくとも、まずは「会津から来た」と答えます。会津１７市町村の共通の住民の意識は、皆「会津」である。市町村域をこえてまで同じ地域の意識になるのは、他の地域ではほとんどみられないことだと思います。

この地域に対する帰属意識が広い地域間で共通であり、住民の皆さんのアイデンティティーでもあることは、地域づくりにとって、非常に有益なことであります。

（３）人口減少・高齢化に対応した社会経済活動

①　地域の総人口が約25万６千人、2050年には14万８千人

会津地域の総人口は南会津地域を含めても約25万６千人です。うち半数に近い11万７千人が会津若松市に住んでいます。第２位の人口規模の喜多方市は４万４千人です。会津若松市と喜多方市を合わせても約１６万人です。この人口構造が、2050年には、会津17市町村の合計が１４万８千人と推計されています。現在の会津若松市と喜多方市を合わせた人口よりも少なくなると予想されます。

こうした人口規模で、会津１７市町村の経済活動を好循環させようと考えますと、会津全域を経済圏として成り立たせるようにしていかねばなりません。

②　面積が千葉県よりも広い、または神奈川県の２倍よりも広いという広大さ

会津地域の面積は、17市町村合わせた面積は千葉県よりも広いです。また、神奈川県の２倍よりも広いです。こうした広大な面積に25万人が住んでいます。

この広大な面積の中で、如何に経済効率を高め、行政サービスの充実を図り、豊かな生活を続けていけるようにするのかが大きな課題です。このことからも広域の対応が求められます。デジタル技術が進化している今は好機ですね。例えば「ＤＸ」により、行政はもとより、経済活動の効率化をはかり、住民の一人一人がお互いに心が通い合い、豊かに笑顔で健康に暮らせるようアナログの行政サービスを充実させることが重要ですね。

（４）重大な危機に対する地域の対応力強化

2011年の東日本大震災と原子力災害、同年の新潟・福島豪雨災害、令和元年の東日本台風などの大規模災害、令和２年からの新型コロナ対応など、最近相次ぐ重大な危機からは、個々の市町村単位では対応しきれないことが明白で、お互いに連携協力しなければ対応できないということを誰もが実感しました。その教訓をいかす必要があります。住民と行政、企業等がしっかりと連携協力して、地域住民の「命と財産を守る」ことを実践していけるよう重大な危機に対する地域の対応力を強化するためにも広域連携は必要不可欠です。

（５）文化・芸術は地域づくりの基盤（ＯＳ）

人口減少下の今、地域資源を守り、育て、未来に挑戦し続けるためには何が必要かということを今日は、ずーっと話しています。論点はここに戻ってきます。

そのためには「誇り」の醸成が必要であること、そしてそれは文化芸術を核とすべきことを申してきました。

先程も申しましたが、地域の文化は、豊かな自然を背景に、豊かな農作物や水産物がとれることで、農林水産業がその地域の基幹産業となり、やがてそれらがその地域独特の自然環境の中で発展しながら独特の食や工芸等が生まれ、地域の文化として育まれてきました。さらに、それらが製品化され、特産物、民芸品等として売られてきたように、地域文化は、古くから交流人口や関係人口の増加に寄与する重要な要素であり、地域経済の持続的発展を可能とするために必要なものです。

ゆえに、そうした地域づくりのために、ＤＸを活用しながら広域連携を推進することを私と会津地域１３市町村長が心を一つにして、全国初となる「人生100年時代会津地域自治体広域連携指針」を策定しました。

文化・芸術は地域づくりの基盤、今風の言い方であればＯＳとして、地域住民の活発な「創造活動」を生み出し、地域の宝である文化芸術や豊かな生活文化を育みながら産業振興を図る「創造的地域づくり」が必要なのです。

７　会津の地域振興への一つの提言「テーマパーク会津」構想

最後に、会津の地域振興策として、一つ提言したいと思います。

それは「**テーマパーク会津**」**構想**です。

この構想については、私が前の仕事の福島県会津地方振興局長時代に提言したものです。令和３年８月２５日に行われた「あの災害を忘れない平成２３年７月新潟・福島豪雨災害から１０年『あいづの今』シンポジウム」で私が初めて発言したものです。

そのとき、具体的なお話をしたところ、福島民報、福島民友の各地元新聞にも大きくとりあげられました。現在も福島県のホームページ[2]と YouTube[3]で私の発言内容を確認できます。その後、この私の考えにご賛同いただいた会津若松商工会議所の澁川会頭からも様々な場面でご発言もいただいております。

この構想は３年前に提言しましたが、当時の会津地方振興局長の業務多忙につき、未完のままになっています。現在、私は、会津地域文化藝術フォーラムの代表理事であり、福島県社会福祉協議会副会長、そして福島大学客員教授という立場にありますので、何とかこの構想の実現に尽力したいと思っています。

この「テーマパーク会津」構想は、「会津を一つのテーマパーク」として位置づけて、観光だけでなく、農業や地場産業をはじめとする各種産業、教育、医療、福祉など様々な施策を展開できないかというものです。

皆さん、先程、会津は生活圏が広域で、広域連携で進めるべきと言う話をしました。

---

[2] https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/01240a/fukushimagouu.html

[3] https://www.youtube.com/watch?v=PDBLAKC_1RA

これを別の視点でみてみましょう。「るるぷ」「ことりっぷ」などの旅行情報誌を思い浮かべてください。どれも、１７市町村をひとくくりにして、「会津」と表現しています。

また、会津への移住相談、多くなりました。しかし、移住希望者は、会津に行きたい、会津に住んでみたいのであって、会津若松市とか湯川村とか、具体的な市町村名まで特定していない方がほとんどです。単に「会津に移住したい」と相談に来ます。そこで、相談者のお話しをお聞きし、ご要望にあった市町村をご紹介します。それは、会津美里町だったり、磐梯町だったり、会津坂下町だったり、決して会津若松市や喜多方市というメジャーなところとは限りません。

また、私たち会津地域の住民の意識もそうです。先程も申しましたが、県外に行って、「どこから来たの？」って聞かれたとき、昭和村や只見町など、町村名に会津の冠がなくとも、まずは「会津から来た」と答えます。１７市町村の共通の住民の意識は、皆会津なのです。ここでも「会津はひとつ」なんです。

つまり、「会津はひとつ」で「会津１７市町村」を一束にした「会津」ブランドでしっかり売ろうということです。

だから「テーマパーク会津」構想なのです。

もう少し具体的にお話ししましょう。

テーマパークといえば、ディズニーランドですね。皆さん、ディズニーランドをイメージしてみてください。

旅行雑誌や旅行パンフでは、会津地域を猪苗代・磐梯山エリア、喜多方エリア、尾瀬・檜枝岐、大内宿、奥会津というエリアやテーマで紹介されますね。これは、ディズニーランドでいえば、アドベンチャーランドやファンタジーランドなどの７つのテーマランドや、

【図表２３】

イメージは、会津ディズニーランド

	ディズニーランド	会　津
エリア	7つのテーマランド ・アドベンチャーランド ・ファンタジーランド　等	猪苗代・磐梯山エリア 会津鶴ヶ城・飯盛山白虎隊エリア 喜多方エリア 尾瀬・檜枝岐　奥会津 磐梯朝日、尾瀬国立公園　越後三山只見国定公園　等
アクセス網	JR京葉線、JR武蔵野線 オムニバス（ランド内移動乗り物）	JR只見線、JR磐越西線 会津鉄道、野岩鉄道、会津バス
道路	入口から放射線状にのびるネットワーク道路	会津五街道で整備された会津若松を起点とするネットワーク道路
楽しみ	各パビリオン	大内宿などの宿場町、温泉、会津仏教文化である神社仏閣 猪苗代湖、磐梯山等
食事	各エリアごとのレストラン	喜多方ラーメン、そば、ソーズカツ丼 こずゆやにしんの山椒漬けなどの郷土料理
お土産	キャラクター商品	地酒、あわまんじゅう、赤べこ 桐、本郷焼、漆器などの伝統工芸　多数
パレード	パレード	田島の祇園祭（ぎおんさい）での花嫁行列、会津祭りでの提灯行列や藩公行列
宿泊	ホテル	温泉　旅館　ホテル
従業員	キャスト	観光関係事業者　ガイド
ストーリー	各アトラクション	歴史と文化　縄文遺跡　伝統行事 仏教文化、キリシタン文化、武家文化 齋藤清、野口英世、瓜生岩子・・・。 ロケ地、イザベラバード　等々

© ２０２４一般社団法人会津地域文化藝術フォーラム

47

各パビリオン、アトラクションと同じです。

只見線、磐越西線、会津鉄道、野岩鉄道は、ＪＲ京葉線やＪＲ武蔵野線のように、ディズニーランドへのアクセスであるとともに、「テーマパーク会津」内の各エリア・パビリオンを結ぶ、大動脈・連絡線でもあります。

また、先程申し上げましたように、会津には古くから会津五街道があります。参勤交代でも使われた下野街道、白河街道、「塩の道」ともいわれる「越後街道」、風光明媚な「二本松街道」、歴史的つながりを結ぶ「米沢街道」。

これらの街道には、大内宿などの宿場町、温泉、会津仏教文化である神社仏閣をはじめ、こずゆやにしんの山椒漬けなどの郷土料理、桐、本郷焼、漆器などの伝統工芸を結ぶ街道であるとともに、歴史と文化をつなぐ美しいストーリーがあります。

イザベラバードが会津を旅した『会津紀行』も有名ですね。

さらに、ディズニーランドの売りの一つは、パレードです。　テーマパーク会津には、田島の祇園祭での花嫁行列、会津祭りでの提灯行列や藩公行列があります。そのほか各地域での祭りは、パレードと同じですよね。

そのように考えていくと、いろいろと発想がわいてきます。

今、奥会津で展開している赤坂憲雄先生を中心として展開している「奥会津ミュージアム」構想も「テーマパーク会津」の考えと同じだと思います。会津全域には豊かな地域資源があります。

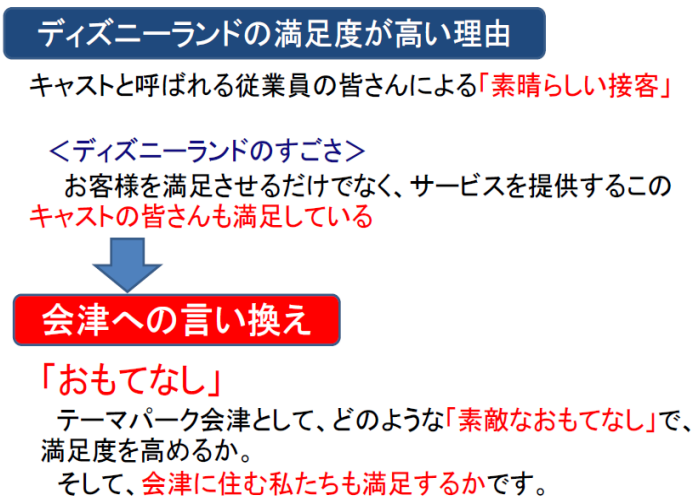
令和３年の秋には、只見柳津県立自然公園が越後三山只見国定公園に編入されました。喜多方、西会津、柳津、三島、金山、只見の６市町村にまたがり、会津坂下町から喜多方市にかけての只見川下流部と阿賀川の河川区域も併せて国定公園になりました。そうしますと、（日高山脈襟裳国定公園に次ぐ）全国２番目の広さになりました。その他、会津地域の自然公園には、会津地域は、国立公園として「磐梯朝日」と「尾瀬」、国定公園として、この「越後三山只見」、そして県立公園として「大川羽鳥」、すごく素晴らしいテーマパークです。

ディズニーランドの満足度が高まる背景に、キャストと呼ばれる従業員の皆さんによる「素晴らしい接客」についてよく言われます。一度でも、行かれた方は実感することだと思います。

ディズニーランドがすごいのは、お客様を満足させるだけでなく、サービスを提供するこのキャストの皆さんも満足しているということです。ここが大事なんです。

これを私たちに言い換えれば「おもてなし」です。テーマパーク会津として、どのような「素敵なおもてなし」で、満足度を高めるか。そして、会津に住む私たち

【図表２４】



も満足するかです。会津地域の住民の皆さん全てが、テーマパーク会津のキャストとして「おもてなし」したらすごい。

「おもてなし」には「通貨」が必要です。「会津財布」も「ばんだいコイン」も一部の小さいエリアで行うのではなくて、会津全域でやる。「テーマパーク会津」に位置づければ、テーマパーク内通貨としてできるのです。

今、ガイドの育成が課題ですが、地域を案内する人をツアーキャストとして育成するのもいい。実際にサポート事業ガイド育成もしている。今後、只見線を目標に来るインバウンドにもガイドは欠かせない。

会津地域１７市町村の私たち住民が、おもてなしのキャストであってガイドであったら面白いでしょう。以前あった会津検定です。私どもの会津地域文化藝術フォーラムでは、この会津検定を会津１７市町村版として復活させようと考えています。そうしますと、みんなが会津のことを勉強します。歴史、文化、地理、風土、そうしていくうちに更なる地域愛が生まれ醸成される。そうすると「誇り」が生まれ「挑戦したくなる」。これって、先程、「誇り」と挑戦をした話につながるのです。

私が「テーマパーク」と表現しているのは、観光や地域づくりは、楽しくなければならない。わくわくしなくちゃならない。そして、そこに生活する人は、幸せと豊かさを実感しなければならない。そのためには、地域に「誇り」、日常に「安全と安心」がなければならないんです。

ずっと笑顔で、心に残るもの。そう思うから「テーマパーク」です。縄文文化、古墳、会津仏教文化、キリシタン文化、伝統工芸、自然公園、ジオパーク、いろいろあるが、楽しくやる工夫が大事です。

観光客が会津に来てつまらないと喜多方ラーメン食べて、ソースかつ丼食べて地酒飲んで、鶴ヶ城観て終わってしまう。それもいいですが、せっかくなら、誰もが楽しめるようテーマパークという意識で、奥会津も含め会津全域を整備したいと思うのです。ずっと笑顔で、心に残る「テーマパーク会津」にしたいです。

先程の足利市の成功事例は、言い換えれば、足利市立美術館を中心として、テーマパーク足利を作ったとも言えます。

会津でも福島県立博物館で、三の丸プロジェクトが展開されています。これは文化観光です。

昨年、会津大学で、２コマ授業をもちました。学生さんにこの話をしました。講義後のアンケートで一番多かったのが、「テーマパーク会津構想に参画したいので情報ください」でした。若い皆さんにも受け入れられる考え方だと思います。

いろんな案を皆さんと考え、実行していきたいと思います。

皆さんとともに考え、ともに汗をかいて、素晴らしい会津の未来を創っていきましょう。

ＳＤＧｓや脱炭素、再エネルギーに焦点をあてた「ＳＤＧｓ教育旅行」もテーマパーク会津ならできる。この視点に立つと「ワーケーション」も「わくわく楽しいもの」として実現できる。奥会津地域の振興も含め、会津の１７市町村がそれぞれの歴史、文化、自然などを、楽しめるように「地域の宝」や「おもてなし」を磨き、会津に来た人も住んでいる人もみんなが、楽しくて満足度が高い笑顔あふれる「テーマパーク会津」として整備し

ていくことができたらなあと思います。

そこで、大事な施策が２つ。通貨と交通です。通貨は先程言いました。交通のお話しをしましょう。

会津地域では、鉄道や空路、自家用車で目的地の近くまで行き、そこから二次交通としての路線バスやシャトルバスを利用して目的地まで行けるようにすることが大きな課題です。

鉄道網は、磐越西線、会津鉄道、野岩鉄道、只見線とありますが、そこからバスへの接続が大きな課題です。コミュニティバス、デマンドバス。いろいろありますが、私はＤＭＶを提案したい。

ＤＭＶとはDual Mode Vehicle(ﾃﾞｭｱﾙ･ﾓｰﾄﾞ･ﾋﾞｰｸﾙ) の略で、これは、御承知のかたもおられると思いますが、バスに鉄道の車輪がついていて、公道も鉄道も両方走れるものです。今、世界で初めて徳島県で走っています。もともとはＪＲ北海道で開発していたものを徳島県で引き受けて実用化したものです。

実際、私は令和４年１２月に視察に行ってきました。徳島県で実用化しているのは、マイクロバスの大きさです。

今後の開発によっては、通常の大型バスの大きさでも当然実用化は可能です。ＤＭＶですと、只見線を走り、只見駅からバスモードに切り替えて南郷を経由して田島にくる。田

【図表２５】

島から鉄道モードに変わって、湯野上に行く。湯野上からまたバスモードになって大内塾経由して会津美里に行って会津若松に戻るなどのルートができる。

磐越西線でも、喜多方駅から裏磐梯経由猪苗代に向かい、磐越西線で会津若松に戻るなどのこともできる。様々なルートが考えられます。

バスですから、団体客への対応、学校の送迎にも可能、活用は広がってくると思います。只見線の課題は電車の本数が朝夕に限られていることですね。日中は、ほとんど列車が走らない只見線は、ＤＭＶの実現には非常に可能性が高いです。

私は、こうしたテーマパークに会津をしていきたいと思うのです。

今日は、人口減少の問題から、地域づくりの話題までいろんなことを申しました。これから座談会になります。

皆さんから、様々なお話しをお聞きしたいと思います。よろしくお願いいたします。

◆◇◆座談会で出た主な意見等◆◇◆

１　「無い物ねだり」から「あるもの探し」への転換

「会津にはこれがない」「あれがない」だから、「これが欲しい」「あれも欲しい」と「無い物ねだり」が実に多い。会津には他にない良いものがたくさんある。

「無い物ねだり」から「あるもの探し」への転換が大事である。

２　高齢者の柔らかさを活かす地域づくり

高齢化が問題になっているが、高齢者が悪いわけではない。むしろ高齢者には若者にない「柔らかさ」がある。本日は山形県尾花沢市から参加した。尾花沢市での地域づくりの体験から実感している。その地域にあるものを活かすためにも、高齢者の柔らかさを地域づくりに活用することも大事ではないか。

３　「川」をテーマに会津の地域振興を考える重要性

会津地域の地域振興を考える場合に「川」の視点は重要。歴史的にみても、「川」と会津の暮らし、政治、産業等大きく関わってきている。

具体的には、会津地域にどうしても感じてしまう閉塞感を突破する切り口として、会津の誇り＝和醸酔酒の源となる水と稲作文化の歴史的背景を踏まえ、主に阿賀野川（只見川、阿賀川ほか）の流域を単位にした防災や環境を意識したＤＸを活用した関係人口の掘り起こしを念頭に、そのアプローチについて「川」をテーマとして議論する必要があると思う。

４　会津地域の未来の景色を形にできたらいい

会津地域の未来の可能性について、その未来の景色を形にして示すことができたらいい。その際に、目的を明確にして示すことで、会津地域の皆さんの未来への希望と取組につながるのではないか。

５　「平和」などをテーマとした発信も必要

会津の地域づくりには、「平和」などをテーマとしたイベントがない。会津地域　の外に発進していくにはそうした視点が大事である。例えば、長岡市で毎年８月１日に行われる「バルーンリリース」は「平和祭」として行われる。会津でもそうした視点で行うべきではないか。

６　教育の力が重要

本日、様々な意見を聴いてきて、どれも素晴らしい意見であった。これらは、社会教育でもある。学校での教育だけでなく、地域の人々が一生涯学習できる社会教育の充実も必要だ。地域づくりには、教育の力が欠かせないと考える。

特 別 企 画

利き酒体験　＜会場：つきない＞

（末廣酒造・鶴乃江酒造・大和川酒造・会津酒造）

会津の福島県公式イメージポスター「来て。」集結　＜会場：なんだべや＞

会津１７市町村の観光パンフ勢ぞろい

＜会場：なんだべや＞

特別企画１

利き酒体験

４つの酒蔵から３銘柄の参加をいただき、１２種類のお酒をＡＢＣの３区分にわけて利き酒を楽しんでいただきました。

末廣酒造
純米大吟醸　杏
純米酒　嘉永蔵
あまずっぱいすえひろ

鶴乃江酒造
純米大吟醸　会津中将
純米吟醸　ゆり
純米生酒　鶴の江亀の尾

大和川酒造店
純米大吟醸　四方四里
純米寒造り甘美酒　弥右衛門酒
純米辛口　弥右衛門

会津酒造
純米大吟醸　会津
大吟醸　田島
山の井黒　天の川

特別企画２・３

会津の福島県公式イメージポスター
「来て。」集結
会津１７市町村
観光パンフレット勢ぞろい

住んで
呑んで
来て
来て
来て
来て
呑んで
来て
来て
来て
ふくしま
来て
来て
来て
来て
来て
来て
来て
来て
来て
味わって
来て
来て
呑んで
味わって
住んで
ふくしま

金山町
三島町

会津若松市

猪苗代町
北塩原村
喜多方市

只見町
南会津町
下郷町
昭和村
会津美里町

マスコミ報道

各新聞社にも大きく取り上げていただき、大きな反響がありました。

福島民報

地域の宝 再発見を

文化藝術フォーラム
16日「会津塾」初開催

一般社団法人会津地域文化藝術フォーラムは16日、会津若松市の県立博物館を会場に「会津塾」を初めて開催する。酒造りを巡る文化や暮らしなどをテーマに、会津の魅力を発信し、地域づくりへとつなげる。参加無料で、関係者が来場を呼びかけている。

2部構成で午前10時からの第1部・基調講演では、県酒造組合特別顧問の鈴木賢二さんと鶴乃江酒造の林ゆりさん、県立博物館の企画展「ふくしまの酒造り」を担当する大里正樹主任学芸員が「会津の酒と文化と暮らし」のテーマで鼎談（ていだん）する。

午後1時40分からの第2部は二つの分科会を設ける。第1分科会は福島の酒造りと酒を取り巻く文化・芸術、地域がコンセプト。学芸員が案内する県立博物館企画展の観覧や、地元の蔵元によるトークなどを催す。

第2分科会は映画を活用した会津の地域振興、人口減少社会における地域づくりについて考える。いずれも午後4時30分まで。

酒造り巡る文化などテーマ

鼎談や分科会

特別企画として、有りなど地元の第一線で活躍する人々が講師を務める。フォーラムの高野武彦代表理事、川名興県立博物館長は「会津塾を通して地域の宝、誇りが見えてくる。ぜひ参加してほしい」と話している。

会津塾への参加を呼びかける高野代表理事（左）と川名館長

「会津塾」の申し込み用QRコード

【会津文藝】などから申し込む。氏名と受講希望の講座名（複数可）、夜学への参加の有無などを記載の。参加無料。問い合わせはフォーラム事務局 電話070（1332）4839へ。

▲2024年11月6日福島民報
Webでも報道いただきました。
https://www.minpo.jp/news/detail/20241105120580

会津地域文化芸術フォーラムは16日午前10時から、会津若松市の県立博物館で会津塾を初めて開く。福島の酒造りや会津の地域づくり、文化芸術をテーマにした講演やトークを繰り広げる。参加無料。

酒造りなどテーマ

16日・県立博物館

申し込みフォームにつながるQRコード

第1部では県酒造組合特別顧問の鈴木賢二さん、鶴乃江酒造の林ゆりさん、同博物館主任学芸員の大里正樹さんが「会津の酒と文化と暮らし」と題して鼎談する。

午後の第2部は、二つの分科会に分かれる。第1分科会は学芸員の解説付きで展示会場を巡った後、蔵元トークを行う。第2分科会は映画「霧幻鉄道」口見線を300日撮る男」の安孫子亘監督による講演などを行う。

特別企画として、利き酒体験を行うほか、午後6時からは別会場で鈴木さんらを招いた夜学も開く。夜学は会費5千円。

事前申し込みが必要。QRコードかメール（info@aizu-bunge.or.jp）に氏名、受講希望講座名、夜学への参加の有無、連絡先を記入する。

同フォーラムの高野武彦代表理事と同博物館の川名義則館長は「皆さんと地域の魅力に触れ、次の地域づくりに生かしたい」と来場を呼びかけている。

初の「会津塾」参加を

場を呼びかける高野表理事㊧と川名館長

▲2024年11月10日福島民友

民報 2024年（令和6年）11月17日（日曜日） （4）

映画活用、地域振興考える

若松で「会津塾」スタート

一般社団法人「会津地域文化藝術フォーラム」（高野武彦代表理事）による最初の会津塾が16日、会津若松市の県立博物館で開かれた。酒造りを巡る文化や会津地方の地域づくりをテーマに、有識者らが鼎談（ていだん）などを通じて郷土の魅力を発信した。

フォーラムは昨年7月に発足。会津の文化や暮らしを磨き上げ、創造的な地域づくりへの貢献を目指す。地元の第一線で活躍する人々が講師を務める会津塾を主要企画に位置付けている。今回は基調講演や題材別の分科会を繰り広げた。

分科会では、JR只見線復旧の軌跡に焦点を当てたドキュメンタリー映画「霧幻鉄道」の安孫子亘監督と渋川恵男会津若松商工会議所会頭、高野代表理事が登壇し、映画を切り口にして地域振興につなげる方策を語り合った。

この他、会津清酒の杜氏（とうじ）や県立博物館学芸員らの講演や、利き酒体験などを繰り広げた。

映画をテーマにして鼎談する（左から）高野代表理事、安孫子監督、渋川会頭

▲2024年11月17日福島民報

「会津塾」講演やトーク

酒造り、地域づくりテーマ

蔵人の生活も紹介

会津地域文化芸術フォーラムは16日、会津若松市の県立博物館で会津塾を開いた。福島の酒造りや会津の地域づくりなどをテーマにした講演やトークが繰り広げられた。福島民友新聞社などの後援。

蔵人の生活や苦労などを語る登壇者

2部構成で行われた。第1部では県酒造組合特別顧問の鈴木賢二さん、鶴乃江酒造（会津若松市）の林ゆりさん、同博物館主任学芸員の大里正樹さんが「会津の酒と文化と暮らし」と題して鼎談した。

第2部は二つの分科会に分かれ、映画監督の安孫子亘さんの講演や蔵元トークなどが行われた。蔵元トークでは、博物館専門学芸員の小林めぐみさんがコーディネーターを務め、パネリストとして大和川酒造店（喜多方市）の佐藤弥右衛門会長、会津酒造（南会津町）の渡部文一取締役、大里さんが参加した。佐藤氏と渡部氏は蔵人の生活や苦労、蔵元と地域の関係などを紹介。2人は「酒蔵は地域社会と関わりながら生活してきた」と話した。

▲2024年11月22日福島民友

その他河北新報でも報道されました。
https://kahoku.news/articles/20241118khn000049.html

『第１回 会津塾 報告書』

２０２５（令和７）年３月

一般社団法人会津地域文化藝術フォーラム
代表理事　　髙 野 武 彦
（国立大学法人福島大学 行政政策学類 客員教授）
（社会福祉法人福島県社会福祉協議会副会長）
理事兼事務局長　山 中 宏 行
（株式会社プロジェクト会津 代表取締役社長）
アドバイザー　　川 延 安 直
（元福島県立博物館副館長）